組合再建満十周年記念

東京船具業界史

東京船具同業組合

至誠一貫

目次

一、巻頭の言……東京船具同業組合理事長　加藤政次郎…1
二、再建満十周年記念式典……2
イ　式次第……2
ロ　式辞……東京船具同業組合理事長　加藤政次郎…3
ハ　祝辞……東京船具同業組合相談役　成瀬勝蔵　…4
二　祝辞……東京船具同業組合相談役　塚本常五郎…4
ホ　感謝状受賞者氏名……6
ヘ　被表彰者氏名……8
ト　記念式典収支決算書……10
三、終戦後の組合運営について……13
四、組合員の現況……18
五、関連産業の現況……61
イ　造船産業……61
ロ　海運産業……63
六、回顧録……67
イ　回顧……谷村　勇…67
ロ　過ぎし日の思い出……加藤　政次郎…67
ハ　船具商の今昔……篠田　隆太郎…73
ニ　想い起すまま……斎藤　清三…77
ホ　大正初期からの私の経歴と思い出……稲垣　勝蔵…80
ヘ　数々の思い出……岡田　光雄…82
ト　再建満十周年に寄せて……望田　桂一…84
チ　感謝……石田　恒男…85
リ　船具屋の思い出話……座談会…87
七、明治初期に於ける東京港……90
八、船具品の価格の変遷……92
九、明治時代の船具商の所在地……95
十、東京船具業界歴代名士人事録……97
索引
写真

巻頭の言

東京船具同業組合
理事長　加藤政次郎

嘗つて鈴木弥兵衛、宇田川清兵衛氏等と共に東都船具業界に君臨した大村五左衛門老は、戦争末期の昭和十八年に八十四才の天寿を完うして此の世を去られた。

老が存命中私に次の如く漏らされたことがある。「自分は安政六年に生れ徳川時代を経て、更に明治、大正、昭和と八十四年の長い世代を此の目で仔細に見て来たが、世の中の余りにも激しい移り変りは誠に夢の様で、是も長生きした御蔭だ」と。それから間もなく敗戦となり、樺太、台湾、朝鮮、満州を手離し、残る四つの島に閉じ込められ、人間の洪水で芋を洗う様な情ない姿になり果てた。

然し戦後の人類科学の発達は全く目覚ましく、原子力時代から宇宙時代へと変貌し、永久に神秘に閉ざされていた月の裏側迄写し出される時勢になつたのだから、ただただ驚きの外はない。

顧りみれば東京に初めて正式な船具商が生れ出たのは恐らく明治初年に蒸気船が走り出してからの事と思う。それから幾星霜数限りなく船具屋が出現したが、時代の風波と共に栄枯盛衰を繰り返し、旧い時代における業者の苦心や理想も時の流れと共に人々の記憶から消え去り、今日では当時を回想する資料も仲々得られなくなつた。それ故、今にして当時の苦心の思い出や、その他の資料を蒐集せねば永遠にその機会を失してしまうだろう。私はそれを恐れ、それらを再建満十周年の歩みと共に記録に残したいと考えた。またそうすることこそ一方では再建満十周年を記念する最大の祝意の表現と考え、茲に本誌を編纂する事にした。

編纂に当り各位の心からなる御協力を厚く感謝申し上げ度い。

再建満十周年記念式典

東京船具同業組合が再建発足してから、茲に満十周年を迎えたので四月二十六日、午後二時より、鉄砲洲神社に於て記念式典を盛大に開催した。

開会に先立ち、全役員参集の下に神前に於て厳かな修祓式が挙行された。

定刻稲垣監事の司会に依り、加藤理事長の式辞続いて成瀬・塚本両相談役の祝詞があった後、組合創立功労者である羽成福太郎氏外十一名に感謝状と記念品とが贈呈された。

また、永年勤続者、株式会社高浦船具店斎藤寿勝氏外百四十四名に対しても、表彰状及び記念品が贈られ、斎藤清三氏並びに高浦船舶(株)斎藤寿勝氏からそれぞれ受賞者を代表して謝辞が述べられた。

続いて第二部に移り、リーガル千太外曲芸等の演芸があった後、祝賀懇親会に移った。参列の幹部役員一同の顔に厳粛のうちにも十年一昔をここまで発展させた喜びの微笑が流れ盛会の内に、篠田隆太郎氏の閉会の辞に次いで塚本相談役の発声で万歳を三唱し、茲に記念式典は滞りなく終了した。

東京船具同業組合

再建十周年記念式典プログラム

一、期　　日　昭和三十三年四月二十六日
一、場　　所　鉄砲洲神社
一、集合時刻　午後二時〇分
一、神前修祓式　二時一〇分
一、開会の辞　二時三〇分　稲垣勝蔵
一、理事長挨拶　理事長　加藤政次郎
一、表彰状並に記念品贈呈
一、授賞者の謝辞　役員代表　斎藤清三
一、同　　社員代表　高浦船舶（株）斎藤寿勝
一、祝　　辞　相談役　成瀬勝蔵
一、同　　同　塚本常五郎
一、閉会の辞　三時三〇分　副理事長　篠田隆太郎
一、記念撮影
一、祝　　宴　三時四〇分

余興

イ、曲　芸　宝家竹二郎
ロ、漫　才　リーガル千太、天才・秀才
ハ、〃　浅田家彰吾・雪恵

式辞

東京船具同業組合
理事長　加藤政次郎

本日東京船具同業組合の再建満十周年の記念式典に当り、時節柄御多端の中を組合員を始め、永年勤続、店、社員の方々の多数御出席を賜りました事は、誠に感謝に堪えない次第であります。

さて過去に於て多くの先輩諸氏の御努力に依り、輝しい栄誉と伝統を守り続けて来た東京船具組合も、大東亜戦争遂行のため一時其の運営を休止するの止むなきに至りましたが、昭和二十三年四月、故田中前会長を始め成瀬、塚本、両相談役等の御尽力に依り、当鉄砲洲神社に於て創立総会を開催し再建発足されたのでありまして、爾来茲に十年の歳月は夢の間と経過致したのであります。

此の間敗戦に依る疲弊と困憊の極に達した国内情勢の下にあって組合運営も幾多の苦心を要したのでありますが、幸いにして、役員並に組合員一同のたゆまざる努力と、一方、常に業界の第一線にあって御奮闘下さる店、社員の皆様方の真剣な御協力に依りまして、逐年優秀な業績を収め、以て本業界の発展に多大の寄与貢献をなし得た事は洵に御同慶に堪えないところであります。つきましては、多年に亘る皆様の御労苦と御功績に酬ゆるため今回心ばかりの催しを企画致しましたる処、組合員一同並びに外部諸賢の深い御理解と、熱誠溢るる御賛助を賜りまして、茲に当初予期した以上の盛大な式典を開催出来ました事は衷心より感激に堪えない処であります。茲に謹んで各位の御芳情に対し深甚の謝意を表する次第であります。

此の意義深い再建満十周年を迎えるに当り、組合員一同更に奮起して我が船具業界の健全な発展と、併せて日本経済興隆のため一意邁進せられん事を念願する次第であります。

特に多年勤続者として本日表彰の栄誉に輝く皆様には我が船具企業が祖国再建の基幹産業たる海運造船産業の一翼であると云う事を深く心に銘記されると共に、次期我が業界を担う重責を痛感し、其の使命達成のため愈々精進されん事を切望して止まないものであります。

御承知の如くわが国海運は戦前昭和十六年度に於きましては八百万総トンの船腹を保有し世界第三位の海運国として其の威容を内外に誇ったのでありますが、今次の大戦に依り其のほとんどを失うに至ったのであります。

然るに戦後十余年の計画造船を中心に極力復興に努力した結果、現在四百四十万総トンの船腹を持つに至り敗戦の痛手も漸やく茲に癒え更に増強の一途をたどりつつあります。

一方造船工業の戦後の発達も実に目覚しく既に技術生産量の面に於て先進国たる英、米、独を凌駕し、輸出相手国も今や世界各地に及び更に南米、東南ア、方面の有望市場の開拓に鋭意努力中でありますので、こうした海運造船産業の今後の飛躍的発展を思いまする時、吾が業界の前途は明るく希望に充ち正に洋々たるものがあると堅く信じます。

此の秋に当り皆様には健康に一段と御留意され各自企業の繁栄と、我が東京船具業界発展のため更に一層の御努力賜らん事を重ねて懇請申し上げ私の御挨拶と致します。

祝　辞

東京船具同業組合
相談役　成瀬勝蔵

終戦後再建の東京船具同業組合の十周年記念式が本日茲に催されるに当り、御挨拶を申上げる機会を与えられましたことは誠に光栄に存ずる次第でございます。

顧みますれば、昭和二十三年敗戦日本の虚脱状態のもと、惨憺たるインフレに苦しんでようやくこの悪夢より目覚め、あらゆる方面に産業再建の気運がみなぎり復興が緒につきました秋、本組合も亦同業各位が使命の重要性に鑑み、期せずして共に相扶け業界発展のために努力するの気魄に一致して結成せられました。そうして茲に十年、この間組合員各位におかれても経営に種々御苦心のあったことと存じますが、目覚しい再建日本、殊に海運造船界の復興の歩みと共にわが業界も新しい息きふきに本組合の今日あるを得ました。これもとより組合発足の精神、即ち団結と協調に基くことですが、理事長初め役員、組合員、各位の一方ならぬ御骨折にかかることは申すまでもなく、他方従業員各位の並々ならぬ御協力の賜と衷心感激いたす次第でございます。

終戦後の数年間わが国の産業界は全く麻痺し物資は極度に欠乏してインフレは日に月に昂進し正常な経済活動を貫くことの如何に困難でありましたかは、相互身に泌みて体験いたしたところであり、この間に少なからず戦前よりの経験者が離職、戒は脱落したにも拘らず、今日ここに御列席の皆さんは、良くいばらの道に耐え努力せられましたことは誠に感銘の他ございません。

本会が再建十周年記念祝典を挙げられるに当り多年の勤続者表彰を中心行事とせられたことは、当然とは謂いながら大いに賛意を表したいと存じます。

戦後国土はせばめられ資源に恵まれず、過剰の人口をかかえたわが国が生き抜くためには貿易立国の以外切り開く途がない事は御承知の通りで、その一翼を担う造船海運業の関連業者たる我々の職責は誠に重く、且つ、光栄あるものと自負いたします。

船具商の何たるかは残念ながら広く識られておらず蔭の労苦は一通りのものではありません。これに従事するものは豊富な知識、経験、忍耐を要しますのでここに御参列の皆さんは既に貴重な体験を身に着けられた方でありますが、今日の日を一つの人生修業の契機として業界と当組合発展のため、彌々自重御加餐せられ、後輩の扶掖指導にも力添えを致され、将来経営の衝に当らるる日の一日も早からんことを衷心御祈り申上げてこの佳き日の式典の御祝辞といたします。

祝　詞

東京船具同業組合
相談役　塚本常五郎

本日の良き日を下して、東京船具同業組合再建十周年を記念して式典を催されるに当り、御招待に預り、御祝詞を申述ぶることは私の最も光栄とする所であります。

此組合は古く戦前からあつたが、戦争のため中絶の止むなき次第となり、一時空白の時代があつたのを、十年前に有志諸氏のお骨折りで再建され、初

代理事長故田中真一氏の一方ならぬ御努力で再建の実を結ぶに至ったが、不幸にして氏は病魔に侵され、遂に不帰の客となられたのは返す返すも哀惜の至りであった。

無し乍ら専務理事として活躍された、現理事長の加藤政次郎氏が、満場一致を以って推され、特に加藤理事長の円満にして且つ余人の到底及ばぬ才能を以って、今日の繁栄と成績を作り上げられたる事を深く敬意を表する次第であります、と同時に副会長始め各役員諸賢の努力と其の功績は忘れる事の出来ぬものと信ずる次第であります。

次に本日表彰される各役員及び、多数の各店社の社員の皆様は、当組合又は各店社に於ける永年勤続と優秀なる模範の方々であり且つ功労者であります。此上共に苦難の道も一層険しい事と思いますが、大いに奮闘されん事を切望します。

最後に当組合の益々発展向上と、理事長始め各役員諸氏の健康をお祈りして祝詞と致します。

感謝状

貴下は本組合の役員として多年船具業界の革新と事業発展の為め献身努力せられ其の功績は洵に顕著であります

今回本組合再建満十周年に当り其の功績に酬ゆるため記念品を贈呈し聊か感謝の微意を表します

昭和三十三年四月二十六日

東京船具同業組合

理事長　加藤政次郎

羽成福太郎　殿

感謝状受賞者氏名

（順序不同）

東京船用品株式会社　代表取締役	篠田隆太郎
大和産業有限会社　取締役社長	岡田光雄
株式会社綱庄石田商店取締役社長	石田恒男
株式会社羽成製帆所　取締役社長	羽成福太郎
斎藤船具店　店主	斎藤清三
株式会社五十鈴商会　取締役社長	角谷佐蔵
大洋船具株式会社　代表取締役	山中健之助
石川商工株式会社　取締役社長	石川惣太郎
株式会社鈴春商店　取締役社長	望田桂一
稲垣株式会社　取締役社長	稲垣勝蔵
田中産業株式会社　取締役社長	田中弘道

計　十一名

表　彰　状

貴殿入社以来勤続〇〇年に及び其の間職務に格勤精励し社業の発展に寄与せられた行為は業界の均しく賞賛するところであります

茲に本組合再建十周年に当り其の労に酬ゆるため記念品を贈呈し栄誉を表彰します

昭和三十三年四月二十六日

東京船具同業組合

理事長　加藤政次郎

高浦船舶用品株式会社

斎藤寿勝殿

表彰状受賞者の勤続年数について

上記表彰状の勤続年数については、戦時中企業整備等で複雑な経緯もあり、一方各店、社の取り扱いも一定しないのであった。そこで、本誌には単に勤続十年以上、五年以上十年未満とだけ記載することにした。

併し乍ら、本組合には二十年以上の永年勤続者も多数居るので、交附に先き立ち予め所属勤務先や経営者の意向を充分聴取し、表彰状にはそれぞれ勤続年数を明確に記入した事をご承知されたい。

勤続十年以上表彰者氏名

（昭和三十三年現在）

勤務先	氏名
石川商工株式会社	美沢　栄一
〃	石橋　為吉
〃	渡辺　政雄
〃	篠崎　定吉
〃	坂井　寛
〃	小宮　国治
〃	古屋　衛敏
稲垣株式会社	望月平太郎
〃	佐伯惣兵衛
株式会社綱庄石田商店	滝本　福一
有限会社岩田商店	松本　俊雄
〃	三上　国松
株式会社羽成製帆所	羽成　秀男
〃	羽成　良雄
〃	江畑　幸治
東京船用品株式会社	桑原　正人
〃	山田　盛久

勤務先	氏名
東京船用品株式会社	山本　徳治
〃	竹内　亮克
〃	伊藤清太郎
〃	中邨　吉勝
〃	佐久間　弘
道源加工所	道源　覚
太田船具合名会社	内堀　善高
大和産業有限会社	岡田　賢一
大亜工業株式会社	丸川　まつ
〃	長谷川イキ
株式会社三共商店	川上　長一
〃	篠田　茂雄
垂見船具株式会社	平野　高春
〃	前原　暲三
〃	水谷　定一
田中産業株式会社	近藤　栄吉
高浦船舶用品株式会社	斎藤　寿勝
高浦船舶用品株式会社	木村　秋男
三洋商事株式会社	大内　泰介
〃	久野　舜一
〃	林　勝
〃	出口　敏夫
〃	大原　渡
〃	妹尾　功
〃	秋元　辰雄
〃	武藤　房二
〃	岡村　二郎
大洋船具株式会社	森田　博夫
〃	桑原　光雄
〃	瀬倉四郎太

勤務先	氏名
有限会社的場船具工業所	小沢一太郎
東京藤井産業株式会社	大葉　経男
〃	杉田　良久
古沢工業株式会社	伊東　英夫
〃	栗原　啓
〃	森谷　隆次
橘工業株式会社	阿久津　恵一
株式会社鈴春商店	吉野　市郎
〃	鈴木　福治
〃	佐藤　雅一
杉田船用品株式会社	斎藤清三郎

計　五八名

勤続五年以上十年未満被表彰者氏名

（昭和三十三年四月現在）

勤務先	氏名
石川商工株式会社	藤間　幹介
〃	丸山　豊
〃	石山　福蔵
〃	竹村　菊雄
石川商工株式会社	池田　志ず
〃	山本善次郎
〃	須田　国雄
〃	中橋　健次

石川商工株式会社　三井　輝子
〃　岡部　朝子
〃　石川　芳正
〃　海老原　進
〃　山下　節子
〃　千場長四郎
稲垣株式会社　稲垣　栄次
〃　室橋　茂男
〃　熊倉松三郎
〃　大賀　一弘
〃　佐伯　博
株式会社綱庄石田商店　鈴木　鼎吉
〃　神田　明知
〃　久保佐恵子
株式会社羽成製帆所　羽成　弘
株式会社堀内商店　川崎　豊
〃　岩本　卓二
東京船用品株式会社　伊藤　守久
〃　名和　公司
〃　佐藤　仁作

東京船用品株式会社　原田　京子
〃　萩原　光枝
〃　大野　和男
太田船具合名会社　小林　和美
〃　柳原千代子
大亜工業株式会社　桃木　源吉
〃　高須　文二
〃　近藤　舜竜
〃　田中　澄子
〃　土田　正夫
〃　山崎　悟
垂見船具株式会社　常世田仲司
〃　田中　延秋
田中産業株式会社　北村　正雄
〃　東川　保重
田中船用品株式会社　斎藤　喜平
〃　田中　国夫
高浦船舶用品株式会社　小向　靖弘
〃　木本　哲夫
〃　家田　鞠江

三洋商事株式会社　村田　武雄
〃　加藤　馨
〃　津村隆之輔
〃　松本　守一
〃　鈴木　ツタ
〃　松波　貫一
〃　鈴木　義宏
〃　谷田しづ子
〃　小泉忠次郎
〃　岩本　益夫
〃　鈴木　森玉
橘工業株式会社　福井　明義
〃　福井　敏子
〃　渡辺　金一
〃　西川　甲子
〃　真田　武
〃　高橋　てつ
大洋船具株式会社　鈴木恵美子
〃　瀬倉　唯夫
〃　鈴木　美得

大洋船具株式会社　気田　美春
〃　石田文次郎
東京藤井産業株式会社　大塚　義雄
〃　野田　豊穂
〃　中橋　君江
〃　黒沢　太一
〃　黒沢　太
株式会社青木商会　川辺　稔
〃　三島　勲
三好産業株式会社　山田　盛重
〃　加藤　茂次
〃　阿部道四郎
〃　津守　勲
〃　金山　とも
株式会社鈴春商店　中山　万助
杉田船用品株式会社　村山　進一
杉田産業株式会社　生野　和敏
(株)木村商店東京支店　伊藤　脩
氷川船用品株式会社　池田　市郎
計　八六名

再建満十周年記念事業収支決算報告書

東京船具同業組合

理事長　加藤政次郎

各位殿

謹啓　時下晩春之候　貴社益々御清祥の段御悦び申し上げます

扨而　本組合再建満十周年記念事業に対しましては、組合員一同の真剣な御協力と本業界関連メーカー各社の熱誠溢る御支援に依り、茲に意義深い式典を盛大に挙行する事が出来、組合傘下百四十四名の永年勤続、社店員諸君に深い感動を与え、多大の成果を収め得ました事は業界発展のため、洵に喜びに堪えません。尚此の外、東京船具業界史編纂事業も引続き行われますが一応式典の終了を見ましたので会計収支決算書を作成し、謹んで御報告を申し上ぐる次第であります。

茲に本事業遂行に当り多額の御寄附と絶大なる御支援御協力を賜りました事は、誠に有難く役員一同を代表し衷心より厚く御礼申し上げます。

昭和三十三年五月二十五日

敬具

再建満十周年記念事業収支決算書

一、金　四六八、〇〇〇円　収入総額　左記　の通り

一、金　三二三、八五二円　支出総額　同

一、金　一四四、一四八円　差引残額　東京船具業界史編纂費へ繰越

一、収入内訳

イ、組合員寄付者御芳名

三〇、〇〇〇円　三洋商事株式会社　殿
二〇、〇〇〇円　石川商工株式会社　殿
二〇、〇〇〇円　東京船用品株式会社　殿
二〇、〇〇〇円　大亜工業株式会社　殿
二〇、〇〇〇円　大和産業株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　株式会社五十鈴商会　殿
一〇、〇〇〇円　株式会社羽成製帆所　殿
一〇、〇〇〇円　東京藤井産業株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　太田船具株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　大洋船具株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　橘工業株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　垂見船具株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　高浦船舶用品株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　田中産業株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　田中船用品株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　株式会社綱庄石田商店　殿
一〇、〇〇〇円　永田船具加工株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　古沢工業株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　日光商事株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　斎藤清三商店　殿
一〇、〇〇〇円　三好産業株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　杉田船用品工業株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　杉田産業株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　株式会社鈴春商店　殿
五、〇〇〇円　有限会社岩田商店　殿
五、〇〇〇円　稲垣株式会社　殿
五、〇〇〇円　株式会社堀内商店　殿
五、〇〇〇円　株式会社道源加工所　殿
五、〇〇〇円　株式会社的場船具工業　殿
五、〇〇〇円　株式会社三共商店　殿
三、〇〇〇円　氷川船用品株式会社　殿
二、〇〇〇円　有限会社加藤船具商会　殿

計　金　三三五〇、〇〇〇円

ロ、関連メーカー寄附者御芳名

一〇、〇〇〇円　敷島帆布株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　東洋繊維株式会社　殿
一〇、〇〇〇円　鐘ヶ淵染色工業株式会社殿
六、〇〇〇円　浪速製綱株式会社　殿
五、〇〇〇円　日本ペイント株式会社　殿
五、〇〇〇円　日本鋼線鋼索株式会社　殿
五、〇〇〇円　日本油脂株式会社　殿
五、〇〇〇円　日本信号旗株式会社　殿
五、〇〇〇円　東京製綱株式会社　殿
五、〇〇〇円　関西ペイント株式会社　殿
五、〇〇〇円　春日製綱株式会社　殿
五、〇〇〇円　株式会社綱金製綱所　殿
五、〇〇〇円　株式会社丸五製綱所　殿
五、〇〇〇円　株式会社前文製綱所　殿
五、〇〇〇円　興国鋼線索株式会社　殿
五、〇〇〇円　国際信号旗株式会社　殿
五、〇〇〇円　帝国産業株式会社　殿
五、〇〇〇円　株式会社朝日製綱所　殿
五、〇〇〇円　昭和製綱株式会社　殿
五、〇〇〇円　神鋼鋼線索株式会社　殿
五、〇〇〇円　光鋼索株式会社　殿
三、〇〇〇円　江戸川染布株式会社　殿
三、〇〇〇円　株式会社暁製作所　殿
三、〇〇〇円　朝日加工株式会社　殿
三、〇〇〇円　平岡染織株式会社　殿

計　金　一三三、〇〇〇円

一、支　出　内　訳

三、〇〇〇　鉄砲洲神社御修祓料
一四、二八五　感謝状表彰状代
一九六、八八一　記念品代
二八、〇五〇　弁当代
一七、四二九　清酒代
一四、三五〇　菓子代
三、一五〇　神前供物代
一七、〇〇〇　余興出演者謝礼金
五、七三二　印刷文具費
四、七〇〇　式場神社席借料
三、一〇〇　婦人会及下足番昼食謝礼金
三、〇〇〇　麻船具新聞社
五、八〇〇　会議費
五二五　通信費
六、八五〇　記念写真代

計　金　三二三、八五二円

終戦後の組合運営について

東京船具協会創立当時の会員名簿（昭和二十三年四月現在）

役員		会員	商号	代表者	住所
理事長	田中真一	〃	岡田光雄		
専務理事	加藤政次郎	〃	石田恒男		
理事	角谷佐蔵	監事	稲垣勝蔵		
〃	斎藤清三	〃	林滝蔵		
〃	羽成福太郎	〃	本間淳助		
相談役			石川商工株式会社	石川惣太郎	中央区湊町一ノ六
			（合）岩田商店	岩田英雄	〃 湊町一ノ三
			岩田工作所	岩田英次郎	〃 湊町一ノ六
			五十鈴商会	角谷佐蔵	〃 八丁堀三ノ九
			稲垣工業株式会社	稲垣勝蔵	〃 霊岸島一ノ十六
			（合）太田船具店	太田定次郎	〃 小田原町一ノ十五
			（株）三共商店	川上長一	〃 八丁堀四ノ十一
			斎藤船具店	斎藤清三	〃 新川二ノ四
			三和商会	林滝蔵	〃 日本橋小網町二ノ三
			鈴春商店	望田桂一	〃 日本橋箱崎町一ノ三
			杉田船用品工業株式会社	杉田よね	江東区深川永代一ノ二十六
			善隣産業株式会社	谷村勇	中央区新川二ノ四
相談役	谷村勇				
〃	塚本常五郎				
〃	高浦高太郎				
〃	成瀬勝蔵				
〃	山本光雄				

大亜工業株式会社	加藤政次郎	中央区霊岸島一ノ十六
大洋産業株式会社	山中健之助	〃　日本橋茅場町三ノ五二
橘　米　吉　商　店	橘　米　吉	〃　霊岸島一ノ一
田中産業有限会社	田中　真一	〃　入船町三ノ四
（有）綱圧石田商店	石田　恒男	〃　八丁堀四ノ十一
東京船用品株式会社	塚本常五郎	〃　湊町三ノ二十三
永田　繁一　商　店	永田　繁一	〃　日本橋茅場町二ノ二
羽成福太郎商店	羽成福太郎	〃　湊町二ノ十三
古沢工業株式会社	古沢卯之助	〃　霊岸島町一ノ十六
藤　井　製　作　所	藤井　益雄	〃　越前堀一ノ五
本間産業株式会社	本間　淳助	江東区深川永代一ノ八
本多産業株式会社	本多　敏明	中央区八丁堀四ノ九
（合）前原徳蔵商店	前原　清春	〃　湊町三ノ七
的　場　丹　蔵　商　店	的場　丹蔵	江東区深川永代一ノ二六
松　竹　時　雄　商　店	松竹　時雄	中央区小田原町三ノ二ノ一
大和産業有限会社	岡田　光雄	〃　湊町一ノ九
（株）高橋九六商店	高橋　九六	〃　日本橋通り二ノ六
加　藤　仁　吉　商　店	加藤　仁吉	〃　越前堀三丁目三番地
栄商工株式会社	道源　栄次	〃　新川二丁目一番地

東京船具協会賛助会員名簿（五十音順）

氏　名	住　所
稲　山　茂	東京都中央区湊町一ノ十一
伊　藤　清太郎	〃　江東区深川平野町一ノ十一
大久保　謙　二	千葉県市原郡五井町下宿二七五五
倉　田　万次郎	東京都中央区越前堀一ノ四
篠　田　隆太郎	神奈川県藤沢市鶴沼三六七六
鈴　木　春　蔵	東京都中央区日本橋箱崎町一
高　浦　高太郎	〃　目黒区下目黒四ノ八九一ノ二
成　瀬　勝　蔵	〃　中央区明石町三一
馬　場　七　郎	〃　港区芝浦二ノ一
藤　井　松之助	神奈川県横浜市港北区篠原町二、一一九
山　本　光　雄	東京都杉並区上高井戸五ノ二一二〇
山　本　徳　治	〃　江東区深川永代一ノ四
横　井　新太郎	〃　港区芝海岸通り三ノ二

組合再建後の行事表

（イ）新年宴会

開催年月日	場所
昭和二十五年一月十五日	人形町 割烹 花屋
〃 二十六年一月 四日	新川 〃 菊水
〃 二十七年一月 十日	深川 〃 一力
〃 二十八年一月 九日	新川 〃 増田屋
〃 二十九年一月 十四日	新川 〃 よこ川
〃 三十 年一月 十日	築地 〃 治作
〃 三十一年一月 十日	築地 〃 治作
〃 三十二年一月 十日	築地 〃 治作
〃 三十三年一月 十日	新川 〃 増田屋
〃 三十四年一月 十三日	八丁堀 〃 あ己屋
〃 三十五年一月 十一日	新川 〃 よこ川

（ロ）懇親旅行

開催年月日	場所
昭和二十三年十一月十八日	伊東 温泉 大和館
昭和二十四年五月 八日	箱根 〃 清光園
〃 二十四年十月二十二日	湯河原 〃 天野屋
〃 二十五年五月 十三日	修善寺 〃 中田屋
〃 二十五年十月二十八日	塩原 〃 明賀屋
〃 二十六年四月二十八日	伊豆長岡 〃 葛城館
〃 二十六年十月 二十日	箱根 〃 環翠楼
〃 二十七年五月 十七日	揚ケ島 〃 落合楼
〃 二十七年九月二十七日	吉奈 〃 芳泉荘
〃 二十八年三月二十八日	熟川 〃 三楽荘
〃 二十八年十月 十七日	甲府揚村 〃 常盤ホテル
〃 二十九年三月二十七日	熱海 〃 静観荘
〃 二十九年十月 十六日	湯檜曽 〃 奥利根ホテル
〃 三十 年三月 十九日	形ノ原 〃 木村旅館
〃 三十 年十月二十二日	伊豆山 〃 中田屋
〃 三十一年四月 七日	湯河原 〃 ふき屋
〃 三十一年十月 六日	那須 〃 山楽
〃 三十二年四月 六日	稲取 〃 稲取荘
〃 三十二年十月 十二日	中湯河原 〃 清風

昭和三十三年　十月　十一日　箱　根　温泉　小　浦　園
〃　三十四年　五月　八日　上山田　〃　信州観光ホテル
〃　三十四年　十月　四日　稲　取　〃　稲取観光ホテル

（八）従業員夏季リクリエーション

昭和二十四年　八月　七日　保　田　海　岸　四八名
〃　二十五年　八月　六日　鵠　沼　海　岸　四五名
〃　二十六年　七月二十九日　片　貝　海　岸　四四名
〃　二十七年　八月　十日　逗　子　海　岸　四七名
〃　二十八年　八月　九日　勝　山　海　岸　五五名
〃　二十九年　八月　八日　江ノ島　海　岸　五八名
〃　三十　年　八月　七日　森　戸　海　岸　七三名
〃　三十一年　七月二十九日　御　宿　海　岸　八四名
〃　三十二年　七月二十八日　長者ケ崎　海岸　八六名
〃　三十三年　七月二十七日　富　津　海　岸　九四名
〃　三十四年　八月　二日　上　富　田　海　岸　一〇六名

（二）　その他の行事

昭和三十年三月二十日　形原町丸五製綱所前文製綱(株)工場見学
昭和三十　年　六月　十三日　日本ペイント株式会社東京工場見学
〃　三十三年　四月二十六日　再建満十周年記念式典
〃　三十三年十二月　十　日　メートル法講習会
〃　三十四年十一月二十二日　昭和三十四年度第一回野球大会

故田中真一氏葬儀に於ける弔詞

東京船具協会代表
専務理事　加藤政次郎

東京船具協会を代表致し謹んで故田中真一君の霊前に合掌し、告別の辞を申し述べます。

吾が業界のより良き指導者として会員一同の敬慕の的であった君は、一朝病の犯す処となり、嵐に花の散る如く忽然として此の世を去られたのであります。

誠に以て夢の様で、あの温顔の内に活気に満ちた君の偉大な勇姿、いとも愉快に語られる君のお声が今尚私共には、はっきりと目にうつり、耳に聞えて来るのであります。

ああ何と言う悲しい事でありましょう。既に幽明境を異にし永劫再び相見る事は出来ないのでありまして、最早君の愉快な御話も聞く事は出来なくなって終いました。思えば涙の外はないのであります。回顧すれば、君は若くして田中家にはいられ先代の遺業を継承し、爾来二十有余年に亘って終始一貫刻苦精励良く家業に尽粋されたのであります。其の結果、家運は年と共に繁栄し今日の如き田中産業株式会社のゆるぎなき業礎を築き上げられたのであります。

一方、吾が船具業界の発展に付きましても、多年に亘り御尽力され終戦後は逸早く業者を糾合して東京船具協会を創立し、衆望を担うて其の理事長に推され、以来寝食を忘れて本会の育成に献身されたのであります。東京船具協会の今日の繁栄こそ偏に君の努力の賜ものであって其の功績は永く後世に光り輝やくものであります。尚今後更に君の御力に俟つものが多々ありまする際君の急逝は惜しみても尚且つ余りあるものがあります。此の上は君の残された精神を受けついで会員相協力し、更に一段と吾が業界の向上発展に力を致す積りでおりますから何巫草葉の蔭から業界の前途に対し御加護を賜りまする様御願ひ致します。

君が業界に尽された功績に付いてはまだまだ感謝せねばならない事が数々ありますが涙が胸にせまって思う様に申上ぐる事が出来ません。

茲に謹んで哀悼の意を表して弔詞を捧げる次第であります。

希くぼ君の霊魂来りて吾等の意を受けられよ再拝合掌す。

（前東京船具協会理事長昭和二十七年七月二十日没）

組合員の現況

昭和三十五年三月　現在

東京船具同業組合規約並に組合員名簿

事務所　東京都中央区霊岸島一丁目十六番地

大亜工業株式会社内

役員

理事長	加藤政次郎	
副理事長	篠田隆太郎	
同	岡田光雄	
理事（会計）	石田恒男	
理事	羽成福太郎	
理事	斎藤清三	
同	角谷佐蔵	
同	山中健之助	
同	石川惣太郎	
同	望田桂一	
監事	稲垣勝蔵	
同	田中弘道	
相談役	成瀬勝蔵	
同	塚本常五郎	

会員名	商号	住所
石川惣太郎	石川商工株式会社	中央区湊町一丁目六番地
稲垣勝蔵	稲垣株式会社	中央区霊岸島一丁目十六番地
石田恒男	株式会社綱庄石田商店	中央区八丁堀四丁目十一番地

岩田正雄	有限会社岩田商店	中央区湊町一丁目四番地
羽成福太郎	株式会社羽成製帆所	中央区湊町二丁目十三番地
原　秀行	原善船舶灯具製作所	大田区調布千鳥町十四番地
馬場七郎	東京船用品株式会社勤務	港区芝浦二丁目一番地
堀内才一	株式会社堀内商店	中央区霊岸島一丁目四番地
道源栄次	道源加工所	中央区新川二丁目一番地
大田定次郎	太田船具株式会社	中央区小田原町一丁目十五番地
岡田光雄	大和産業有限会社	中央区湊町一丁目九番地
角谷佐蔵	株式会社五十鈴商会	中央区銀座東一丁目七番地
加藤仁吉	有限会社加藤船具商会	中央区越前堀三丁目三番地
加藤政次郎	大亜工業株式会社	中央区霊岸島一丁目十六番地
川上長一	株式会社三共商店	中央区八丁堀四丁目一番地
横井　豊	垂見船具株式会社	港区芝海岸通り三丁目二番地
田中弘道	田中産業株式会社	中央区入舟町三丁目四番地
高橋九六	株式会社高橋九六商店	中央区日本橋通り二丁目六番地
田中ひで	田中船用品株式会社	江東区深川門前仲町一丁目十三番地
高浦八郎	高浦船舶用品株式会社	港区芝金杉四丁目八番地
谷　村勇	善隣産業株式会社	中央区越前堀一丁目十番地
塚本常五郎	東京船用品株式会社相談役	中野区新井六〇八番地

永田繁一	永田船具加工株式会社	中央区日本橋茅場町二丁目二番地
成瀬勝蔵	三洋商事株式会社	中央区新川一丁目五番地
永松　一	氷川船用品株式会社	港区芝海岸通り三丁目一番地
村瀬憲治	橘工業株式会社	中央区日本橋茅場町二丁目二十番地
山中健之助	大洋船具株式会社	中央区日本橋茅場町三丁目五番地
的場恒夫	的場船具工業所	江東区深川永代一丁目二十六番地
藤井松之助	石川商工株式会社勤務	構浜市港北区篠原町二一九九番地
藤井益雄	東京藤井産業株式会社	中央区越前堀一丁目五番地
古沢卯之助	古沢工業株式会社	中央区霊岸島一丁目十番地
青木勝治	日光商事株式会社	港区芝海岸通り三丁目一番地
阿部義尚	三好産業株式会社	中央区越前堀三丁目十五番地
斎藤清三	斎藤清三商店	中央区新川二丁目四番地
篠田隆太郎	東京船用品株式会社	中央区湊町三丁目二十三番地
望田桂一	株式会社鈴春商店	中央区日本橋箱崎町一丁目六番地
杉田よね	杉田船用品株式会社	江東区深川永代一丁目二十六番地
杉田俊丸	杉田産業株式会社	中央区越前堀一丁目一十番地
伊藤　脩	株式会社木村商店東京支店	港区芝浦一丁目六十七番地
水野梅治	株式会社水野船具店	港区芝浦一丁目四十八番地
白米弘治	松井商事株式会社東京支店	江東区深川佐賀町一の十番地

東京船具同業組合規約

第一章　総　則

第一条　本組合は東京船具同業組合と称す

第二条　本組合は組合員相互の和親協調を図り船具の研鑽及健全な発達に資することを目的とす

第三条　本組合事務所を東京都内に置く

第二章　組　合　員

第四条　本組合は船用品販売を為す者及船用品関係者で役員会の承認を経たるものを組合員として組織する

第五条　組合員は自由に脱退することが出来る。但脱退に際して財産上の請求することは出来ない

脱退は書面に依り届け出るものとする

第六条　組合員は役員会の定めた入会金及び組合費を納める

第三章　役　員

第七条　本組合に次の役員を置く

理　事　長　　一　名

副理事長　　二　名

理　　事　　七　名

監　　事　　二　名

第八条　役員は組合員中より総会で選任する。

理事長及び副理事長は理事の互選とす

第九条　本組合に顧問及び相談役を置くことが出来る

第十条　理事長は本組合を代表して組合運営を総理する

副理事長は理事長を補佐して業務を常理する

監事は本組合財産の状況及び業務を監査する

第十一条　理事長議長となり副理事長理事及び監事で役員会を組織す

第十二条　顧問及び相談役は理事長の諮問に応じ又は会議に出席して意見を述べることが出来る

第十三条　役員の任期は二年とす

但重任は差支えない

第十四条　役員は無報酬とす

第四章　会　議

第十五条　総会は定時総会及び臨時総会とする

総会は理事長が招集してその議長となる

尚組合員総数の三分の一以上の要求に依り総会を招集することが出来る

第十六条　定時総会は毎年四月に開催する

臨時総会は必要ある毎に之を開く

第十七条　総会は本組合の事業の根本方針を決議する

第十八条　総会の議決は出席者の過半数で決定する
否同数の時は議長の採決に従う

第十九条　次の事項は総会に諮って決定する
一、規約の変更
二、収支予算
三、其の他必要事項

第二十条　理事長は次の事項を定時総会に提出して承認を受けなければならない
一、専業報告書
二、財産目録
三、貸借対照表
四、収支計算書

第五章　会計

第二十二条　本組合の会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第二十二条　本組合の経費は組合員の組合費及び寄付金其他の収入金で支弁する

第二十三条　本組合解散の場合の残余財産の処分方法は総会で定める

細　則

ィ、会員結婚祝金　金参千円也
ロ、会員の嗣子結婚税金　金弐千円也
ハ、会員弔慰金　金五千円也
ニ、会員の父母妻嗣子弔慰金　金参千円也
ホ、会員の社店員に対する弔慰金　金壱千円也
ヘ、会員にして十五日以上病床にあるものに対する見舞金　金壱千円也
ト、其の他不慮の災害等に依り見舞金の贈呈を必要とする場合は其の都度役員会に計りて決定する。

一、会　社　名　石川商工株式会社

一、本社所在地　東京都中央区湊町一丁目六番地

一、支店、出張所所在地　中央区湊町一丁目十一番地
工場　中央区越前堀一丁目十六番地

一、創立年月日　大正二年四月

一、資　本　金　六百万円

一、代表者氏名　代表取締役　石川惣太郎

一、役員氏名　取締役　石川はつ、藤井松之助、監査役　藤谷猪之介

一、業種内容　帆布縫製加工（テント、シート、日除、トラック幌、救命袋、ハッチカバー類）
諸ロープ販売及加工（ワイヤロープ、マニラロープ、サイザルロープ、販売及加工品
モッコ、フェンダー縄梯子等）

一、会社の沿革

先代石川惣太郎により、大正二年四月現在地に於て、個人経営の下に開業され綿帆布、麻帆布濾布、その他の繊維品一式並に鋼索類、土木建築用品、船用品、漁具類等の販売加工に従事し、逐年業績は進展した。

昭和五年先代没後、現社長石川惣太郎を襲名し、事業を継承、積極的に業務拡張を企図され、昭和十四年九月、株式会社に改組して取締役社長に就任せらる。一方人員を充実して諸会社及団体、組合等の発註に応じ多大の実績を収めた。殊に終戦後は永年の加工及販売の体験と実績とを生かし、業界の第一線に進出、米八軍及諸官庁へも大量納入した。昭和二十七年秋、保安庁（現防衛庁）帆布製品指定工場に認可され、続いて昭和二十九年二月二日、ハッチカバー型式承認工場に指定さる。

昭二九、二、二　承認第四三一号
昭三〇、二、二八　承認第七五一号
〃　第七五〇号
〃　第七五二号

現在一路発展の過程にあり

一、代表者の経歴

幼少より勉学の傍ら、父の業務を助け、昭和五年先代の逝去に伴い襲名して遺業を継承す。府立第三中学卒業後、一意専心、加工業務の運営に当る。
昭和十四年九月五日株式会社に改組代表取締役に就任し以来重任を重ねて現在に至る。

一、会社名　稲垣株式会社

一、本社所在地　東京都中央区霊岸島一丁目十六番地

一、支店、出張所所在地　京都市下京区大宮通り松原上ル
成田市郷部一〇〇三

一、創立年月日　昭和十一年二月一日創業

一、資本金　二百万円（二、〇〇〇、〇〇〇）払込済

一、代表者氏名　代表取締役　稲垣勝蔵

一、役員氏名　取締役　塚本常五郎、鈴木角五郎、大連丁春
角谷佐蔵
監査役　角田光太郎

一、業種内容　販売　綿麻帆布、化学繊維布、化学防水布、
油引防水布、マニラロープ、ワイヤ
ロープ、ゴムベルト、パッキン、船具
金属品一式
加工　シート、テント、軍装品、雨衣、行襲
災害防具、作業服、作業帽子、運動用
品、船舶荷役道具

一、会社の沿革
昭和十一年二月一日　稲垣商店創業
昭和十四年十一月十五日　株式会社稲垣商店に組織変更。
昭和十七年三月二八日　稲垣工業株式会社に社名変更
昭和二三年六月十八日　資本金一百万円に増資
昭和二八年十一月十二日　稲垣株式会社に組織変更
資本金　二、〇〇〇、〇〇〇円
資本金　一五〇、〇〇〇円

一、代表者の経歴
学歴　大正十二年三月　慶応義塾商業学校卒業（二部）
経歴　大正七年“横浜（株）内田商会入社引続キ大正九年日本製
綱株式会社入社
昭和四年四月　解散ノタメ退社
昭和四年四月　橘合資会社入社
昭和十一年一月　独立開業ノタメ退社
昭和十一年二月　稲垣商店創立
昭和十七年　稲垣工業株式会社組織変更
昭和二十八年　稲垣株式会社組織変更　代表取締役トナ
リ現在二至ル
東京船具同業組合　監事
日本帆布製品工業会連合会　会長
全国帆布製品工業会　会長
東京都帆布製品工業組合　理事長
法政大学親友会　会長
日通親睦会　副会長

一、会　社　名　　株式会社綱庄石田商店

一、本社所在地　　東京都中央区八丁堀四丁目十一番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　　昭和二十六年四月十四日

一、資　本　金　　三　百　万　円

一、代表者氏名　　代表取締役　石　田　恒　男

一、役　員　氏　名　　代表取締役　石田恒男
　　取締役　石田士朗、小川彌吉
　　監査役　佐野正綱

一、業　種　内　容　　ロープ類、附属機械金物の販売加工

一、会社の沿革

明治初年、石田庄兵衛により京橋区日比谷町に綱庄石田商店を創業、一方月島にロープ工場を建設ロープ生産の先駆をなした。庄兵衛隠居後、先代石田由松営業を継続、関東大震災後、区画整理の際、現在地に移転し、爾来ワイヤロープマニラロープ船具品の販売を開始し、家業の発展に努力した。

昭和二十六年四月株式会社綱庄石田商店に改組し現在に至る。

一、代表者の経歴

昭和二年三月三十日、東京市京橋区日比谷町三番地に生る。

昭和二十一年三月、大倉高等商業学校を卒業、直ちに綱庄石田商店の営業に従事。

昭和二十六年四月、株式会社に組織を変更と同時に代表取締役となり現在に至る。

一、会　社　名　有限会社岩田商店

一、本社所在地　東京都中央区湊町一丁目四番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和二十五年九月

一、資　本　金　五十万円

一、代表者氏名　岩　田　正　雄

一、役　員　氏　名　代表取締役社長　岩田正雄
取　締　役　岩田行生
監　査　役　三上国松

一、業　種　内　容　綱索、麻索、附属金具

一、会社の沿革

昭和五年三月二十八日、東京都中央区湊町一丁目四番地に岩田英雄商店を開業す。

昭和十三年四月、本店を東京都中央区湊町一丁目三番地に移転す。

昭和十九年十二月、企業整備により一時営業を休業す。

昭和二十年十二月、復活開業す。

昭和二十五年九月、（有）岩田商店（資本金）十五万円を創立代表取締役社長として岩田英雄が就任す。

昭和三十一年十一月、本店所在地を東京都中央区湊町一丁目三番地より一丁目四番地に移転し現在に至る。

昭和三十二年一月、代表取締役社長岩田英雄辞任、新に岩田正雄代表取締役社長に就任、現在に至る。

昭和三十三年九月十日、資本金十五万円を三十五万円に増加し更に五十万円となり現在に至る。

一、代表者の経歴

昭和二十九年四月（有）岩田商店入社。

昭和三十二年一月、同社代表取締役就任現在に至る。

一、会　社　名　株式会社羽成製帆所

一、本社所在地　東京都中央区湊町二丁目十三番地

一、支店、出張所所在地　工場　東京都東江区深川牡丹町一丁目十番地

一、創立年月日　昭和二十六年七月一日

一、資　本　金　一百万円

一、代表者氏名　代表取締役　羽成福太郎

一、役員氏名　取締役専務取締役　羽成秀男
　取　締　役　羽成益夫
　監　査　役　羽成多称

一、業種内容　一、帆布製品の製造加工並に販売
　一、麻縄の加工並に販売
　一、ワイヤロープの加工並に販売
　一、運動具の加工並に販売
　一、船舶用品の加工並に販売

一、会社の沿革

大正八年十月二十二日、京橋区舟松町十三番地に羽成製帆所を開業。

昭和二十六年七月一日、業務拡張の為株式会社羽成製帆所を設立し、業務を引継ぎ今日に至る。

一、代表者の経歴

四明治二十五年四月十日生、出生地　千葉県香取郡佐原町

明治三十八年八月一日、片桐製帆所へ勤務（七年間修業）

明治四十五年四月、大阪鉄工所製帆部へ勤務（一年）

大正二年七月、石川製帆所を手伝。

大正八年十月二十二日、羽成製帆所を開業。

昭和二十六年七月一日、株式会社羽製成帆所を設立、代表取締役と成り今日に至る。

一、会　社　名　　原善船舶燈具製作所

一、本社所在地　　東京都大田区調布千鳥町十四番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　　明治四十年三月十六日

一、資　本　金

一、代表者氏名　　原　秀行

一、役員氏名

一、業種内容　　船舶灯具類の製造販売

一、会社の沿革

明治四十年三月十六日、先代原善造に依り京橋区東湊町一丁目河岸に於て開業され、其の後逓信省型式承認工場に指定された。其後、京浜地区地方船具商を得意先とし、製造販売に鋭意努力して来たが、昭和二十年三月戦災に遭遇したので工場及営業所を現住所に移転し、引続き今日に及べり。

一、代表者の経歴

代表者原秀行は先代原善造の三男にして、大正六年十一月十五日生る。

昭和十年三月、東京市立商業学校を卒業し、父を助けて家業を手伝いしが、大東亜戦争勃発と共に召集され霞ヶ浦航空隊に入隊、二十一年二月復員した。

復員後、南国造船株式会社へ入社し、二十四年四月同社を辞任して、原善船舶灯具製作所を再起復興して業務を開始した。

一、会　社　名　株式会社堀内商店

一、本社所在地　東京都中央区霊岸島一丁目四番地

一、支店、出張所所在地　和歌山県伊都郡橋本市清水七三五番地
株式会社堀内商店橋本支店
越前堀サービス部
東京都中央区越前堀二丁目一番地

一、創立年月日　昭和三十年三月二十五日

一、資　本　金　八百万円（授権株数一六、八〇〇　発行済一六、〇〇〇）

一、代表者氏名　堀　内　才　一

一、役員氏名　代表取締役　堀内才一
取締役　堀内静枝、須藤文夫
監査役　生貝保太郎

一、業種内容　一、綱索及麻索の販売並に加工
一、船具及漁具の販売並に加工
一、土木建築、鉱山用金具の販売加工

一、会社の沿革
一、昭和三十年三月二十五日、東京都中央区霊岸島一丁目四番地に株式会社堀内商店設立、同日堀内才一代表取締役に就任。
二、昭和三十年四月、第一次及同年九月に第二次増資を行い資本金八百万となる。
三、昭和三十二年七月、和歌山県橋本市に支店を開設す。
四、昭和三十四年四月、中央区越前堀二丁目一番地にサービス部を増設、同時にナイロン、ナイスト、クレモナロープ並にステンレスワイヤロープ等と業種取扱高品を拡張する。

一、代表者の経歴
一、昭和十六年四月、綱庄綱索工業有限会社石田商店設立、代表者に就任。
一、昭和二十六年四月、株式会社に組織を変更、同代表取締役に就任。
一、昭和三十年三月二十五日、東京都中央区霊岸島一丁目四番地に新に株式会社堀内商店を設立し、同代表取締役に就任同時に前記代表者を辞任す。

一、会社名　道源加工所

一、本社所在地　東京都中央区新川二丁目一番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和九年七月一日

一、資本金

一、代表者氏名　道源栄次

一、役員氏名

一、業種内容　鉱山、土木、船舶用品其の他各ロープ類の加工並に販売

一、会社の沿革

一、代表者の経歴

明治四十一年十月七日、山口県徳山市に生れ、大正十年四月、石川惣太郎商店に入店し、昭和九年七月一日、現住所に於て開業し、引続き今日に至る。

一、会　社　名　太田船具株式会社

一、本社所在地　東京都中央区小田原町一丁目十五番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和三年四月二十日

一、資　本　金　五十万円

一、代表者氏名　代表取締役　太田定次郎

一、役員氏名　取締役　内堀善高、神谷鉱士

監査役　小竹　典

一、業種内容　マニラロープ、ワイヤロープ、塗料類

各種船用品漁業用品の販売

其の他附帯する一切の事業

一、会社の沿革

昭和三年四月、先代太田由次郎により現在の小田原町一丁目五番地に開業された。

昭和二十二年三月、嗣子太田定次郎代表者となり従来の個人企業を法人組織に改めて、合資会社とし更に三十三年十二月一日、増資して資本金を五十万円とすると共に株式会社に変更した。

一、代表者の経歴

富山県高岡市伏木町、熊木幸三郎の六男に生れ、昭和三年四月、十五才にして上京し、太田船具店に入店した。

昭和十二年七月、日支事変に応召され十五年に帰還し翌十六年、企業合同に依り創立された東京船用品会社に勤務したのである。

昭和十九年二月、再度の応召にて中支方面に転戦、二十一年八月内地に帰り、復社後二十二年同社を辞職して太田船具合名会社の代表取締役に就任、社業の向上発展に邁進した。

昭和二十八年父由次郎逝去し、引続き今日に至れり。

一、会社名　大和産業有限会社

一、本社所在地　東京都中央区湊町一丁目九番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　明治四十三年四月

一、資本金　五十万円

一、代表者氏名　岡田光雄

一、役員氏名　岡田賢一、遠藤静子、長沼とく子

一、業種内容　ワイヤロープ、マニラロープ、同上附属金物及び取付加工

船舵用、土木建築鉱山等陸海に使用する「ショートーリングチエン」其の他の「チエン」類、鉄製、木製の滑車類、鍛造金物専門製作。

一、会社の沿革

先代岡田仙太郎は、明治三十年四月、京橋区東湊町所在の船具商大村五左衛門商店に入店修業し、明治四十三年四月、同店を円満退職後、京橋区東湊町二十八番地（現在本社の右筋向い）に於て船具商を独立開業した。爾来、船用品販売に従事する側ら、同業石田由松氏等と共に、船具同盟会を創設し、業界の向上発展に協力した。

昭和十六年、太平洋戦争勃発に依り、企業合同の結果一時経営を中絶するの止むなきに至ったが、終戦と同時に再開し、岡田仙太郎商店を、法人組織に改め、大和産業有限会社と名称を変更し現在に及ぶ。

一、代表者の経歴

昭和十二年三月、府立第三商業学校を卒業後、家業に従事し、先代没後家督を継ぎ今日に至る

一、会　社　名　株式会社五十鈴商会

一、本社所在地　東京都中央区銀座東一丁目七番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和十四年五月四日

一、資　本　金　弐百万円

一、代表者氏名　角谷佐蔵

一、役員氏名　取締役　大村益之助、菅原雄次郎、山中一郎
監査役　角谷輝男

一、業種内容　ワイヤロープ、、マニラロープ及附属金物類
一式

一、会社の沿革

昭和十四年五月四日、京橋区入船町に五十鈴商会を創立し、後八千堀三丁目九番地に移転した。

昭和二十一年、株式会社に組織を改め一方東洋製綱株式会社其他有カメーカーの代理店となり、鉱山、上木方面に主力を注ぐと共に海外輸出にも進出した。

一、代表者の経歴

明治三十一年一月四日、三重県宇治山田市に生れ、同四十五年五月五日、十五才で上京、大村五左衛門商店に入店し、爾来二十八年間に亘り、勤続した。

昭和十四年五月、同店を円満退職して独立開業し、引続き今日に至る。

一、会　社　名　有限会社加藤船具商会

一、本社所在地　東京都中央区越前堀三丁目三番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和二十一年四月一日

一、資　本　金　五　十　万　円

一、代表者氏名　代表取締役　加　藤　貞　男

一、役　員　氏　名　取締役　加藤仁吉、加藤勝蔵
監査役　江島信二

一、業　種　内　容
一、帆布縫製加工及販売
一、ワイヤロープ、マニラロープ加工及販売
一、小型機船用，消耗工具、塗料、雑貨類販売
一、一般船用品修理、加工、販売

一、会社の沿革

大正十二年四月横浜市神奈川区に於て独立開業し、その後現在地に移転した。

昭和二十五年四月一日法人組織に更め有限会社加藤船具商会と名称を変更し現在に至る。、

一、代表者の経歴

前社長は明治三十一年横浜市に生れ、東京市京橋区船具商串田清三郎商店に入店、約五年間修業し、後横浜に戻り同市、田中船具店に就職した。二十五才の折主家の許しを得て同市神奈川区に独立開業せり、その後現住所に於て引続き営業を経営し今日に至る。現代表取締役加藤貞男は大正十五年九月横浜市に生れ中学校卒業後戦時の為海軍を志願し、昭和二十年八月末終戦により復員した。以来現在地に於て父と共に経営に従事し、昭和三十四年十月父に代り代表取締役に就任した。

一、会　社　名　　大亜工業株式会社

一、本社所在地　　東京都中央区霊岸島一丁目十六番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　　昭和十四年九月二十八日

一、資　本　金　　壱　百　万　円

一、代表者氏名　　加　藤　政　次　郎

一、役　員　氏　名　　代表取締役　加藤政次郎
　　常務取締役工場長　近藤舜竜
　　取締役　加藤　清　　監査役　三上憲一

一、業　種　内　容

販売品目　天幕、雨覆、災害防具、鎗口覆布、槍口用天幕オーニング、ウインドセールーシーアンカー、艀カバー、防舷物、各種春類。船舶艤装

販売品目　綿帆布、麻帆布、化学繊維、ワイヤロープ、マニラロープ、ターロープ、各種ブロック、布ホース、ゴムベルト、各種。ペイント、船具類

一、会社の沿革

当社は昭和十六年十二月、大東亜戦争遂行に伴う企業整備令に依り登録ミシン機を主体として他の業者と企業合同したが、終戦後は是を解体し、統合者は何れも戦前の姿に復帰した。戦前は専ら鉱山、化学工業関係、其の他船舶用品の製作に従事して居たが戦争終結と共に船舶用品に主力を注ぎ爾来懸命な努力を続けて来た結果、現在艙口覆布の如きも関東地域の総生産量の過半数以上を当社が独占する段階に迄飛躍発展した。

一、海上保安庁指定工場

一、運輸大臣指定型式承認工場

一、代表者の経歴

大正七年四月上京創業三百有余年の古き歴史を有する船具問屋大村五左門商店に入店す。爾来多年に亘り社業に従事し、昭和十五年常務取締役に選任された。昭和十九年会社解散と共に其の職を辞し、大亜工業株式会社の運営に専任することとなり昭和二十年十月代表取締役に就任し引続き今日に至れり。

東京船具同業組合　理事長〃
東京船舶用品工業組合　理事長
日本帆布製品工業会連合会　常任理事
全国帆布製品工業会　常任理事
東京都帆布製品工業組合　理事
運輸省関東法定船用品協議会　監事
日本綱索販売株式会社　取締役
東京船用品株式会社　取締役
御宿町小中学校同窓会　会長

一、会社名　株式会社　三共商店

一、本社所在地　東京都中央区八丁堀四丁目十一番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和二十三年一月二十三日

一、資本金　壱百万円

一、代表者氏名　代表取締役　川上長一

一、役員氏名　取締役　篠田茂雄
同　篠田俊宏
同　篠田志げ
監査役　篠田隆太郎

一、業種内容
船用品　艤装金物、羅針盤、塗料、工具等ノ販売
特約店　株式会社佐涌計器製作所、カナエ塗料株式会社

一、会社の沿革
明治二九年、篠田定三に依って船具商を創業、昭和六年合資会社篠田船具店に組織を変更篠田隆太郎代表社員に就任して営業を継承す。昭和十七年企業合同に依り東京船用品配給株式会社に統合せられ終戦後企業整備令廃止と共に昭和二十三年一月篠田船具店を再建して株式会社三共商店を設立して現在に至る。

一、代表者の経歴
大正六年五月静岡県賀茂郡稲取町に生る。
昭和七年四月合資会社篠田船具店へ入店、昭和十七年九月企業合同に依り東京船用品配給株式会社へ入社した。
昭和二三年一月株式会社三共商店を設立取締役に就任現在に至る。

一、会　社　名　垂見船具株式会社

一、本社所在地　東京都港区芝海岸通三丁目二番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和七年六月一日

一、資　本　金　八〇万円

一、代表者氏名　代表取締役　横井　豊

一、役員氏名　取締役　横井　静子、前原　暲三
平野　高春、常世田仲司

一、業種内容　マニラロープ、ワイヤロープ、ペイント類、荷役用金具、艀用シート
其の他船用品一切

一、会社の沿革

当社は昭和七年、先代横井新太郎に依り横浜垂見船具店の東京支店として現在の場所に設置された。其の後太平洋戦争の勃発で東京の船具業者が大同団結して東京船用品配給会社を創立したので、店を閉鎖して是に参劃したのである。終戦と共に統制が解除されるや筆頭社員平野高春が引続き代表者に就任し、戦後の混乱に対処して店の再建に鋭意努力された。

昭和三十年五月、店主横井新太郎が、東京船用品株式会社の重役を辞任し、再び代表取締役の地位に復帰就任した、

一、代表者の経歴

横井新太郎の長男にして、昭和八年十一月十五日生れ、昭和三十一年三月、法政大学経済学部を卒業す。

昭和三十三年二月十一日、父新太郎の死去に依り、家督相続し、引続き今日に至る。

一、会社名　田中産業株式会社

一、本社所在地　東京都中央区入船町三丁目四番地

一、支店、出張所所在地　市場出張所　中央区築地五丁目東京中央卸売市場内

一、創立年月日　嘉永五年十月一日

一、資本金　壱百万円

一、代表者氏名　田中弘道

一、役員氏名　取締役社長　田中弘道　常任監査役　田中ミツ
取締役　長倉圭二　監査役　田中知子
取締役　田中督二

一、業種内容　ワイヤロープ　神鋼鋼線(株)　帝国産業(株)
各代理店
マニラロープ　帝国産業(株)　代理店
クレモナロープ
ペイント日本油脂(株)　代理店
船具金物一式、船灯、救命用品、造船用品、
漁業用チョッパー、ゴムベルト、ゴムホース
パッキン類

一、会社の沿革

当社は嘉永五年十月一日中央区日本橋箱崎町一丁目一番地に麻苧、船具商を開業、現社長田中弘道（第五代目）
昭和九年八月現在地に鉄筋コンクリート三階建の社屋を新築移転、
昭和十六年八月十一日組織を有限会社に変更、田中産業有限会社と称す。
昭和二十三年八月二十七日株式会社に組織を変更、専ら東日本各地の船具店、漁具店等に対し卸売をなす。

一、代表者の経歴

大正十四年一月　東京都中央区日本橋箱崎町に於て出生、昭和十九年九月上智大学専門部商経科卒業、昭和二十年五月応召、昭和二十一年五月学校卒業後勤務中の金属配給統制(株)が閉鎖機関に指定により退社、田中産業有限会社へ入社、昭和二十七年七月社長田中真一氏死亡により社長に就任、現在に至る。

一、会　社　名　田中船用品株式会社

一、本社所在地　東京都江東区深川門前仲町一ノ十三

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和二十八年五月

一、資　本　金　弐　百　万　円

一、代表者氏名　取締役社長　田　中　ひ　で

一、役　員　氏　名　取　締　役　大村　常次郎　佐々木　秀一
田中　正夫　田中　国夫

一、業　種　内　容　ロープ、ペイント、帆布、錨及び鎖、土木建金物、配管器具、工具、電機器具、パッキン類、繊維、薬品、ゴム製品、厨房用具、漁具、其の他。

一、会社の沿革　昭和二十三年　前社長田中正一中央区新川にて個人営業
昭和二十五年　有限会社田中船具店設立
昭和二十八年五月　田中船用品株式会社に改細

一、代表者の経歴

前社長、田中正一の妻女にして、昭和二十五年有限会社田中船具店創立と共に取締役に就任した。
昭和三十二年十月　前社長の逝去に伴い、取締役社長に選任され今日に至る。

一、会　社　名　　高浦船舶用品株式会社

一、本社所在地　　東京都港区芝金杉四丁目八番地

一、支店、出張所所在地　　出張所　川崎市浜町三丁目八番地

一、創立年月日　　昭和二十五年九日五日

一、資　本　金　　五　百　万　円

一、代表者氏名　　高　浦　八　郎

一、役　員　氏　名　　斎藤　寿勝　　高浦高太郎　　田頭　茂彦

高浦　ノブ

一、業　種　内　容　　航海計器、器具、救命器具、荷役用鉄工製品

ワイヤロープ、マニラロープ、ペイント類。

石綿製品、麻、綿帆布、並に製作品、機械工具、錨、鎖、電気用品、航海消耗品

一、会社の沿革

大正十二年十月二十六日高浦商店として現在の場所に於て船舶用航海計器、器具並に荷役用鉄工製品等販売の目的を以て開店致しました。爾来誠実に営業中偶々昭和十七年九月『企業整備令』に依り東京船用品配給株式会社（業者合同新設会社）に併合、当時の店主高浦高太郎は専務取締役に就任、営業担当責任者にして其間特許局長官より『日本標準規格船舶部門船用品専門委員を拝命し、三ケ年間に亘って奉仕した経歴を有して居ります。然る後統制品解除を契機に且つ又得意先よりも特に独立経営方を慫慂せられ、他の店員と共に東京船用品配給株式会社を退職し昭和二十五年九月五日茲に株式会社高浦船具店を創立再発足し業務弦張に専念した甲斐あって御得意様は旧に倍加し耐火倉庫も完備するに至りましたので昭和三十四年四月一旦高浦船舶用品株式会社と商号を改め微力ながら海運界に奉公の一端を担うの幸を得て居ります。、

一、代表者の経歴

昭和十二年三月早稲田大学法律科卒業後直に高浦商店員となり終始一貫当業務に従事す。

一、氏　　名　東京船用品株式会社相談役
東京船具同業組合相談役　塚本常五郎

一、略　　歴

明治二十七年六月十八日　福岡県八女市に生る
大正十三年四月　芝浦船具塚本商店を創立経営し
昭和十六年十月　東京船用品配給株式会社創立により専務取締役に就任する。
昭和十九年四月　右会社取締役社長に就任
昭和二十三年五月　東京船用品株式会社と改称
昭和三十二年十一月　取締役社長を辞任の上相談役に推薦され現在に至る。
昭和二十三年五月　東京船具協会創立により相談役に推薦され現在に至る。

一、会　社　名　　永田船具加工株式会社

一、本社所在地　　東京都中央区茅場町二ノ二

一、支店、出張所在地

一、創立年月日　　大正十二年八月一日

一、資　本　金　　十八万円

一、代表者氏名　　永田繁一

一、役員氏名　　代表取締役　永田　繁一　取締役　中村桝三
　　監査役　加藤　藤二

一、業種内容　　帆布、ロープ類の加工及販売

一、会社の沿革

大正十二年一月東湊町二丁目十五番地に於て独立開業し其後昭和七年茅場町の現住所に移転越えて二十四年四月永田船具加工株式会社に組織を変更す戦争中は海軍監理工場東京造船所の協力工場に指定された。

一、代表者の経歴

愛知県知多郡小錦谷村に生れ明治四十五年三月十五歳の折京橋東湊町「帆吉」斎田吉三郎方に入店す。大正八年同店を辞任して名古屋市熱田白鳥町の杉山船具店裁縫工場へ転勤した。其後横浜中村製帆所に於て引続き修業し大正十二年一月東湊町にて独立開業され超えて昭和七年茅場町の現住所に移転し今日に至れり。尚永田社長は昭和三十五年二月十一日加療中の病状悪化し逝去された。享年六十三才。

一、会　社　名　三洋商事株式会社

一、本社所在地　東京都中央区新川一丁目五番地

一、支店、出張所所在地　横浜支店（横浜市中区相生町一ノ二二）
神戸支店（神戸市生田区栄町通三ノ三十八）
大阪支店（大阪市西区北堀江通五ノ三十七）
門司支店（門司市港町一ノ二）

一、創立年月日　昭和二十二年九月二十五日

一、資　本　金　五、六二五万円

一、代表者氏名　取締役社長　成　瀬　勝　蔵

一、役員氏名　取締役会長　和田二郎
取締役社長　成瀬勝蔵
専務取締役　赤松　勇
常務取締役　竹野政造
常務取締役　富田健次
取、締　役　河口又一
監　査　役　新島友三

一、業種内容　一、帆布、鋼索、麻索、塗料、繊維製品、鉄鋼製品、化学製品、ゴム製品、皮革製品、計器類、電気器具、火薬類、消火器及び船舶法定備品の販売。
二、船灯、機械類、雑貨、船舶の艤装品、運搬要具、備品及び属具の輸出入。
三、賄食料品の納入販売。

一、会社の沿革
昭和二十二年九月資本金三〇〇万円をもって設立
昭和二十三年十二月　資本金六〇〇万円に増資
昭和二十四年十二月　資本金一、〇〇〇万円に増資
昭和二十七年十二月　資本金二、〇〇〇万円に増資
昭和二十八年六月　昭和化成(株)の営業全部を譲受け合併
同　年八月　大光商工(株)を合併し、資本金二、二五〇万円に増資
昭和二十九年七月　日本船用品(株)を合併し、資本金三、七五〇万円に増資
昭和三十年四月　(株)大洋産業社の営業全部を譲受け合併
同　年十一月　資本金五、六二五万円に増資し現在に至る。

一、代表者の経歴
明治二十八年八月二十九日　栃木県足利市に生る
大正三年一月至大正十三年十一月　船用品販売業に従事
大正十三年十二月至昭和十七年九月　船用品販売業を経営
昭和十四年三月至昭和十六年十月　東京船具商業組合理事就任
昭和十四年十一月至昭和十七年十二月　日本船具商業組合連合会専務理事就任
昭和十六年十月至昭和二十二年九月　東京船用品配給株式会社取締役・社長就任
昭和十六年十二月至昭和二十三年一月　日本船用品(統制)株式会社専務取締役・理事就任
昭和十四年十一月至現在　日本信号旗株式会社取締役・社長就任
昭和二十二年九月至現在　三洋商事株式会社取締役社長就任
昭和二十七年十一月至現在　日本船灯株式会社取締役就任
昭和三十一年五月至現在　社団法人日本造船関連工業会常任理事就任
昭和三十二年十一月至現在　東京船用品株式会社取締役会長就任

一、会　社　名　　氷川船用品株式会社

一、本社所在地　　東京都港区芝海岸通三丁目七番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　　昭和二十九年三月二十日

一、資　本　金　　百二十万円

一、代表者氏名　　中川清吾

一、役員氏名　　取締役社長　中川清吾

常務取締役　黒田武男

同　　田中常康

同　　永松一

一、業種内容　　船具、塗料、石油製品の販売

一、会社の沿革

東京港に於ける氷川商事株式会社の業務の一環として昭和二十八年十一月港区芝海岸通り三丁目一番地に店舗を開設す。以来業務の進展に伴い、一方東京港の将来を考慮して昭和三十四年三月同海岸通り三丁目七番地に（芝浦岸壁南端）建物を移転し現在に至る。

一、代表者の経歴

元、日本郵船株式会社　監査役、

一、会　社　名　橘工業株式会社

一、本社所在地　東京都中央区日本橋茅場町二丁目二十番地

一、支店、出張所所在地　東京都港区芝浜松町四丁目一番地
福島県郡山市駅前十ノ十
秋田県秋田市北鉄砲町四五
工場　埼玉県川口市家町三四一〇

一、創立年月日　創業明治二十八年十月

一、資　本　金　四　百　万円

一、代表者氏名　代表取締役　橘　ひさ

一、役員氏名　代表取締役　村瀬憲治
代表取締役　橘　重男
監　査　役　福井順次

一、業種内容　製造並に販売品目
パッキング（綿製品、麻製品、石綿製品ゴム製品、コルク製品、合成樹脂製品、其他）
組　紐（船舶工業用各種組紐、ビニール、手織、杉織テープ、真田紐）
ロープ（綿、麻、ナイロン其他）
帆　布（配管工事キャンバス他）
蛇　腹（工作機械用其他）
其　他（胴綱、馬具、擬装綱他）

一、会社の沿革
明治二十八年十月中央区日本橋大伝馬町十番地に於て、東京製綱(株)直請工場(株)橘商店として創立、主として旧海軍の船舶用組紐、綿麻パッキング、馬具等を製造其後昭和六年十一月中央区西八丁堀三丁目十三番地に移転、組織を合資会社橘商店と改め業務を充実営業中第二次世界大戦となり昭和二十年五月二十三日空襲に依り店舗焼失一時休業の止むなかりしも昭和二十一年十一月現在地に橘商会として再発足、昭和二十六年六月人員の充実と工場の増設を図り増産を期し、組織を株式会社に改め、更に芝支店、郡山、秋田営業所を開設、静岡、新潟、大阪北海道に代理店を設置し創業以来六十有余年の経験と技術を活し事業の拡張に努力しつつあり、尚川口市領家に目下総合工場設立近々完成の予定。

一、代表者の経歴
橘　ひ　さ　岐阜県出身明治二十二年五月十六日生
前社長橘長次夫人　昭和二十七年三月一日前記社長死亡後代表取締役就任
村　瀬　憲　治　東京都出身明治四十三年二月一日生
日本大学　商経学部卒　富島組　東京港運を経て橘工業創立発起人となり代表取締役就任
橘　重　男　福島県出身大正十年二月九日生
昭和八年上京橘商店に入社後橘工業創立発起人となり代表取締役就任

一、会　社　名　大洋船具株式会社

一、本社所在地　東京都中央区日本橋茅場町三丁目七番地ノ一

一、支店、出張所所在地　大洋船具株式会社横浜支店
横浜市神奈川区子安通一ノ一〇九

一、創立年月日　昭和二十一年四月三十日

一、資　本　金　二百万円

一、代表者氏名　山中健之助　赤池喜子蔵

一、役員氏名　山中健之助　石田文次郎　渡辺進一
風斗　励　赤池喜子蔵　森田博夫
深沢正太郎

一、業種内容　一、船舶用品及漁業用品の販売
一、化学工業薬品及毒物、劇物並に医薬の販売
一、以上の事に附帯する一切の事業

一、会社の沿革

一、昭和二十一年四月　中央区日本橋大伝馬町一ノ二に大洋産業株式会社として発足す
一、昭和二十二年四月　中央区日本橋茅場町三ノ五に移転
一、昭和二十四年六月　商号を大洋船具株式会社と改称
一、同　九月　日本ペイント株式会社特約店となる
一、昭和二十六年五月　川崎製鉄株式会社特約店となる
一、昭和二十七年六月　日進クリーナー工業株式会社代理店となる
一、昭和三十一年一月　現在地に移転
一、同年　二月　泰東株式会社代理店となる
一、同年　五月　旭電化工業株式会社代理店となる
一、昭和三十一年二月　興国綱線索株式会社代理店となる
一、昭和三十二年五月　藤倉ゴム工業株式会社代理店となる

一、代表者の経歴

山中　健之助（明治四一年五月二三日生）
本籍　新潟県村上市一五四四
現住所　東京都中央区築地二ノ四

大正十四年　三月　新潟県村上中学校卒業
昭和　二年　五月　株式会社大村商店入社
昭和十六年　九月　企業整備により右退社
同　十月　日本船用品統制株式会社入社
昭和二十一年三月　右社解散により退社
同　四月　大洋産業株式会社創立取締役就任
昭和二十四年六月　大洋船具株式会社と改称
代表取締役となり現在に至る

赤池　喜子蔵（明治四五年一月二五日生）
本籍　東京都文京区湯島三組町八三
現住所　同右
昭和　六年三月　静岡県立三萬商業学校卒業
同　四月　株式会社　大村商店入社
昭和　十六年九月　企業整備により右退社
同　十月　日本船用品株式会社入社
昭和二十一年三月　右社解散により退社
同　四月　大洋産業株式会社創立取締役就任
昭和二十四年六月　大洋船具株式会社と改名専務取締役就任
昭和三十三年七月　代表取締役就任現在に至る

一、会　社　名　的場船具工業所

一、本社所在地　東京都江東区深川永代一丁目二十六番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和二十四年十一月一日

一、資　本　金　五十万円

一、代表者氏名　的場恒男

一、役員氏名　代表取締役　的場恒男
取締役　稲垣勝蔵
役締役　吉野市郎
監査役　小栗米隆

一、業種内容　帆布裁縫、諸綱細工、船具一式、綿麻帆布各種ロープ販売加工

一、会社の沿革

前社長的場丹蔵大正十三年石川惣太郎氏より分離同氏の援助の下に京橋区越前堀（現明正小学校一部）に的場製帆所を開業昭和二年明正小学校拡張の為現住所江東区深川永代一の二六に移転以来幾星霜製帆工場として大過なく営業致したるも昭和二十年戦災に依り灰燼に帰し一時中断、同二十二年復興に着手超えて二十四年法人組織に変更し以来経済界の好況と共に次第に業績は上り社業を確立するに至った。昭和三十三年前社長は六十八才を以て逝去し現社長其の後を襲い現在に至る。

一、代表者の経歴

大正十四年二月十五日　中央区越前堀に生る
昭和十三年明小高等小学校卒業後家業に従事する傍ら昭和十七年中央商業学校卒業
昭和十九年七月応召　同二十一年復員す
昭和二十三年稲垣工業株式会社に勤務同二十五年的場船具工業所に復帰、其の間的場製帆所を法人組織に変更し取締役に就任
昭和三十三年五月一日同社代表取締役に選任され現在に至る

一、氏　名　藤井松之助

一、略　歴

一、明治二十七年八月二十七日　神奈川県横浜市海岸五丁目二十八番地に生る。

一、横浜市立商業学校夜間部を中途退学。

一、明治四十年四月　横浜市元浜三丁目中村船具店に入店、船具加工を修業す。

一、大正五年　京橋区湊町一丁目　石川惣太郎商店に転勤す。

一、昭和十五年十月　日本橋茅場町三丁目に於て独立開業せり

一、昭和十六年十二月　企業整備令の実施に当り、東京重布有限会社を経て大亜工業株式社に入社す。

一、昭和二十四年十二月　石川商工株式会社に復帰して、取締役に就任引続き今日に至る。

東京藤井産業株式会社

一、会社名

一、本社所在地　東京都中央区越前堀一丁目五番地

一、支店、出張所所在地　大阪市西淀川区竹島町五丁目十七番地

一、創立年月日　昭和二十六年八月四日

一、資本金　二千五百万円也

一、代表者氏名　藤井益雄

一、役員氏名　藤井益雄、藤井基宏、大葉経男、杉田良久

一、業種内容　ワイヤロープ、マニラロープ、船具類、鉄鋼二次製品、各種パイプの販売

一、会社の沿革

一、昭和二十一年九月　合資会社山元商店の罷災焼失に依る解散に伴い元同社業務責任者藤井益雄が営業権を譲り受け個人経営による藤井商店を創立す。

一、昭和二十二年三月　営業網鉱張のため、個人営業を廃し藤井益雄を代表取締役とする株式会社藤井製作所を資本金一百万円で設立。

一、昭和二十六年八月　機構整備充実の為め資本金三百万円に増額すると同時に株業式会社藤井製作所を解散し東京藤井産業株式会社を設立。

一、昭和二十八年六月　大阪市西淀川区竹島町五丁目に大阪出張所を設け鋼管の本格的生産販売に着手す。

一、昭和三十年四月　資本金を六百万円に増資。

一、昭和三十一年八月　姉妹会社として藤井基礎工業株式会社を資本金六百万円で設立し、基礎工事鑿泉工事の営業を開始す。

一、昭和三十二年四月　資本金を一千万円に増資。

一、昭和三十四年一月　資本金を二千五百万円に増資し現在に至る。

一、代表者の経歴

大正十四年越前堀中学校卒業後、鉄砲洲の宇田川商店に就職せるも翌年営業不振に陥り倒産したので止むなく退店した。其の後同商店に勤務していた先輩の飯田元吉氏が新たに独立開業されたので入居し勤務の傍ら中央商業夜間部を卒業す。関東大震災後山本光雄氏と飯田元吉氏合弁の山元商店へ入社、大東亜戦争勃発と共に召集され、昭和二十一年九月新京より復員し現在地にて独立開業し代表者として今日に至る。

一、会社名　古沢工業株式会社

一、本社所在地　東京都中央区霊岸島一丁目一〇番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　明治四十三年四月一日

一、資本金　五十万円

一、代表者氏名　古沢卯之助

一、役員氏名　代表取締役古沢卯之助、取締役中塚良一、古沢千世、監査役森谷己貴

一、業種内容　艀シート其の他帆布加工並に船具一式

一、会社の沿革

明治四十三年四月　先代古沢卯之助により深川扇橋三丁目十七番地に於て独立開業し前記帆布製品の加工と船具品の販売に従事し専念して居りましたが昭和二十三年三月の戦災に依り焼失したのでこれを契機として中央区霊岸島一丁目一〇番地の現住所に事務所工場を新築移転した昭和二十一年に法人組織に改めた。

一、代表者の経歴

中央商業を卒業後家業に従事し昭和十八年六月父卯之助が死去したので家督を相続し引続き今日に至りました。

務東京営業所設立と同時に三十一年十一月代表取締役に就任引続き今日に至れり。

一、会社名　日光商事株式会社

一、本社所在地　東京都港区芝海岸通り三丁目一番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和二十三年十月十八日

一、資本金　二百万円

一、代表者氏名　青木勝治

一、役員氏名　代表取締役青木勝治、取締役吉原仲松、高橋陸太、監査役青木喬

一、業種内容　汽船関係、船用品販売業

一、会社の沿革

青木商会として広島県尾道市に設立昭和二十五年現在地に東京営業所を開設同三十三年九月商号変更して現在に至る。

一、代表者の経歴

昭和十五年三月東京外国語学校を卒業兵役復員後青木商会に勤

一、会　社　名　三好産業株式会社

一、本社所在地　東京都中央区越前堀三丁目十一番地

一、倉庫所在地　東京都中央区越前堀三丁目四番地

一、創立年月日　昭和二十三年九月十七日

一、資　本　金　二　百　万　円

一、代表者氏名　取締役社長　阿　部　義　尚

一、役　員　氏　名　取締役山田盛重、取締役小橋啓一、取締役田中富士、監査役猿橋定一郎、監査役阿部政司

一、業　種　内　容　船舶用品、土木建築鉱山用具、度量衡器販売

一、会社の沿革

昭和二十三年九月創立　資本金　十八万円

昭和二十五年十月　資本金　五十万円に増資

昭和三十一年六月　資本金　二百万円に増資

昭和三十四年九月現在　従業員　二十八名

一、代表者の経歴

元日本船用品統制株式会社社員

一、会　社　名　斎藤船具店

一、本社所在地　東京都中央区新川二丁目四番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和七年七月一日

一、資　本　金

一、代表者氏名　斎　藤　清　三

一、役　員　氏　名

一、業　種　内　容　船舶用品、マニラロープ、ワイヤロープ、ペイント類、及び土木建築用品の販売

一、会社の沿革

昭和七年七月一日　現代表者斎藤清三により船舶用品販売を目的として創立された。

一、代表者の経歴

明治二十六年五月　埼玉県栗橋町に生る

明治三十九年　京橋区東湊町一丁目北山船具店へ見習いとして入店す。

爾来二十八年に亘り大過なく勤続し昭和七年七月主家の許しを得て斎藤船具店を創立し現在に至る。

一、会　社　名　東京船用品株式会社

一、本社所在地　東京都中央区湊町三丁目二十三番地

一、支店、出張所所在地　東京都中央区明石町十五番地

一、創立年月日　昭和十六年十月二十七日

一、資　本　金　五　百　万　円

一、代表者氏名　代表取締役　篠　田　隆　太　郎

一、役　員　氏　名　代表取締役馬場七郎、相談役塚本常五郎、取締役会長成瀬勝蔵、取締役加藤政次郎、岡田光雄、監査役石田恒男

一、業　種　内　容　ワイヤロープ、マニラロープ、塗料、綿麻帆布、線索、航海計器、機械工具、救命器具、船灯、信号旗、法定備品、荷役用具、船舶物、船用品一般

関西ペイント(株)代理店、昭和製綱(株)代理店、東芝商事(株)特約店、前文製綱(株)代理店、日本信号旗(株)特約店

一、会社の沿革

当社は昭和十六年十月二十七日海運総局の指導の下に企業整備令に依りて船用品販売業者の企業合同を目的として創立せられ初代社長成瀬勝蔵、専務取締役山本光雄、専務取締役塚本常五郎三氏により東京船用品配給株式会社と称して発足、昭和十七年九月都内の業者全面的に企業合同して船用品の配給を行い、終戦後企業整備令の廃止に伴い通常の商事会社として再発足、社名を東京船用品株式会社と変更、船用品全般の納入、販売に従事して現在に至る。

一、代表者の経歴

篠田隆太郎　明治三十三年十月七日　東京市京橋八丁堀に生る

父業船具商を継承、合資会社篠田船具店を設立代表社員就任昭和十六年企業合同に依り廃業、経理課長として入社、昭和二十六年十一月常務取締役兼経理部長に就任、昭和三十二年十一月代表取締役に就任現在に至る。

馬場七郎　明治三十二年九月十七日　福岡県八女都岡山村に生る。

昭和四年九月　塚本船具店入店、昭和十四年四月船具商を開業

昭和十六年企業合同に依り廃業、販売課長として入社、昭和二十六年十一月常務取締役兼営業部長に就任、昭和三十二年十一月代表取締役、営業部長に就任現在に至る。

一、会社名　株式会社鈴春商店

一、本社所在地　東京都中央区日本橋箱崎町一丁目六番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和十四年十二月

一、資本金　一百万円

一、代表者氏名　代表取締役　望田桂一

一、役員氏名　取締役吉野市郎、鈴木福次、吉野八重子

一、業種内容　船具及土木建築用具並に諸機械製作修理販売
右記の業務に附帯する一切の業務

一、会社の沿革

明治四十三年三月　現在地に鈴木春蔵が鈴春商店を創立

昭和十四年十二月　株式会社鈴春商店に改組

昭和二十一年五月　鈴木春蔵引退し現在に至る

一、代表者の経歴

大正十年二月十七日　現在地に生る

昭和十三年四月　鈴春商店に入店

昭和十五年九月　東京市立商業学校卒業

昭和十六年二月　入隊

昭和二十一年三月　復員

昭和二十一年五月　株式会社鈴春商店代表取締役に就任現在に至る

一、会　社　名　杉田船用品工業株式会社

一、本社所在地　東京都江東区深川永代一丁目二十六番地

一、支店、出張所在地

一、創立年月日　大正十二年十月三十一日

一、資　本　金　五百万円

一、代表者氏名　代表取締役　杉田平八郎

一、役員氏名　取締役　杉田よね、鈴木慎太郎、鈴木孝之助
梶山清次、監査役大木豊吉

一、業種内容　船舶艤装用機械器具金物
土木建築及鉱山用機械器具金物
其の他船用品一切

一、会社の沿革

大正十二年十月　先代杉田八郎に依り杉田商店が創立された。

昭和十二年二月　先代没後は相談役鈴木角五郎氏の絶大なる支援協力に依り、逐年優秀な業績を収め業礎を確立した。

昭和二十年　戦災に遇い一切を灰塵に帰したるも、鋭意復興に努力し、其の後経営も順調に発展した。

同二十三年　資本金七十五万円を以て株式会社に組織を変更し更に三十年五百万円に増資し現在に及ぶ。

一、代表者の経歴

杉田八郎の二男に生れ、二十三年取締役に就任、三十年社長杉田よねの後任として、代表取締役に選任され、引続き今日に至る。

一、会社名　杉田産業株式会社

一、本社所在地　東京都中央区越前堀一丁目二番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和二十六年十月三十日

一、資本金　三百万円

一、代表者氏名　代表取締役　杉田俊丸

一、役員氏名　取締役　杉田よね、永井清三郎、鈴木角五郎、鈴木慎太郎

一、業種内容
一、船舶、漁業、土木建設、各種資材の販売
二、各種ロープ、チエン、シンプル、タンバックル、無線機装具の製作販売
三、各種ブロック、ウィンチ、起重機の設計製作販売
四、各種パッキング、麻縄帆布の加工販売

一、会社の沿革
昭和二十六年十月　杉田産業株式会社を創立し引続き現在に至る。

一、代表者の経歴
大正十三年九月二十二日　杉田八郎の三男として生る。杉田船用品株式会社創立と共に専務取締役に選任せられ、昭和二十六年十月杉田産業株式会社を新たに設立して、代表取締役に就任今日に至る。

一、会　社　名　株式会社 木 村 商 店

一、本社所在地　東大阪市西区北滝川二丁目三番地

一、支店、出張所所在地

東京支店　東京都港区芝金杉浜町三十三番地

徳山支店　徳山市野上町三〇四六番地

神戸営業所　神戸市生田区相生町五丁目二十三番地

一、創立年月日　大正九年四月一日

一、資　本　金　一千万円

一、代表者氏名　代意表取締役　久貝幸太郎

一、役員氏名

取締役　田原博

取締役　山本強

取締役　吉田甚吾

取締役　岡本末一

取締役　北村嘉房

監査役　日下部久雄

一、業種内容

船舶艤装用品一式、造船用資材一式、鋼索麻索、錨鎖、塗料油脂、工具、帆布、潜水機具、輸送機一式、ディーゼルエンジン、付属一式、縫製加工、ハッチボード製作

一、会社の沿革

大正九年四月　大阪市港区市岡浜通り二丁目にて現社長久貝幸太郎創業

昭和十五年十月　有限会社大阪船用品配給所を同業者統合設立

昭和十七年二月　企業整備令に依り大阪船用品配給株式会社に統合

昭和二十三年十一月　前記会社解散に伴い大阪市西区北境川町二丁目三番地に株式会社木村商店を設立再発足

一、代表者の経歴

大阪市港区尻無川北通り二丁目に於いて

大正九年四月船具商木村商店を開業

昭和七年九月　解体事業鉄工業兼営

昭和九年四月　満州ハルビン市に海外支店設置

昭和十五年十月　有限会社大阪船用品配給所代表者設置

昭和十七年二月　大阪船用品配給株式会社取締役就任尻無川営業所長及本社購買並に統制品部門職掌

昭和二十三年十一月　株式会社木村商店設立代表取締役となり今日に至る。

一、会　社　名　株式会社 水 野 船 具 店

一、本社所在地　東京都海区芝浦一丁目四十八番地

一、支店、出張所所在地

一、創立年月日　昭和二十一年四月

一、資　本　金　五　十　万　円

一、代表者氏名　代表取締役　水　野　梅　治

一、役　員　氏　名

一、業　種　内　容　船具用品並びに建設用品の販売

一、会社の沿革

昭和二十一年四月開業す。東京港に於ける荷役会社並びに回漕店及び内航船を目標として、荷役道具外船用品一切を販売すると共に併せて建設、土木用品の販売も兼業す。

一、代表者の経歴

昭和二年三月　福島県石川中学校を卒業後上京し同年四月東京朝日新聞社販売部に入社した。昭和十八年、戦局の苛烈と共に新聞販売が統制になりし為め、同年芝浦支店長を辞任した。其の間東京港発展のため日夜奮闘努力す。

昭和二十年　敗戦による海上運輸の暗憺たる実状を見て悲憤慷慨やるかたなく祖国再建のためには先ず海上輸送の急務なるを痛感し、株式会社水野船具店を創立し、代表取締役として今日に至る。

一、会社名　松井商事株式会社

一、本社所在地　大阪市大正区大正通り一丁目二十七番地

一、支店、出張所所在地

東京支店　東京都江東区深川佐賀町一丁目一〇番地

福岡支店　福岡市管絃町二一〇番地

札幌支店　札幌市北三条西七丁目一ノ六

一、創立年月日　昭和二十二年二月一日

一、資本金　二百万円

一、代表者氏名　松井正

一、役員氏名　松井きみ子、宮村博己、東酒宇一、奥山操

一、業種内容　内燃機関部品、船具、機械工具、建設機械、計器、製作販売及び輸出入

一、会社の沿革

設立　昭和二十二年二月一日　三重県伊勢市河崎町五三番地に設立、資本金五十万円

本社移転　昭和二十四年十月一日　本社を大阪市大正区大正通り一丁目二十七番地に移転

支店設立　昭和三十二年五月十日　東京支店設立

増資　昭和三十四年一月八日　資本金を二百万円に増資

支店設立　昭和三十四年八月一日　福岡支店設立

支店設立　昭和三十四年十月十日　札幌支店設立

一、代表者の経歴

大正十二年八月二十七日　三重県伊勢市吹上町にて生る

学校卒業後株式会社松井鉄工所取締役

昭和三十二年二月　松井商事株式会社を設立代表取締役となる

関連産業の現況

造船産業

造船業はいま戦後二度目の脱皮に迫られている。戦前〝帝国海軍〟という名の強力無比な支柱に寄りかかり、温室育ちで伸びたこの業界は、敗戦でにわかに平和産業として自立することになり、国内のわずかばかりの計画造船で露命をつなぐこと九年、二十九年以降やっと輸出産業として返り咲いた。しかし三十二年以降の世界的な海運不況によって、海外船主の新船需要はすっかり低調となり、輸出ブームでふくれ上った建造能力をいまやかえって持て余す始末である。海運不況がやっと底固めの時期にさしかかり、国内海運業の再建策がようやく糸口についたとはいっても、まだまだ内外の新船需要が造船業にかつての盛況をよみがえらせることは望みがたい。

いまわが国の造船界はなんとかして海運界依存の停滞産業から、新しい息吹きをもつ成長産業へ脱皮しようと努力しているが、それは戦後の軍需依存からの脱却にも比べられる大きな転換といわねばなるまい。

二十九年から活発になった船舶輸出は年ごとに増加し、三十一年には輸出額九百三十五億九千万円（百二十七万総トン）で主要品目のうち第二位、三十二年には千二百六十六億一千三百万円（百四十七万総トン）で、綿織物を抜いて第一位と文字通り輸出産業の花形となった。それが昭和三十四年十一月記

昨年から不況の声がかかり、本年にはいると海運不況のあおりを受けて輸出船の受注が激減した。

最近、運輸省がまとめたところによると、三十四年度上期の輸出船建造実績は二十隻、二十万三千八百総トンで、〝少ない少ない〟といわれた昨年同期の二十二万一千九百総トンと比べてもさらに下回っている。その後も好転のきざしはほとんどない。これでは年間二百数十万総トンという建造能力をとても維持できるものではない。

最近では遊休（アイドル）する造船所も現われ年末になると弱体企業の中には操業中止の危機にさらされるところさえあるだろうといわれている。つまり六月末現在の手持ち工事量は二百八十四万総トン、平均一年分となっているが、この九四％を大型タンカー建造の十三造船所が占め、工事量が極端に偏在している。タンカー造船所十三工場の手持ち工事量が平均一・四年分なのに、貨物船をおもに建造しているところは平均〇・三年分余りしかない。したがって貨物船主力工場は年末にはかなりのピンチを迎えるとみられるわけである。

「ところが最近の造船業界は受注先細りをあまり嘆かなくなった。どうせ一九六二年ごろまでは輸出船には期待が持てないから、いつそこの機会に陸上機械部門への進出を図ろう」というので、いまや陸上機械熱に

沸いている。この上陸作戦によって現状打破の突破口を開こうとしているのだ。

造船会社が陸上機械部門に進出しようとしているのは一時しのぎのものではない。経営の基本方針としていままでの船舶重点から陸上機械にも手をつけ、両足でしっかり経営を安定させようということだ。三菱造船が最近「二年後には船と陸上機械部門の売り上げ比率を半々にもっていく」との基本方針を打ち出したのがそのいい例だ。しかもこれには〃将来、船舶部門の仕事が忙しくなっても陸上機械部門のペースは落とさない〃とのただし書きが付いている。三菱造船といえば長崎造船所を擁し、総売り上げのうち七割以上が船舶で占めていたいわゆる造船専業会社である。

日立造船も陸上機械部門と船舶部門の比重を四対六で安定させるよう桜島工場の設備拡張に着手した。川崎重工が明石工場の拡張を計画しているのも同じねらいによるものだ。

また同じ産業機械の中でも成長力の高い業種のプラントをねらっているのも特徴である。

わが国の造船所は原動機、ボイラーなども合わせて生産し、陸上機械部門への進出はやりやすいといわれているから、資金力を持つ造船会社が本腰を入れて機械部門にはいってきた場合、中小工場の多い産業機械業界はかなり大きな変動が予想される。

いま造船界は第二の脱皮に揺れているのだが、現状はこうだ。春以来、造船各社は社内機構を改めて陸上関係の営業部門強化と技術開発に乗り出した。特に技術についてはたとえば三井造船は四月に機械開発課を新設した。ここでアイデアと技術を開発し、一方販売先として三井系各社の後援を頼んで玉野にある化学工場をフルに動かそうというわけである。

三菱造船では欧州に駐在員を派遣してもっぱら欧州各国の技術開発の現状視察に当らせることにした。いずれも陸上機械部門への進出の足がかりを新技術に求めようというわけで、各社の外国技術導入あるいは提携も盛んだ。川崎重工が西独クルツプ社と提携して製鉄機械製造に乗り出したのをはじめ、日立造船も西独ルルギ社と製鉄機械の技術導入を交渉している。

こういった動きに伴い思わぬ波乱も起きる。三菱造船が外国某有名メーカーから技術導入して起重機の製造に乗り出そうとしているとの話が伝わるや、国内の有カメーカーである石川島重工などがこれに抵抗し、一時は産業機械工業会で反対決議をするまでの話があったほどだ。

造船各社にとって陸上機械部門への進出に伴う最大の悩みは技術者不足だ。特に石川島重工、日立造船、三菱造船などは大量の技術者、それも経験があり、すぐ役に立つ者を募集している。各社が先を争って技術者の大量募集に乗り出したのは造船界始まって以来といわれており、不況下に皮肉な現象である。それでもなかなか集まらず〃設備はなんとかいまので間に合うが、人がいないことには……〃と技術者問題は脱皮を図る造船会社の悩みの種になってきた。このため研究室で大学新卒業者

の再教育をやったり、大学院に派遣するなど社内での養成にも力を入れだしている。

ではこれだけの技術者を集め、新技術を導入して陸上機械部門の拡充を図っている造船会社は将来一体どうなるか？　最も典型的とみられる三菱造船の例でいうと次のようだ。

三菱造船の三月期売り上げ額は新造船百九十七億円、修繕船百十六億円、陸上機械部門七十億円で陸上機械の売り上げ比率はまだまだ低い。これは長崎造船所の比重が高く、陸上機械工場を持つ広島造船所の二男坊は一時は分離説が出るほど持て余られたものだが、いまや面目を一新しようとしている。

この例が示しているように〃海陸にまたがる重工業会社〃がいま造船各社の描いているあすの姿である。いったん海外船主の船舶需要が起れば世界一を誇る建造能力でそれをこなし、一方、船舶需要が不振なら国内産業の成長性に期待して産業機械プラント生産のピッチを上げるしもとよりこの海陸両様作戦は大きな資本と設備を持つ造船会社だからこそできるものである。それだけに陸上機械と船舶との力の配分は今後の造船会社にとって新しい経営上の課題となってくることだろう。

海運産業

海運会社は借金の重荷にあえいでいる。戦争で船をほとんど失いいままで借金を重ねて船を造ってきた。そのため、現在の借入金は二千三百億円に達し、その金利だけでも年間二百億円をこえる状態である。朝鮮動乱やスエズ動乱でブームに酔っている間は海運会社の鼻息も荒く、せっかく実施された造船利子補給も三十二年には停止に応じたほどの勢いだったが、三十二年から始まった海上運賃の低落で、こんどはすっかりまいってしまった。こうなると海運はなんといっても重要産業の一つだけに、政府も黙っているわけにはいかず、財界もまた重体に陥った海運企業の治療法を提案するなどで、運輸相の諮問機関である海運造船合理化審議会（委員長石川一郎氏）と自民党の運輸交通特別委員会（委員長増田甲子七氏）が中心になって半年近く海運再建策を検討した結果、最近ようやく利子補給を骨子とする具体案がまとまった。この分でいけば海運業は一足先に日の目をみられそうな形勢といえよう。

いろいろな業種をながめ渡してみて海運業ほど国際競争にさらされている業種はあるまい。海運業はしばしば企業基盤が弱いといわれるが、これはとりも直さず国際競争力が弱いということである。戦前、英米に次いで世界第三位を誇ったわが国の海運業は大戦で事情が一変した。保有船腹量でこそ四百六十六万総トン（三月末現在、外航船だけ）に達し、世界第五位にまで回復したが、反面、会社の経営内容はきわめて貧弱なものとなった。

これを英国と比べるとまずわが国は戦争で八百八十三万トンの船を失ったまま、これに対する戦時補償約二十五億円（時下七千五百億円）を打ち切られて、戦後無一文で再発足した。一方英国は千二百万総トンを

失ったものの、二億七千万ポンドを補償され、新船建造資金に充てることができた。わが国は戦後造った船の資金は、まるまる借金に頼ったので、自己資本平均二五％前後なのに対し、英国では、この補償のおかげで、七五％前後が自己資本である。しかも借入金の金利はわが国が開銀金利六分五厘、市中銀行年一割弱、平均七分五厘程度なのに対し、英国は年四分程度で、自己資金も含めた資金コストは年二分以下とみられている。

借入金がふえるのに償却はなかなか進まない。英国のほぼ二倍のピッチで船をふやしたが、借金利払いに追われて船の償却が思うようにできないわけだ。これを一九五七年末の残存簿価の例でみると日本郵船は総トン当り簿価が十一万四千八百円、英国Ｐ＆Ｏ社は五万九千円となっている。別の面からみると社内留保金は日本郵船がほとんどないのに、Ｐ＆Ｏ社は百八十四億円も持っている。Ｐ＆Ｏ社は世界第一の定期船会社。目本郵船もかつては世界の一流定期船会社だった。

わが国の海運会社の経営基盤は世界の主要海運会社と比べはるかに弱い。それでも朝鮮動乱やスエズ動乱の時は海上運賃が暴騰し海運会社はブームを満喫できた。それに借金はあっても、日常の運転資金にはそう困らない業種だけに痛いところに触れずに過ごすこともできた。ところが三十二年から始まった運賃市況の低落はひどくなる一方で、しかも早急には回復の見通しがつかなくなってきた。

石炭の不定期船運賃に例をとるとハンプトンローズから欧州向けが三十一年十二月にはトン当り百十九シリングもしたのに、三十二年六月には四十七シリング台に下がり、その年の十二月には二十五シリング、三十三年以降は欧州の貯炭増に災いされて二十シリングすれすれの線で低迷を続けている。最高時からみればほぼ六分の一に落ち込んだわけである。タンカー運賃はもっと激しく変動した。

スエズーブームの三十一年十二月には中東から西欧向けの運賃が米海事委員会（ＵＳＭＣ）の決めた基準に対しプラス一九四もしたのに、三十二年六月にはマイナス四〇、三十二年十二月にはマイナス六〇台に落ち、その後、回復していない。

このように激しく海上運賃が低落したのは、ブームの反動に加えて世界的な景気後退で荷動き量が減ったこと、そのうえブームに刺激されて発注した新造船がこのころになってどんどんでき始め船舶需給のバランスが全くくずれてしまったことなどのためである。これだけの過剰船腹をかかえては少々荷動き量がふえても、なかなか運賃は持ち直してこない。

ただでさえ企業基盤の弱いわが国の海運会社はこのような不況で苦しくなる一方で、昨年三月期は利子補給対象五十三社のうち三十一社がまだ配当していたのに本年三月に配当したのはわずか一社という惨状となった。このため海運界は開銀金利の一分五厘引下げを政府に要望し、その後の海運再建運動の口火を切ったわけである。

再建策を検討した主役は自民党運輸交通特別委員会と運輸相の諮問機

関である海運造船合理化審議会だが、すでに両者ともそれぞれ結論を出し、相互の調整も終った。その内容は大きく分けると助成策と今後の新造船方式である。助成策の中心は利子補給で、市中金融機関の金利を年五分となるよう利子補給することにし、明年度予算に二十一億円を計上、また開銀金利年六分五厘のうち三分をタナ上げするため明年度に四十二億円の予算を見込んでいる。いうまでもなく海運会社の利子負担を軽くして徐々に企業に力をつけようというものである。そのほか船質改善のため老朽船の解体補助（明年度予算に十六億円）、低性能船の主機換装資金として開銀融資（十五億円）、まるまる外貨獲得になる三国間航路に対する助成（十五億円）、移民船に対する補助（運輸省では六億七千五百万円を要求）などもある。

再建問題で最初から問題になるのは〃業界がまず助成の受け入れ体制を整えろ〃という意見と〃海運が国家にとって重要産業だというなら、まず国策として助成を考えるべきだ〃という主張をどうさばくかということだった。結局これは〝業界の自主的な合理化努力を前提として、助成することになり、その合理化努力を審査するため政府に管理委員会を設けることにした。

次に問題になるのは船腹増強だが、これは①せっかく借金を減らし利子負担を軽くしても、またまた船を造って借金の重荷をふやすのではなんにもならない、②しかも船の高速化、大型化、専用化など船質向上の競争に遅れないよう新しい船はぜひ造る必要がある――という二つの立場をどう調整するかだ、運輸省は特別機関を設け、ここで船を造り、将来、海運会社に力がついたら海運会社に売り渡すとの案を強く主張したが、これは官僚統制のおそれがあるとして反対が強く、結局、開銀案をとることとした。開銀案とは償却前利益の範囲内で船を造るというものでそうすれば借金はふやさずにすむという計算である。

そして上述のような助成を行ない、また償却期限を延長すれば海運会社もしだいに立ち直り、やがては未償却分も減るだろうと見込んだものである。これによると三十五年度には償却前利益二百二十二億五千百万円が予想され、これに見合う建造費は二十三万五千総トン、内訳は定期船十万五千総トン十一隻（うち超高速船一〇、〇〇〇総トン型六隻）不定期船三万総トン四隻、鉱石船四万二千総トン三隻、タンカー五万八千二総トン隻である。この調子で三十六年度は二十万五百総トン、三十七年度は二十六万五千五百総トンを建造することになっている。

このような助成策が実現すれば海運界はどうなるか――海運界ではこの案に対し①開銀金利が〃引下げ〃でなくて〃タナ上げ〃になったこと、②船価が高い超高速船についての建造補助が盛られていないこと、③また一部には新造船方式が借金をふやさない程度にとどまり積極的に累積未償却（九月期予想は五十三社合計七百三十億円）を減らす措置がとられないことなどで不満を残しているが、自民党特別委ではこれで五年後には大部分の会社が年六分程度の配当ができるだろうし、早いところは二、三年後にそうなるだろうといっている。

九月期決算では日本郵船だけでなく、定期船主力会社はいずれも好転している。大手四社にっいてみると郵船が三月期の償却前利益十二億五千万円に対し、九月期は二十億円、大阪商船は三億円に対し八億円、三井船舶は二億円に対し九億円、川崎汽船は四億円に対し八億円と予想される。

これは第一に貿易拡大、特に対米輸出がふえ、ニューヨーク定期航路では一船当たりの雑貨の積み取り量が昨年末以来一割から二割ふえていることによるものであり、第二にタンカー運賃の低下で燃料費が下がり、不定期船市況の悪化で用船料が下がり、造船不況で船の修繕費が下がるなど経費が少なくなったことによるものだ。また海運業者自身の合理化が進んだことや各社の協調が進んだことも役に立っている。

タンカー運賃市況はなお低迷を続けそうだが、一足先に不定期船運賃市況は最近いくらかいい材料が出てきた。その一つは解体船腹量が一〜九月間ですでに昨年の実績を百万総トンも上回る二百六十八万総トンに達していることだ。つまり不況の最大原因となっている過剰船腹がそれだけ減ったわけだ。

一方、過剰船腹に拍車をかける新船建造もこのところようやく頭打ちとなってきた。また世界的な貿易量の拡大も見のがせない。これを不定期船貨物成約量でみると九月には八月の五五・六％増と大巾にふえ、特に穀物は八〇％も急増した。昨年九月と比べても成約量も約一・五倍となっている。これは運賃市況にも反映し、十月下旬現在、穀物は米大平洋岸から日本までトン当り六ドル三十セント、石炭はハンプトンローズから日本まで八ドル五十セントになっており、それぞれ最低だった七〜八月ごろに比べ四割から五割上昇している。

不定期船運賃が全般的に三割上昇すれば不定期船会社の経営も好転するだろうといわれているだけに、こういった動きは注目されるわけだ。もっとも穀物運賃の上昇は欧州の家畜用穀物が不作だったのと十月初めに行なわれた米運海岸、ガルフ湾の港湾ストで荷主が成約を急いだためなどによるものともいわれなお大量の過剰船腹をかかえている現在、この傾向もせいぜい明年五月ぐらいまで続くかどうかとの見方もある。しかし世界経済の基調は拡大を続け、これに伴って最近は荷動きの中心が穀物から鉱石、石炭、木材などの部門に移ってきている気配さえみえ、船腹需要がふくらみ始めている。このため秋口の季節的な運賃引き締まりをきっかけにして本格的な海運市況の立ち直りも期待が出てくるわけである。ともかく〝最悪の時期は過ぎた〟との感じが強い。

回顧録

回顧

谷村　勇

東京船具同業組合の大御所は、石田由松氏（会長）岡田仙太郎（副会長）であろう。何の束縛もない時代で、全く自由に振舞えるにもかかわらず、全同業者をまとめ、一致団結させて微動だもさせなかったのは何と言っても見上げたものである。

別に威張るでもなし、何時もニコニコとしている丈けで誰も彼もよく従った。何か儲かる仕事があれば、手間隙かけて、面も一点疑惑が起こらないように、役員同行で下見買付けをする。買入資金は自分等で銀行から借りて来る。

愈々競売りになれば、率先して自分等で競り上げて買う。売れないものが出れば最後は自分で引受けて仕舞う。

会に借金が出ればコツコツと丹精し、利益を積んで消却する。会の出席が悪ければ常に足で訪問する。競りの成績が良ければ、喜んで身銭を切って皆で、汁粉を食べに行ったりする。宴会には巫先寄附する。誰でも勝手に言いたい事を言わしておくがよくシメククリはされた。

特に岡田氏は、始終石田会長の女房役となりいやがられる事は一切引き受けてソツが無い。前原正幸氏、山本光雄氏等智能の人達がよく円滑油の役をつとめて円滑に整理を進められた。

この頃業界に太田屋鈴木佐一郎氏が居られ、頭脳明楯では、石田、岡田、鈴木三氏が、何れ劣らぬ三羽烏、莫大な遺産を残して死なれたが、あと如何して居られるか時々追憶する。自分の如きは会社の借金を引き受けて、経験もなく、資本もなく、業界に飛び込んだが、解らないことは会長、副会長に惜しみなく教導して貰い、特に困った時はよく助けて貰ったのである。直接、間接恩を受けた人は私丈けでなく、業界にても少くないと思う。

後に商業組合が組織せられ、統制が行われた時、私は推薦せられて理事長になったが、その後、どんなに親切に運行を助けられたか民主政治の粋を理解しておられた。

実に捨身で業界を愛し、正義を踏んで立派な人々であった。

今は加藤政次郎氏が理事長になられ、至誠、懇切敬服の他はない。殊に成瀬氏が大長老として、自ら難を引き受け、この海運不況の折柄、粉骨砕身努力されて居り、石田、岡田両家も二世よく業を盛にし、父祖の道志をつがれ、業界のために尽粋されて居る事は洵に喜びに堪えない、今後愈々発展を祈りて止まないものである。

過ぎし日の思い出

加藤政次郎

同郷出身の杉田八郎さんのお世話で、御自身の勤めておられる京橋の船具商大村五左衛門商店へ小僧として就職する事に決まったのは大

正七年の春浅き頃であった。その年の四月、私は母に連れられて上京、当時、日立製作所に勤務していた兄の家に泊まり、四、五日の聞、東京市内を見物して歩いた。丁度、上野の山は桜の花盛りで、折しも大正博覧会の開催中でもあったので、その賑やかさは田舎出の私にとってただただ驚きの目を見張るばかりであった。

そして忘れもしない四月二十五日、母と兄に同伴されて、東湊町の店先に立った。その店は想像以上に大きく土蔵造りの倉庫が幾棟も建ち並び、大勢の店員が右往左往して働いていた。やがて、番頭である杉田さんの紹介で、大旦那を初め店の人達へ順々引き廻された。紹介が終ると直ぐにその日から縞の着物に、角帯と前掛を締め、新米の小僧として働くことになった。然し、最初は来客にお茶を入れたり、銀行や近所への使い走りだけであった。段々と慣れてから倉庫へ出され、そこで初めて田舎者の私にとって苦難の道が待っていた。

暑い夏の日も、一転して骨の髄まで凍る冬の日も、朝早くから夜遅くまで重い荷物を乗せた荷車を引き、芝浦や、砂村、果ては千住の方までやらされた。来る日も来る日も実にその仕事の連続であった。当時、私の月給は僅か五十銭で、いかに物価の安い時代であったとはいえ、どうにも遣繰りがつかなかった。床屋が十五銭、はだし足袋が一足三十銭で、あとは五銭しか残らず、歯磨や石鹸などの日用品にさえ、事欠く有様であった。それ故、軍を引いた途々腹がへり伊勢屋の前で大福餅を横目で睨みながら生唾を呑み、急ぎ通り過ぎるのは毎度であった。

だが、それも今では懐しい思い出の一つである。

店から出される三度の食事は、決まって若芽の味噌汁と塩辛い沢庵で、昼と夜は野菜の煮たものが多く、魚は一週間に一度位であった。然し、毎月末に出されるそばだけは制限なく食べられた。此の日だけは、食い気盛りの少年達にとって天国であり、若い衆や小僧達は十五杯も二十杯も食べて全く身動きも出来なくなるものさえいた。それは笑い話の様な事実であった。

勤めの時間は朝の七時から夜は十時迄で、雪の降る夜も火の破片一つない場所で間断なく働かされた小僧達の唯一の楽しみである休日も正月と御盆の薮入りの二日間だけであった。新米の小僧は夜の十時過ぎでも、ほっとする暇なく次の仕事が待っていた。部屋住みの番頭から各専任の洗濯係りを仰せつけられ、汚れた下着類から褌まで洗い、絶対湯を使うことは許されていなかった。だからと言って当時誰一人不平不満を言うものがいなかったのはやはり時代と言うものであろう。現在想い起して一番つらかったと思うのは、寒い冬の朝、それも午前二時頃に起きて北海道や東北地方へ送り出す荷物（ロープ、帆布、ペイント類）を乗せた馬車の上で震えながら秋葉原駅に行き、吹き曝しのホームで順番を待った事と、やがて順番が来て、「かんかん」を立ち会い、広いホームの指定された各駅への置き場所にその荷物を運んだ事である。丁度第一次大戦中なので受け付け時間になると方々から集る荷物で駅構内には荷物の山が出来た。その混雑した中で駅員から容赦なく「大村五左衛門」と呼び出される。然し、馬力に二台、三台の沢山の荷物を小僧一人の痩腕ではさばききれず気ばかりあせった。その上、呼ばれて直ぐに　「かんかん」へ荷物を載せないと

駅員から散々に油を絞ぼられた揚句後廻しにされた漸く荷物の始末が終る頃にはお昼もとうに過ぎてしまい、空腹と疲労でへとへとになった。やっとの事で店に戻ると、時間がかかり過ぎた、途中で油を売っていたのではないかと詰問され、いきなり若い衆からなぐりつけられた。そういう時は飯も食わせて貰えず、更に新橋辺り迄荷車を曳いて使いに出されるのが常であった。余りのつらさ、悲しさに涙が一人で頬をつたわった。併し大番頭と云われる方々は、何れも十二、三才で遠い故郷を後に奉公へ出て辛抱の結果立身出世した人達であるのを考えると私の苦労はまだまだ遠く及ばないものであると肝に命じたものであった。

新米の小僧をなぐる若い衆は、自分等の小僧時代に先輩からなぐられた事を遺恨に思い「何事も順送りだ。その仕返しをお前達にしてやるのだ」と言い、些細な事を取り上げてはなぐる材料にした。若い番頭等は小僧が手ひどく折檻されているのを見ても決して制止しようとはせず、素知らぬ顔をしていた。中にはその折檻を背後からけしかけるものさえいたのである。

さて、店は第一次大戦の好景気の波に乗って素晴らしい業績を挙げ、得意先は主として官庁関係では内務省、逓信省、鉄道省、会社関係で浦賀船渠、鶴見造船所、東京湾埋立会社、富士製紙、樺太工業、王子製紙、南洋貿易等の諸会社を初め、それに京浜地区の船具屋であった。地方では樺太、北海道、東北、信越の沿岸の船具屋及び銅鉄、機械、塗料商など数多くを網羅していた。店の構成は支配人に高橋九六さん、次に水野、服部、杉田、直川、中村、高瀬、松山さん等の十二、三の子飼いから叩き上げられた一騎当千の大番頭の他、角谷、磯貝、肥沼村田さん等の中堅番頭を初め、若い衆、小僧まで数えると相当な人数であった。

私は十九才の年に待望の若い衆になる事が出来た。若い衆は四人で、荷受係と発送係を二人宛で担当した、荷受係の仕事は近江帆布、横浜製綱、日本ペイント会社、其の他仕入先から這入ってくる大量の荷物を受け、記帳し、直ちに発送する物と在庫する物とに区別した。更に在庫するものは品種別に二階、三階迄担ぎ上げ整備せねばならなかった。然し日々入荷する荷物は余りにも多量であり、私の前任者はこれを処理しきれず、荷物の上に荷物を積み上げ、倉庫内は、いつも乱雑で足の踏み場もない程であった。荷受係の職についた私は先ず此の改善に全力をあげてみた。その日に入った荷物は必ず、その日のうちに整然と、一定の場所へ積み上げ、暇をみては倉庫内を掃き清めた。その結果、四棟の倉庫は二階や三階の隅々まで以前とは見違える様に整頓され、商品も汚損することなく完全に保管される様になった。その上番頭からの在庫数の質問にもその場で直ちに、正確に答えることが出来た。この私の努力が認められて、翌年一月十五日の恒例の新年会の席上で、大旦那から直接お褒めの言葉を賜り、先輩を凌いで高額の賞与（額面金四拾円を記入された預り証書。これは十三年間無事勤め終えた時に初めて現金と引換えられる）を戴き面目を施すと共に益々努力する事を心に誓ったのであった。

猶、この証書はその後大分溜ったが、後年店が破綻に瀕した際、他の店員と語らい全部纏めて主人に返納した。

二十才の折、二、三の同僚を追い越して番頭見習に引き立てられ、事務所で事務をとる事になった。この時、一年前に同じ郷里から出て来ていた先輩は、私の昇進を心良しとせず、国許からわざわざ父親を呼び、支配人に交渉した。然し聞き入れられなかったので、遂に店を辞められた事は、私としては今だに後味の悪い思い出として残っている。

翌年、徴兵検査を終えて間もない九月一日、古今未曽有の関東大震災が発生した。その際、若旦那の金一郎さんは築地本願寺で行われた親戚の法事の帰途、明石町の聖路加病院の高い煉瓦堺が崩れ、お抱え車夫と共に。一瞬にして敢えない最後を遂げられた。

此の悲惨な出来事に新婚間もない若奥様と、大旦那御夫妻は、その悲しみに身をふるわせ、折から襲い来る余震も意に介せず、遺骸に取り縋って泣き崩れていた様子は私の脳裡から生涯放れる事がないだろう。店にいた若い衆はそれぞれ手分けをして大番頭の住居へ急援に駆けつけた。北新堀の高橋支配人のお宅では、生憎北陸方面へ出張中で、残された奥さんは、子供を抱えられて途方に暮れていた。

私は地震の恐しさも忘れ夢中になって崩れかかった土蔵の中へ飛び込み貴重な品々を持ち出し荷車へ積み、宮城前広場へと逃げ延びた。此の場所で大村家の人達と一緒になり、夜空を焦がす炎々たる業火に戦のきふるえながら一夜を明かした。其の後は大村家の御家族と店の者一同は商店が復興する迄、大崎に仮住居をしていた。或る日、番頭の杉田さんが此の仮住居に来られて、一日も早く焼跡を整理し、再建復興すべき事を進言された然し何故か焼跡整理は勿論、商店の再建方針は一向に進む様子は見られなかった。兎角するうち杉田さんは辞任され、現在の深川永代一丁目で独立営業を始められた。

お世話して下さった杉田さんがお店を辞められたので私も意を決し、十一月の初め、うすら寒い夜、暗闇に紛れてこの大崎の仮住居から脱げ出し、一度国元へ帰ることにした。芝山内を夢中で走り抜け、故郷へと足を向けた。ところが朝鮮人の襲来があるからと言って、市内の焼跡には至る処で自警団が屯して、要所々々を警戒していた。私はこうした幾つかの関所でいちいち誰何され、或る時などは暗闇の中で朝鮮人と間違えられ危く鉄棒で殴られる所であった。かろうじて、郷里へたどりつくと、両親初め兄弟達が私の安否を気遣っていたので、生きて帰った私を見るや皆は涙を流して喜んで呉れた。

暫くして、高橋九六さんも同郷の店員を率いて北新堀で独立の旗上げをされたので、若旦那の急逝に途方にくれ、呆然とした大旦那も漸く気を取り直し、重い腰をあげられた。慶長以来三百有余年も続いてきた店の再興のため、焼跡にバラックを建て、水野、直川さんが主体となり、高瀬、角谷さんなども力を合せ、引き続き営業が再開されることになった。郷里の実家で蟄居していた私のところにも、至急店へ帰るよう通知があった。そこで私は正月も待たずその年の十一月二十八日、再び住み慣れた旧主の下に帰参し、再起復興に微力を尽す事になった。

だが、一切を灰にした大村五左衛門商店の其の後の経営は、経済界の深刻な不況を反映してか業績は挙らず、不振の一途を辿っていった。

再建後の店では私は外務係に任ぜられ、東武鉄道、日立製作所、汽車製造会社、東京モスリン、東洋モスリン等を受けもたされ、後、大倉土木、清水組、大林組、鹿島組などの土建関係をも新得意として開拓に専心努力した。

その内、水野貞吉さんは、大村家の跡を継いだ次男の養之助さんと意見が合わず、自ら身を引いて箱崎町で独立開業することになった。その後を引き受けて支配人の地位についた直川辰次郎さんはその性豪放磊落で飽く迄積極型の人であった。然し景気はますます悪化し、一方不安定な漁場方面と三陸方面の特定な船具屋にのみ力を注いでしまった結果、店の経営は全く苦しくなった。そして遂に直川さんも店に居たたまれず日ならずして退職し店の直ぐ目と鼻の先にある八丁堀へ店を開いた。

当時、世上には枯すすきの歌が流行し厭世的な風潮にあって、業界の不況は更に深刻化し、大村五左衛門商店は今やどん底に落ち、万事休するの止むなきに至った。時を移さず一部の債権者が差押えを始める浮き目になった。

幸いにして捨てる神あれば拾う神もありの類で、東京製綱赤松社長が調停に入られ、事態は急速に好転した。昭和四年十二月、新たに株式会社大村商店が創立され、東京製綱、近江帆布、日本ペイント三社の推薦による横山寿雄さんが代表取締役として赴任され、自ら第一線に立ち運営の指揮に当られた。横山さんは嘗つて神戸の貿易商湯浅商店の営業部長として辣腕を振われた方で、その人格飽く迄高潔、頭脳明晰にして、手腕力量人に秀で、而も部下に接するにはさながら慈父の如き方であった。五十七年の私の生涯を通じてこれ程立派な人物に逢った事がないと言っても過言ではない。その横山さんは就任するや、得意先の内長い間売掛金が溜り、腐れ縁となっていた沿岸の漁場や、地方の船具業者の取引を少しの未練も残さずきっぱりと其の日から断ち切って、官庁初め国策的第一線の有力な会社を目標に全店の総力を結集してこれに当った。

会社の内容は創立直後なので運営資金にも痛く事を欠いていたにも係らず、不況で永い聞ストップしていた社員の給料を大巾に引き上げ、而も年四回も賞与を支給して社員一同を感激させた。だが横山氏の社員に対する命令指導は年功や新旧の差別なく真に厳しいものがあった。

当時営業部に籍を置き外交に当っていた者は二十名程であった。横山さんはその一人一人に別誂えの立派な業務日誌を渡し、一日の売上げ、支払期日、利益等を詳細に記入させ、他の各欄には見積、内容、訪問先及び重要交渉、契約事項を書き入れさせた。そして御自身は毎朝定刻の八時に寸分違わず出社されて、此の日誌にくまなく目を通され、御自身の統計表に記入されるのであった。半年毎に此の業務成績を参考に其の他の行動を緻密に勘案され、又、飽く迄情実を排し公正に裁定して賞与も惜しみなく支給された。私にとっては忘れることの出来ぬ昭和十二年の暮、貴方は格別成績が良いからと言って部厚の封筒を私に手渡された。

家に帰って中身を開けると何と驚くまい事か、普通賞与千三百円の他に特別賞与として手の切れそうな百円札が五十枚も入っていたのには

全く肝を潰してしまった。昭和十二年頃には二千円もあれば立派な家が建てられた頃なので、私は此の人の為なら命の続く限り働かなければならないと改めて心に誓い、更に仕事に精魂を打ち込んだのは言うまでもなかった。

横山さんは青少年社員の指導育成にも特に心を致し、修養機関として社内に向上会を設置し、研究部、編集部、図書部、弁論部等の各部会を設けた。部会其の他の会合には万障差し繰って出席され熱心に後進者の指導育成に当られた。現在第一線にあって活躍中の山中、赤池、三縄、大内、石田、森、杉村、吉原、佐藤等の諸氏も嘗ては其の教化薫陶を受けた会員達である。

昭和七年に満州事変の勃発から、更に支那事変へと国際情勢の急変に伴い経済情勢も大きく発展し、大村商店の営業方針も良く時流に即応した為か、逐年輝かしい業績を収め、飛躍的成長を遂げ、社員の数も遂に八〇名を超えるに至った。

私は自分の担当していた日立製作所が当時深川、亀戸、助川の三工場のみであったのを、同社の大庭調度部長を説いて、戸畑、若松、安来、笠戸其他全国の工場を含めて、ワイヤロープを同一単価で統一購入させることに成功した。続いて大倉土木、鹿島組、銭高組、東京湾埋立会社等の一流土木会社との間にも、ワイヤロープを期間六ケ月、数量約五百巻を単位として東京製綱会社の原常務並びに角田豊三郎（現日本綱索社長）さん等の援助を得て次ぎ次ぎに契約し、其他昭和電工、三菱鉱業等にも夫々大量の受注も得た。一方、先輩角谷氏を初め、同僚の社員も横山さんの周到な指導の下に大きな成果を挙げ会社の業績は愈々向上し、日浅くして旧債も全部皆済し、高率の配当は商店解散の日迄続けられた。

然し此の偉大なる横山常務も、かりそめの病がもとで、昭和十四年三月家族や多数の社員に見守られながら、花の散る如く五十四才を一期に此の世を去られた事は借しみても余りある事であった。

其の後任として東京製綱の三上俊夫さんが就任され、私が営業に、経理担当常務には榎本勝吉氏が店員を代表して選任され、相協力して運営に当り、社運は益々順調に伸展した。

昭和十五年、私は南方市場への進出を企図し、同年五月十九日遠く南洋群島パラオ島へ出張した。其処で南洋庁の近藤長官、堂本内務部長等の方々に面接、出張所開設を具申した処直ちに快諾を得ることが出来た。依って当時パラオ商組に居た書記長の吉田氏を起用し、コロール島の枢要地に開業し、私の計画通り極めて順調に発展推移した。ところが、その翌年十二月八日、第二次世界大戦が勃発し、やがて同島も戦火の巷となり、開店一年有半で閉鎖した事は今もって洵に残念である。

時局は日を追うて重大化し、物資の統制や、公定価格の取締りも厳しくなり、商売も日一日とやり憎くなった。そこで自由営業は一切廃止し、既に実行中の各産業団体より受託せる物資配給代行の業務遂行に総力を挙げて専念した。その代行先は、南洋庁、樺太庁を初め金属鉱業統制会、石炭礦業、油脂工業、化学工業、セメント工業等、その他十指に上った。

そして公定価格の内より三分乃至四分を荷扱手数料として契約

し、各産業団体へ割当てられた重要資材（綿帆布、ワイヤロープ、布ホース、ペイント類）を発注から荷受け配給迄一切の過程を処理した。これがため物価統制令発令以来、大村商店としては一回の価額違反も引き起さず終始安泰に運営を続けることが出来た。

戦局が益々苛烈になるにつれて此の配給代行事業も相次ぐ米軍の本土空襲により漸く至難となり、亦社員の多くは召集され、残る者は殆んど女子と老人達となり、営業継続も今や暗礁乗り上げの一歩手前となった。

昭和十九年一月、緊急役員会が開催され、三上代表取締役以下、故赤松範一（前東京製綱株式会社社長）鈴鹿良蔵（元近江帆布株式会社取締役、現敷島帆布株式会社社長）田辺武次（親戚代表、現紙パルプ連合会会長）田坂吉二郎（元日本ペイント株式会社常務取締役）の諸氏並びに榎本取締役と共に営業継続か否かの問題について討議した。そして爾来幾度か話合った結果、大村家並びに親戚側の希望と、従業員一同の将来を考慮し、遂に大村商店を解散することに決定した。茲に創業以来、徳川幕府の崩壊、或は明治維新後の幾多の苦難を乗り切って三百数十年の輝かしい伝統を守り続けて来た老舗も遂に終焉の幕を降す事になった。

大正七年、入店以来此の店と共に過して来た私は、変転極りない世の流れを静観して、洵に感慨無量のものがある。

其の後、母国の敗北、原子力から宇宙時代へと大きく飛躍し、果ては月の世界とも交渉が持たれる世の中に変貌した。然し、私としては十六才で上京し、夢に描いた数々の希望を今以って何一つ達することが出来ず、空しく年を重ねてしまった。既に日暮れて道遠しの感を深くし、一沫の淋しさを抱かずにはいられない。だが今日迄他人に少しも迷惑を懸けず、只一筋に正しく生きてこられたという事こそ、私に与えられた何よりの報いと心に感謝し、日々の仕事にいそしんでる次第である。

船具商の今昔

篠田隆太郎

江戸時代に船道具を商った店は、日本橋小網町一丁目に一軒、南茅場町に二軒、南新堀一丁目に二軒、南新堀二丁目に二軒、霊岸島銀町四丁目に一軒総計八軒あったが、何れも現在の中央区内に集中されて居た。（江戸十組問屋便覧による）。

我々の子供の時代には京橋霊岸島、八丁堀、鉄砲洲等の大川筋（隅田川）深川永代橋際、日本橋箱崎町、浜町中洲、本所扇橋附近に多く散在、房州、伊豆、相模、紀州、土佐方面の帆船、利根川流域、上総、下総方面の高頼舟、河艀等を専ら得意先として営業を営んでいた。

大正十二年大震災直後、救援物資を積んだ汽船がはいる様になってから急に芝浦にも本船専門の洋式船具商が生れ、爾来東京港の発展と共に順次其の軒数を増していった。したがって本船を専門とする船具商は大体芝浦に集り、築地魚河岸、佃ノ渡し附近には主として漁船、鮮魚運搬船と房州、相州通いの帆船機帆船が碇泊していた。又京浜間運航の艀船

は主に永代橋上、下の両岸及び新堀、箱崎、八丁堀等の河岸に繋船されていたので勢い越前堀霊岸島附近に最も多く船具商が集中されていた。

大東亜戦争を契機として東京港への船舶の出入は日増に増大していった。勝関橋上流には以前の様な各地からの機帆船は全く其の姿を消し、今では全部御浜御殿沖、魚市場岸壁、豊州、晴海寄等で荷役が行われ、僅かに霊岸島、八丁堀、新堀附近に京浜間通いの艀、機帆船が碇泊するのみとなった。終戦直後芝浦岸壁、日の出桟橋、竹芝桟橋は全部米軍に接収せられていたが其の後順次接収解除となり、今では僅かに一部を残すだけとなったのである。今や東京港は年間数千万噸の貨物の積卸しが行われる様になり、尚今後の拡張計画の進展につれ更に船具商の数も是に併行してふえてゆくものと想像されるのである。

大正十二年以後に於ける東京船具商の所在を調べて見ると、

芝浦方面（順序不同、敬称略）

高浦船具店	高浦　高太郎
芝浦船具店	塚本　常五郎
垂見船具支店	横井　新太郎
日吉屋商店	馬場　七郎

鉄砲洲方面

合資会社鈴木船具店	成瀬　勝蔵
太田屋船具店	鈴木　佐一郎
前原徳蔵商店	前原　徳蔵
手塚商店	手塚　伸一
羽成製帆所	羽成　福太郎
岡田仙太郎商店	岡田　仙太郎
玉上商店	玉上　清吉
石川製帆所	石川　惣太郎
椎野貞吉商店	椎野　貞吉

八丁堀方面

綱庄石田商店	石田　由松
本多商店船具部	本多　敏明
株式会社本多商店	本多　敏明
合資会社篠田船具店	篠田　隆太郎

霊岸島方面

株式会社大村商店	大村　五左衛門
福田清八商店	福田　清八
串田商店	串田　清三郎
北山船具店	倉田　万治郎
天野商店	大谷　由松
本間商店	本間　淳助
株式会社綱金商店	鎌倉　常松
原善商店	原　善造
日本製綱株式会社	谷村　勇
斎藤船具店	斎藤　清三
（株）高橋九六商店	高橋　九六

箱崎方面

（資）石塚商店	石塚　孫兵衛

十一屋田中商店　田中　益次郎
高田商店　高田　留吉
竹内商店　竹内　作太郎
深川方面
杉田商店　杉田　八郎
山本商店　山本　久楠
伊藤商店　伊藤　清太郎
本所小名木川筋
古沢商店　古沢　卯之助
竹内商店　竹内　粂吉

業界の助成機関としては明治二十年十二月、京橋霊岸島三丁目に東京船具問屋組合が創立されている。其の後大正五年九月同業組合準則に依る組合として京橋区南八丁堀三ノ六に東京船具問屋組合が設立され、業界の指導育成並びに組合員相互の親睦を計られた。

此の外関連業種の組合としては明治二十九年四月京橋霊岸島三に東京棕梠皮縄問屋組合、続いて大正五年九月、日本橋小舟町一ノ三に東京麻苧問屋組合、日本橋小網町三ノ二七に東京棕梠縄問屋組合がそれぞれ設立されたのである。

大正初年に東京船具業者の間に親睦機関として東京船具同盟会が出来、我々の先輩串田清三郎氏が初代会長となり石田由松、岡田仙太郎の両氏が副会長に就任して毎月一回一定日に会員が会合し、又各店より手持商品を持ち寄って競買に掛け業者間の交流を計られたのである。

当時の会員名は左の通り。

石田由松、石塚孫兵衛、飯島貞吉、原善造、本間淳助、本多敏明、岡田仙太郎、玉上清吉、谷村勇、鎌倉常松、成瀬勝蔵、串田清三郎、倉田万治郎、前原徳蔵、斎藤清三、篠田定三、鈴木佐一郎

超えて昭和十三年十月商業組合法第一条に基き東京船具商業組合が設立せられ、谷村勇氏が初代理事長に就任し業界の向上発展に鋭意努力されたのである。

尚当時の設立発起人並に役員、組合員の氏名は左記の通りであった。

東京船具商業組合設立発起人氏名住所

石田　由松　京橋区八丁堀四ノ十一
岡田　仙太郎　京橋橋湊町一ノ九
玉上　清吉　京橋区湊町一ノ一三
前原　正幸　京橋区湊町三ノ七
（資）鈴木船具店成瀬勝蔵　京橋区湊町三ノ二三
谷村　勇　京橋区越前堀一ノ一〇
本間　淳助　京橋区越前堀一ノ四
倉田　万治郎　京橋区越前堀一ノ四
（資）山元商店山本光雄　京橋区越前堀一ノ三
（株）大村商店横山寿雄　京橋区霊岸島一ノ六
鈴木　佐一郎　京橋区湊町三ノ二三
手塚　伸一　京橋区湊町三ノ一九
（株）本多商店本多敏明　京橋区八丁堀四ノ九
（資）篠田船具店　篠田隆太郎　京橋区八丁四ノ一
石川　惣太郎　京橋区湊町一ノ六

斎藤　清三　　京橋区新川二ノ六
（資）石塚商店　石塚孫兵衛　　日本橋区箱崎町二ノ一
鈴木　春蔵　　日本橋区箱崎町一ノ二

同組合員氏名

石田由松、伊藤清太郎、石塚孫兵衛、石川惣太郎、稲山茂、羽成福太郎、本多敏明、塚本常五郎、成瀬勝蔵、倉田万治郎、山本光雄、前原正幸、手塚伸一、斎藤清三、本間淳助、岡田仙太郎、横山寿雄、横井新太郎、高橋九六、田中真一、高浦高太郎、玉上清吉、小川治兵衛、篠田隆太郎、鈴木佐一郎、鈴木春蔵、岩田英雄、福田清八、大久保甚太郎、杉田八郎、的場丹蔵、杉山光男、古沢卯之助、高田留吉、永田繁一、稲垣勝蔵、谷村勇、角谷佐蔵、馬場七郎、小河栄市、太田由次郎、日本漁網船具（株）藤井松之助、畑尾熊蔵、山本徳治、橘米吉、岡野保太郎

両役員氏名

理事長　谷村　勇　昭和十三年十月二十二日就任
常任理事　前原　正幸　昭和十三年十月二十二日就任
監　事　塚本　常五郎　昭和十三年十月二十二日就任
監　事　倉田　万治郎　昭和十三年十月二十二日就任
常任理事　山本　光雄　昭和十四年三月二十二日就任
理事長　石田　由松　昭和十七年五月十六日就任
理　事　岡田　仙太郎　昭和十七年五月十六日就任

昭和十六年大東亜戦争勃発と共に聖戦完遂の国策に副い、国内全業者は企業合同か或は廃業かを余儀なくされたのであったが、東京船具業界も運輸省海運総局の指導の下に昭和十七年十月全国に率先して企業合同を実行した。其の後主要港に於ける船具業者も続々企業合同を確立したが戦局の進展と共に配給会社に改組され、東京地区には東京船用品配給株式会社が創立された。創立当初の役員は左の通りである。

東京船用品配給株式会社役員氏名

取締役社長　成瀬　勝蔵　昭和十六年十月就任
専務取締役　塚本　常五郎　〃
専務取締役　山本　光雄　〃
取　締　役　岡田　仙太郎　〃
取　締　役　谷村　勇　〃
監　査　役　田中　真一　〃
監　査　役　加藤　政次郎　〃

一方中央に於ては船具商業組合連合会が飛躍して日本船用品統制株式会社となり業界を挙げて戦時統制に即応した。

こうして我々業者は従来の営業実績に応じて株式の割当を受け、各地区船用品配給株式会社並に統制会社の株式を所有して役員又は職員となり統制配給の業務に従事したのである。

終戦後企業整備令の廃止に伴い各地区の配給会社も一様に解散、又は改組して戦前の自由営業へと還元した。

戦後十数年の間に本船専門の船具商は次第に其の数を増し今では、拾数軒を数える様になった。

戦時中一時空白であった組合機関も昭和二十三年四月二十五日、故田中真一氏外有志奔走で東京船具協会が設立され、初代理事長に田中真一

氏、専務理事に加藤政次郎氏がそれぞれ就任し、混頓たる戦後の渦中にあって専心業界の整備向上に尽力せられた。

昭和二十七年七月、田中真一氏が逝去のあと加藤政次郎氏が後任理事長に選出され、引続き業界の指導並びに従業員の育成に当られている。尚昭和三十一年四月七日開催の総会の決議に依り東京船具同業組合と名称を改称した。

船具商の取扱商品に付いても昔は帆船の道具類が多く、和船具商、洋船具商とに依ってその扱う品も自から違っていた。

霊岸島、八丁堀、箱崎方面の船具商は主として和船具、棕梠綱、土木用品等を販売し、芝浦、築地方面は洋船具類の船用品を取扱って居た。

昔は船の雨覆は総て草の葉で出来た舟苫に限られていたが其の後帆布製のシート、艀カバーが世に出る様になってからは昔の舟苫は全く陰をひそめてしまった。

船具商の取扱の商品の種類も又年々の数を増し、船具以外に事務用品、賄用品、医薬品、計量器、機械、工具、電気器具、電球等あらゆる商品を扱い、其の種類は数千種にも及ぶのである。

尚時代の発展に依って船具商の運搬要具も次第に進化し、手漕の船から発動機付艀となり、大八車はオート三輪トラックに転し従業員の服装も昔の前掛厚司姿から作業衣、ラッパズボン、はてはマンボスタイルに迄変って来た。

代金決済も現金取扱が掛取引となり、月末現金払は手形払となって更に取引後一定期日据置、現金払、又は手形払等と支払条件も次第に長期化して、資金が固定される様になった。従って昔の様に売上代金を回収してから仕入代金を支払うと言う様な簡易な決済は全く出来なくなり、したがって自己資本のみにては到底金融操作は不可能となってきたのである。以上の如く船具業者の経営もあらゆる面に於て、繁鎖至難が加えられて来たが根幹産業たる、海運の消長が直ちに国家盛衰に及ぶべき事を深く心に銘記すると共に、自己の職責の重大性を充分自覚して誠実に優良品を正確且つ迅速に納入する様心掛けねばならない。これが船具商に与へられた尊い使命なのである。

想い起すまゝ

斉藤清三

私は明治二十六年埼玉県栗橋と言う極く片田舎の農家の二男坊として生れた。其の頃の農家と言えば一口に言う水呑百姓で働いても働いても生活は苦しかった。

二男、三男は早くから家を出て他家へ年期奉公に行くのが古くから土地の慣わしであった。私も小学校を出ると十三才で直ぐに奉公に出された。

祖母と一緒に栗橋駅から汽車に始めて乗って上野駅へ着いたが自分はこれまで村から外に一歩も出た事が無いので、先づ東京の人の多いのに驚いたのだった。

其の頃の交通機関と言えば浅草、上野から出て銀座、新橋方面へ行く鉄道馬車と隅田川を往航する一銭蒸汽と、それに人力車以外他に乗り物は無かったのである。上野駅を下りて本所小梅の知人の宅を訪問し、そ

れから吾妻橋から永代橋行の一銭蒸汽に乗ったがその頃（明治三十八年）既に一銭の船賃は二銭と値上っていた。私の行く奉公先は伯父の知人で、東湊町河岸、今の高橋際で船道具を広く販売していた北山船具店と言う店であった。

主人の北山喜一郎さんは元此の道の老舗である大村五左衛門商店に、長いこと勤続した至って物堅い人で、真面目に年期を勤め上げ御主人から立派に「ノレン」を分けて貰い開業されたのであった。其の頃東京の船具屋は大小合せて三十軒位いあったと思う。中でも霊岸島の大村五左衛門、松屋町の鈴木彌兵衛、それに鉄砲洲の宇田川清兵衛、此の三店が東京の代表的な船具屋であった。時代の変遷とは言いながら此の三店共業界から姿を没したのは洵に淋しい限りである。当初は田舎者故、東京の地理が不案内なので約一ヶ年余りは店の雑用にこぎ使われた。当時まだ電灯がつかなかった時代なので、小僧は朝起きるとランプの掃除から魚屋、八百屋等の使い走りが一日の日課となっていた。

私が入店した頃は、機械船と言う物はまだ無かった時代で店の得意船と言えば其の頃西洋型帆前船と呼んでいた。遠州掛塚港から木場へ材木を運ぶ船と四国の土佐より石灰を積んで来る土佐船で、船体を一様に赤青に塗っていたので、一名西瓜船とも呼んでいた。エンジンを使わず総て帆を操って居た時代なので帆布や、マニラロープは相当多く使用され、三十有余の船具屋は何れも相当繁昌したのである。店では遠州土佐船の外、三陸方面の漁場にも相当出荷していたので毎日の様に秋葉原駅や、上野駅或は当時の汐留駅などへ荷車を挽いて通い続けたのであった。時折り御台場の緒明造船所えも配達に行ったが、何分にも重い荷車を挽いて行くので朝早く出ても帰りはたいてい夕方になった。当時小僧は無給で薮入りの時貰う僅かの小使い以外は全然収入がなかったので腹が減っても何一つ買う事さえ出来なかった。当時は大福餅が十銭で六個、焼芋は一銭出せば四切れも来た。其の焼芋が今では一切十円もするが当時二銭も買えば満腹出来たのだから驚くの外はない。

若い頃は一年の内僅か二日の薮入りの外は年中無休で朝早くから夜遅く迄働き通しに働いて来たが其のせいか体も至って頑健で、此の年になっても未だ病気らしい病気をしないのは矢張り若い頃鍛えた御蔭だと思う。十九才になった年主人から木綿の羽織を頂戴し、始めて番頭格に出世して月給も一円宛つ支給される様になった。

二十一才の徴兵検査では砲兵第一乙種となり、幸か不幸か兵隊にも行かずに済んだ。大正七年二十七才の折、主人御夫妻の媒酌で現在の妻を迎えたが其際御主人より絹の羽織と袴一揃えに金四百円也を貰ったが、其の頃の四百円と言えば今の金に換算すると約弐拾万円位に相当するだろう。其の後一男五女をもうけ更に孫四人を持つ身となり、既に六十七才の齢いを重ね、一家円満にどうやら無事に暮して居られるのも全く亡き御主人の御蔭に外ならないのである。昭和四年北山船具店が廃業される事になったので同店の一切を多年共に勤続して来た故倉田万治郎氏と二人に主人より贈与された。其の後しばらく共同経営していたが昭和七年合議の末、私は分れて現在の所へ独立開業する事にした。昭和十七年大東亜戦争が勃発の際都内船具業者は何れも商店を閉鎖して企業合同に参加されたが当時私は一部陸上との取引関係があったので全面的に転向せず其のまま営業を継続した。昭和二十年三月の空襲で一切を

全焼し、同年五月疎開先の笹塚でも戦災に遇い、かさねがさねの不幸に一時は全く途方に暮れたが其の後気を取り直し現在の場所へ再建開業したのである。

昭和二十三年四月、東京船具組合が再建発足するや選ばれて理事に就任し、超えて二十三年十一月東京船用品株式会社の監査役に選任せられた。

以上が上京以来私が歩いて来た其のあらましなのである。

尚昔の船具屋には中々面白い逸話が残されて居るが、是は私が主人から直接聞いた話しだが「やつかい丸」の廻船出世物語りを御伝えしよう。

頃は旧幕時代で何代将軍かは一寸聞き漏らしたが、徳川家で何千石かの大船を佃島で建造する事になった。其の頃は総て木造船であり、又船の屯数は米の積高によって石数で計算されたのである。飛ぶ鳥を落す勢いの徳川将軍家からの御達しで日本全国から腕ききの船大工が多数集められ、夜を日に次いで工事を急いだ結果、其後一年足らずで新造船は立派に竣工した。既に当時大村五左衛門は霊岸島で船具商を経営して居り一方徳川家の御用商人でもあったので船具一式は同店から上納され茲に装備も完了し造船所から徳川幕府へ引渡されたのである。其の大船を佃島から品川沖へ廻船することになった。ところが隅田川の川底が余りにも浅いので廻航する事が出来ず、諸大名に命じあらゆる手を尽くしたが結局是れと言って良い知恵も出ず徳川幕府も是にはほとほと手を焼いたのだった。

折角出来た大船を沖へ出す事が出事ず、川の中で立ち往生して居るので遂にはやつかい物扱いされ、江戸市民の間で是を「やつかい丸」と言いはやす様になった。

其の話が誰れ言うとなく時の将軍家の耳に入り将軍は徳川家の威信を傷つけるものとして烈火の如く立腹されたのであった。

後御船奉行の進言で船道具屋の大村五左衛門に此の廻船方を御用命になった。

幕府の厳命故断わる事も出来ず大村五左衛門は一応引受けはしたものの併し是と言う良い名案も浮かばず気ばかりあせった。然し五左衛門と言う人は性来一を聞いて十を知ると言う様な実に頭の良い人であったので道を歩いてもただでは歩るか無い。たまたま新川筋を通ると酒倉の脇に四斗樽の空きが山に積まれてあるのに気づいた。此の空樽を利用して船体を浮き掲げさせる事を考え、早速数百の空樽を買い集めて本船の両側へいだかせ船足を軽くし、遂に其の大船を無事品川沖へ廻船する事に成功した。大村五左衛門は此の功によって徳川将軍より苗字帯刀を許されたのである。

其の頃は士農工商と言って商人はどこへ出ても最下位に置かれてみじめなものであった。町人の大村五左衛門が此の「やつかい丸」乗り出しで一躍して侍と同等の資格を得た事は当時江戸市中の評判となり、徳川幕府の信用も倍加し、家業は益々栄え、昭和の御代まで引続き繁昌されたのである。

東京港の工事着手前は、此の隅田川から河口の芝浦沖で潮干狩が出来たのであるが、時代の変遷と共に今では数千屯級の汽船が数十隻も一度に入港する事さえ出来る様になった。又月島晴海埠頭には既に一万噸級の船が数隻も横付けが出来、尚品川埠頭も遠からず完成の予定であり、

五十年前の上京当時と思い較らべると総てが夢の様にしか思われてならない。

（東京船具同業組合理事・前東京船用品株式会社監査役）

大正初期からの私の経歴と思い出

稲垣勝蔵

当時、横浜真砂町に「マニラ麻」の販売商社であった山手一八四番の岩井商店（現在岩井産業）の販売代理店をしていた、谷村氏経営の会社に入社したが、横浜らしい看板も英字で「ヘンプマーチャント」と書いてあった。赤玉マニラ麻一俵が八〇円から二〇〇円に暴騰した欧州大戦後の最高調を示した時代で、鈴弁バット事件も此の頃の出来事であり、神戸の鈴木商店の外貨の手持ちは四〇億円と言われ田中内閣で問題となり、台湾銀行に命じて金融引締をやられ遂に破綻の憂目に遇い、政治の犠牲になった事は有名な話である。米一升四十五銭の買占めをした鈴木商店の焼打事件も又大正七年頃の話であるが、馬車道から金の橋、伊勢崎町通りも丁度古代の絵巻物を見る様であり、横浜全市が実に日本ばなれした良い街であった。

山手から海岸通りの印象的な風景は今尚子供心の記憶にはっきりと浮かんで来るのである。

当時英語専修学校へ入学したが月謝は僅か六〇銭であった。伊勢崎町にあるオデオン座、有楽館も当時としては魅力の一つであって、此の有楽館に「イントレランス」と言う活動写真がかかつて、入場料は三〇銭であったが此の活動写真を見たさに古本を何冊も売り払った事もあり、当時の若い人達の青春の血をわかせたものである。

横浜は外国船が入港すると、外人や帰国者、船員等で町は賑わい、一方南京町も何となく異国情緒を漂わして居た。内外航路船の頻繁な出入で市内の各船具店は何れ劣らぬ繁昌をして居たのである。海岸通りに中村船具店、中村製帆所、鈴木船具店、大江橋に金子船具店、真砂町に竹元船具店に甘粕商店、日本製綱横浜出張所、桜木町に森船具店等があり、神奈川には垂見、小谷土橋等の船具店が活発に運営されて居た。

尚現在の桜木町駅が建設されたのも此の時代の事である。

其の頃、岩井商店山田義夫氏と谷村氏に依って日本製綱株式会社が設立され、永代通りの高垣商店を買収して東京本社とし、工場を千葉県旭町に居き、東海製綱、鵜沢、加納、帝国製綱等の工場に外註し、社業の発展に全社員が東奔西走したものである。私も此の時谷村氏と共に上京、日本製綱会社へ入社し、一方慶応義塾の夜学へも通学して茲に私の第二の人生スタートが始まったのである。

当時としては、資本金一五〇万円の会社と言えば相当なものであり、社員も四〇人以上を数えたのである。社長の山田氏は日本郵船の近藤社長とも親戚の関係であったので営業政策上郵船会社も重要な目標であったと思うのである。当時の社員としては、曽って東京船用品社長であった塚本氏や、塩釜三亥商店社長の鈴木孝一氏、関西ペイント浅妻氏、保険業界で其の名を売った福井積五郎氏等があった。山田社長と共に谷村氏は遺憾なくその手腕を発揮して、良く此の荒武者を使いこなしたの

であるが、社員一同もまた先輩社員にならって真剣に努力したので逐年業績も隆盛に向ったのである。大正十二年の大震災によって佐賀町の角川倉庫其の他で会社も多額の損害を受けたので、震災を契機として谷村氏が会社の一切を継承し、越前堀の綱金の跡に移転して茲に日本製綱会社が再建された。自分も引続いて奉職し、かくして当時の船具商の一員として仲間入りをしたのである。

其の頃は自動車や、オートバイのない時代であるから馬力以外は一切大八車で輸送したものであるが、冬ともなれば一週に一、二回降る雪や雨で道路はぬかるみとなり、配達に当る小僧、若い衆の辛苦は想像以上であったが、一面良き人生勉強でもあった。

旭町工場へマゲロープ製造の見習としてから始めて此の工場で製綱技術を習得した。マゲー麻を腰に巻き横車に麻の「ハシ」を掛けて後すざりして「ヤーン」とし、此の「ヤーン」を二本、三本合はせて「ストラン」を作り木製の合せで横車を人の力で廻したものにかけてすっとぶのである。之で二分、二分半、三分位迄が出来るのであるが、三〇ヒロが力の最高であった。此の三〇ヒロを四本巻いたものを一丸とされたが、現在の二〇〇米前のロープの長さは細物太物に拘らず総て一二〇尋を一丸の定尺とされて居たのである。

今考えると麻を腰に巻いて後ずさりする当時のロープ工場に働く人々の姿こそ実に　「グロテスク」そのものであった。衣食住に専かかない当時の生活様式は万事緩没で今考えても全く楽天地であった。

東京船具商も数多く、何と言っても中心は湾内汽船の発着所をひかえた霊岸島、越前堀、湊町に集中されて居た。先ず越前堀には大谷、北山、本間船具店、綱金製綱、原善ランプ店、霊岸島に大村、松千商店、福田、串田、高木船具店及び稲垣英一郎商店があり其の後山元、飯田、宮城船具店が生れ、高橋を渡って石田、篠田船具店、石川製帆所、飯島、徳田、鈴木、手塚船具店、羽成製帆所、宇田川、岡田、玉上、鈴木屋船具店、箱崎町には石塚、鈴春、田中船具店（田中産業）、永代には山本、岡野、杉田船具店が軒を並べて居た。震災後の芝浦にはその草分とも言うべき塚本船具店が出来、其の後垂見、高浦各船具店が東京港に相次いで出現したのである。

海運界の隆昌と共に霊岸島、芝浦も朝に夕に各種の船舶で大いに賑い、船具商も年々其の数を増し今日に至ったが各店とも今考へてみて、元気と若さで満ち塗れ真剣に努力をされた。当時外交を必要としない各商店の店先では、終日来客の接待で冬は火鉢をかかえ、手首は火ダコで赤くなって居た御主公も多く見受けられたのである。現在考えていかに当時の商売が呑気で受見であったかが想像されますが一面業者相互の親交も実に「うるわしい」ものがあった。特に苦しい中にもよりよき商売の修練場であり、努力するものには必らずあたえられたのであった。

昭和三年日本製綱会社を円満に退社して、帆布業界でも一流加工業と言われた、橘合資会社へ入社し、以来石田商店にもよく出入りしたが、当主の石田由松氏は何くれとなく親身になって御指導賜り、将来の事について色々と御配慮して下さった事は生涯忘れる事の出来ない御高恩と今箇深く感謝して居る。

此の時代の業界を指導されて居た石田、岡田氏を始め多くの先輩諸氏の努力が、同盟会から、引いて今日の吾が東京船具業界の礎石となった

事は申す迄もないのである。

昭和十六年大東亜戦争を契機として、総ての業種が統制経済に移行し、一切を挙げて整理統合が行われ茲に日本船用品統制会社が誕生し、東京地区では東京船用品会社が設立されて未曽有の大改革を見たのである。此の時、船舶艤装の東京船舶加工株式会社も創立されて、社長に選任を受けると共に全国帆布統制組合の業務に従事する事となり、かくして橘合資会社入社以来実に三十有余年間の良きに亘り帆布業界へ献身して来たのである。

昭和十一年日本橋北新堀七番地に独立後、再度の応召を受けたので開業間もない商店の運営も色々困難を極めたものであるが幸いにして、業界の先輩並に谷村氏、箱崎の池田氏等の御援助を得て其の苦難を乗り切る事が出来た。船具、帆布、ロープの加工販売の外、海運、陸運の輸送関係に主力を注いだのであったが、一方日暮里に工場を設置して生産に極力努力した。其後日支事変勃発と共に海軍関係に力を入れ、根本大佐の特別の御支援で昭和十四年海軍指定工場となり、終戦後はＪＰＡ、自衛隊に協力して相当の成績を挙げ極めて順調に事業は進展した。処が輸出がもとで昭和三十年図らずも挫折の憂目を見るに至ったのであるが、今考えて余りにも己れを知らなかった事を深く後悔して居ると共に、業界に御迷惑を掛けた車は心から慚愧に堪えなく思って居る。

併しいつの日か、かならず挽回して過去に於ける先輩諸氏の如くより良き社会人になりたいと念願して居るのである。

今次の大戦に依り多くの船舶を失った日本の海運界の下に過去に於て繁栄をほこった我が船具商も同様激しい変遷を余儀なくされ、今や船具を専業とする船具商もその数を次第に減じ、建設、鉱山を兼業する方向へと其の内容も大分変って来た事が伺われるのである。現在理事長加藤政次郎氏を中心として、東京船具同業組合員四十数社が、真に協力一致、其の実力を挙げている事は理事長の温厚な人格のあらわれであり、誠に感激に堪えない。尚現在私共が過去業界の良き指導者であった方々に感謝すると同時に、私達も将来後輩者一同よりよき先輩として敬慕される様になりたいと心から希うものである。

思い出すまま書いたので多少違った個所もあるかと思いますが、其の点悪しからず御容赦を願います。

数々の思い出

岡田光雄

満洲事変から日支事変と、更に大東亜戦争に迄拡大し、祖国日本は遂に果てしない泥沼へ落ち込んでいった。

戦争の進展に伴い、重要物資は総て統制が施行され、昭和十七年九月には都内の各船具業者も一様に父祖伝来の自分の店を閉鎖して企業合同を行い、新たに東京船用品配給株式会社を創立して国策遂行に専心協力したのである。

然るに戦局は其の後日を追うて我が方に不利となり、遂に敵の軍門に降り終戦を迎えた。

戦後企業整備令が撤廃されるに及んで再び個人企業へと復元し、各店共

其の再建に懸命な努力を続けた結果、何れも戦前を上廻る目覚しい復興を遂げ、今日ゆるぎなき地歩を確立された事は誠に御同慶の至りに堪えない。

幸か不幸か、私は昭和十五年より再度に亘り応召を受け、終戦と同時に帰還致したので業界の変革や統制の実態については皆目知る由もなかったのである。

私は除隊してから戦争中の空白を極力取り戻したいと考え努力したのであるが、幸い子供の頃から家業を手伝い、見様見真似で商売の道も多少の心得があったが、真剣に家業に身を入れる様になったのは矢張り父の死に遇ってからの事である。

父は明治三十年四月、当時船具問屋として全国的に有名であった大村五左衛門商店へ丁稚奉公にあがり、以来明治四十三年四月迄、十三年間実直に勤務し、主家の御許しを得て現在の本湊町に船具商を開業したのである。

自分の父を誉めるのも可笑しいが、父は子飼いからたたき上げて来ただけに、商売に掛けては言葉のはしはしにもみじんの「ソツ」がないばかりか、取扱商品についても驚く程精通して居られた。

よく店先でメーカーの外交員をとらえて専門的な講釈をして居た事を記憶して居るのである。

父は私共を真から可愛がって呉れたが其の半面、子供のシツケに対しては非常に厳しく、全くスパルタ式な所があった。

特に私は子供の頃人一倍腕白者であったので、時には柱に縛り付けられ背中に灸を据えられた事があり、其の跡が未だに消えず今でもよく人に灸跡を聞かれ其の返答に因る事もあるが、其の都度昔を憶い出し自己反省のよきいましめとして居るのである。

父は又至って地味な性格で平素は石橋式の堅実一方であったが、戦争中マオランロープの生産に着眼し、知人の紹介に依る、古川製綱所へ多額の投資をして其の経営権を把握し、工場施設の拡張も計ってマオランロープの大量生産に乗り出したのであった。

製品は現組合理事長の加藤さんが、当時大村商店の営業部長に在任中の頃で、同店を経由して石炭統制会や、鉱山統制会等へ納入し相当な業績を収めたのである。

其の後軍の指令で南方スマトラのメタン市に新に工場を建設する事になり、之に要する資金も父が一切操作し、自分も其の運営に参画する手筈に決って居たが、図らずも再度の召集が下ったので其のまま総てを父に委せて出発したのであった。

応召中父が死亡したので自分としても再び同製綱所に深入りする意志がなかったので、それきり同所とは関係を断ったのである。

こうした事も父が私共兄弟の前途を想い画策した慈愛の賜ものであり、今更乍ら其の深い親心に頭の下がる思いがするのである。

戦後間もない昭和二十二年の秋、東京船用品配給会社の総会が人形町の花屋で開かれたがその席上、谷村長老から、戦争によって時代は正に一変した、是からは青少年が真剣に奮起しなくてはならないと激励された。そして戦前石田由松さんや、君のお父さん達が努力されたと同様に組合の再建は是非共君達青年の力に依存する、と強く要望されたが、当

時私は此の教えを聞いて心から感動したのだった。

其の後、田中真一さんや加藤政次郎さん等一部の有志に私の意中を打明けた処、幸いにして業界の総力に依りとんとん拍子に進捗して昭和二十三年四月、東京船具協会が目出度誕生し、祖国再建と共に力強く発足されたのである。

初代会長になられた田中さんは飽く迄豪放磊落で、混濁合せ呑むと言う様な気概の活動家で、又一面至って神経の行き届いた方で常に業界利益のためには自己を犠牲にして寄与貢献されたのであった。併しながら昭和二十七年七月、五十一才で悲しくも他界された事は我が業界に取り、惜しみても余りあるものがあり、今尚在りし日の温顔が折りにふれ私共の目先に彷彿と浮んで来るのである。

二代目理事長に就任された加藤政次郎さんは、資性穏健にして、思慮周密、常に次代の我が業界を担う後輩者の指導育成に心を砕き、組合員一同の信任厚き有徳の人である。其の他先輩各位も同様に、業界発展のため最善の努力を尽くされて居り、今や東京船具同業組合は全国にも其の追随を許さない立派なものに成長し、祖国再建に大きく寄与して居る事は感銘に堪えない所である。

省り見まして、終戦後一時は祖国の敗戦等で失望落胆し、前途に希望を失いかけたが、先輩盟友のご教導により、自信を取り戻し、今日まで大過なく過ごし得た事はまことに有難くここに謹んで深甚の謝意を表する次第である。

此の上は各位と共に更に一層協力して業界の発展に向って一路邁進せん事を堅く心に誓う次第である。

再建満十周年に寄せて

望田桂一

組合再建後茲に十年、社会情勢は凄まじい勢いで移り変った。

戦争に敗れ、廃墟の中より立上がった都会地は、今は見違える程宏荘な近代的建築物が立ち並び、時代の進歩を物語っている。

東京船具業界も、あたかもその時代的様相を反映しているが如くに、目覚しい発展の跡を着実に刻んでいる。

大東亜戦争遂行の為め、戦時中全業者が糾合して企業整備を断行し、先祖伝来の家業を閉鎖した事も、又戦後食料難、衣料難、住宅難、等々あらゆる塗炭の苦しみを嘗めた事も、今では何れも懐しい思い出の種となった。戦後の混乱から業者を更生させ、業界の発展を企図して創立された、本組合も、よく、傘下組合員の再起興隆の指標となり、陰に陽に助力を与え、懇切に指導して、本来の使命を遺憾なく達成した事は、組合歴史の一項を立派に飾るものと思う。

特に田中理事長が存命中、業界再建の為め尽くされた、あのひたむきな信念と努力は、自から頭の下がる思いがする。

昭和二十七年七月、田中真一氏没後、後任理事長に就任した加藤政次郎氏は、英邁で、温厚で、而も謙譲的精神の持主である。

本人の主宰する諸種の会合や、行事は、常に春風駘蕩として、真に和合一致の雰囲気を如実に醸し出しているが、是は申す迄もなく多年磨か

れた御本人の人格の現われとも言えよう。

組合は、理事長の意図に依り、会費は極力低額にとどめて組合員一同の負担の軽減を計ると共に、一方、其の運営に対しては飽く迄無駄を排して質実効果的に運ばれている。

組合年中行事と言われる新年宴会、春秋二期に亘る懇親旅行、青少年従業員の海水浴、野球大会、或は講習会等も周到な計画の下に秩序整然として行われているが、是は申す迄もなく理事長以下各役員の不断の努力と、組合員各位の熱誠な協力の賜物に外ならない。此の上は愈々人生の修業に心魂を徹し、業界発展の為め微力を捧げんことを心に期する次第である。

此の意義深い十周年を記念して、組合員一同、いよいよ一致団結、輝かしい伝統の上に更に一段の光彩を輝かし、禰栄えに栄えん事を衷心より祈念して止まない。

感　謝

石田恒男

祖国の敗北と言う大きな痛手を受けて、人心の動揺も未だ収まらなかった昭和二十三年の春、業界の先駆者田中、加藤氏等に依り、吾が業界の再編成が提唱されたのであります。是に対し、成瀬、谷村、塚本の各元老を始め先輩諸氏の絶大なる御支援御協力に依り、日ならずして待望の東京船具協会が創立され、茲に目出度く業界の大同団結が実現されたのであります。

創立に当り図らずも組合員一同の御推薦を受け、微力浅才をも省みず役員の末席を汚すに至ったのでありますが、爾来理事長外先輩、諸兄方の親身も及ばぬ御指導、御鞭撻を忝うし大過なく其の職責を果しつつあります事は衷心より感謝感激に堪えない所であります。

光陰は矢の如し、と良く言われますが終戦後既に十数年の歳月は夢の様に過ぎ去りましたが、あの戦前戦後の激しい世の移り変りを考えますと洵に感慨無量のものを覚えるのであります。

昭和十五年三月私が十四歳の折、父は病床に倒れ家族一同の看病も其の甲斐なく遂に再び起つ事能わずして昭和二十二年三月此の世を旅立ったのであります。

杖とも柱とも頼む父親の死に遭遇し、一時は途方に呉れたのでありますが幸いにして社員や周囲の万々の献身的な協力と外部関係者の有難い御支援に依って社運も年毎に上昇し業礎も茲にどうやら安定を見るに至りました事は真に喜びに堪えない所であります。

当時一抹の不安を残して死んでいった父親も綱庄石田商店の今日の業態をあの世から眺めて少しは安堵の胸をなで下ろして居られるものと自らを慰めて居る次第であります。

さて、東京船具同業組合も初代理事長田中真一氏の御逝去後、引続き加藤政次郎氏が後任理事長に就任し、陣頭指揮に当って居りますが多年の経歴と公正にして質実な精神が全業界の信頼を博し、役員会其の他行事、会合に於きましても常に和気靄々として一系乱れざる歩調の下に年々立派な業績を挙げ飛躍向上致しつつあります事は業界の為め洵に

喜ばしい限りであります。

この様に優ぐれた人材の下に行動を共にし、企業経営の指導に或は社会人としての教化薫陶を受けられます事は私共後輩者の身に取り此の上もなき幸福と常に感謝して居る次第であります。

此の「高恩に報ゆ」べく今より一層心を新にして人格の向上に努め、以て我が東京船具業界の発展に微力を捧げたいと決意致す次第であります。何卒今後更に一段の御支援御教導の程御願い申上ます。

船具屋の思い出話

座談会

加藤政次郎　篠田隆太郎
岡田光雄　斎藤清三
羽成福太郎　稲垣勝蔵
田中弘道　望田桂一
石田恒男

者

席

出

加藤　甚だ僭越ですが司会をやらせて頂きます。御承知の様に東京船具同業組合の再建満十周年の記念事業として東京船具業界史を編纂することになりました。ついては皆さんから東京船具業界の色々の思い出話を承りまして出来る限り業界史の内容を飾りたいと思います。どうか宜しく御協力の程御願致します。

篠田　先ず東京の船具屋の発祥地と言えば一体どの辺になりますか。

加藤　嘉永七年に浦賀にペルリがやって来てから海外との交易が始まり、それをきっかけに日本も其の後段々と蒸汽船を持つ様になったが其れまでは総て木造の帆前船で江戸と上方間を酒、醤油、灯油等日用品の海上輸送が行われて居たのです。震災後芝浦に新しく港が出来る迄江戸時代から長い期間霊岸島が船付き場として東京港の役割りを果して来た関係上、矢張り船具屋の発祥地は霊岸島だと思います。

加藤　それから船具屋さんの栄枯盛衰も又激しいのですが、最も長く続いた店は何処でしょうか、一つ斎藤さんに御願い致します。

斎藤　私も明治三十九年に郷里から出て越前堀の北山船具店と言う店に小僧にはいったので年代も新しくそう古い事は良く分りませんが色々先輩の話に依りますと終戦の年解散した大村商店が其の道の元祖ではなかったかと思います。創業以来三百何十年とも言われ、当時同業者の可成り多くの方が此の大村出であった事も事実であります。私の主人の北山喜一郎を始め飯島幸右衛門、岡田仙太郎、稲垣英一郎、高橋九六、水野貞吉、杉田八郎さんなども大村出です。

羽成　大村五左衛門さんの外に鈴木彌兵衛、宇田川清兵衛さんなども創業の年代は詳しく知りませんが、一時沢山の人を使い相当栄えた店ですね。

加藤　鈴木船具店さんからは現在業界の大御所で鈴木船具店の解散後其の名跡を受けついで飛躍的発展を遂げ更に戦前戦後を通じて業界の為め縦横に活躍された現三洋商事会社の社長成瀬勝蔵さん、それから東京船用品会社の専務として才腕を振われた高浦船舶用品会社の前社長高浦高太郎さん、横浜の原欣一、矢野義一、山本桂

さん、それに函館の渡辺階助さん等も此の店の出であります。

石田　東京藤井産業の藤井さんはたしか宇田川船具店の出だと思います。

加藤　此の外明治時代に営業して居た船具屋さんを挙げて頂けませんか。

篠田　石田由松、串田清三郎、篠田定三、岡田仙太郎、手塚伸一、本多敏明、飯島幸右衛門、玉上清吉、前原徳蔵、福田清八、鈴木佐一郎、吉沢卯之助、稲垣英一郎、田中益次郎、石塚要助、松仙、相模屋、高田屋、木村船具店等でまだ此の外に何軒かあったと思います。

加藤　それから当時の船具加工所の様子について羽成さんから御話しを願います。

羽成　片桐、滑川、帆吉斎田吉三郎さんが古いですね、入船町にあった滑川工場は養子さんを迎えてから営業情態が悪くなり大正末期に廃業されました。

永田さんは帆吉の出であり、石川惣太郎さんと私は片桐から分れたのです。其の後石川さんから的場、岩田、道源さん等が独立されて居り加藤仁吉さんは横浜田中船具店で修業したのであります。

加藤　私共の大村商店では滑川工場を下請工場として居たのですが大正七年の春、番頭さんの使いで石川惣太郎商店へ境浄水場納めの天幕の見積りを頼みにいったのがきっかけとなり、其れから石川さんを専属に御願いする様になって長い間取引が続いたのであります。石川惣太郎さんは惜しくも早死になさいましたが当時船具屋さんの中にもあれ程腹の出来た立派な人物は先ず無かったと思います。

岡田　長い年月には加工屋さんも可成り浮き沈みはありましたね、現在東京で船具の加工をして居る店は何軒ありますか。

稲垣　羽成製帆所、石川商工、岩田商店、大亜工業、稲垣（株）、古沢工業、永田船具、道源加工所、的場船具の九軒位いでしょう。

加藤　労働基準法などに依って従業員の待遇は昔から見ると天と地程変って来ましたが、明治三十年代の小僧さんの待遇は一体どう言う風であったのですか、斎藤さん。

斎藤　私は十三才で北山船具店へ丁稚奉公にはいりましたが一年の内休みと言えば御正月と御盆の藪入りの二日だけで其れに給料などは一銭も呉れず、全くの無報酬であったので只其の頃は食う事以外に楽しみはなかったのです。一緒に働いて居た倉田君などは、晦日そばを特にうどんを頼み丼三杯を汁だけ残してうどんだけを食い、残った汁の中へ御飯を山に盛り込んで息もつかづに平げたもんですよ、大村さんなどもみそかそばは制限なしに喰べられたそうですね。

加藤　私は生来そばは余りすきではないのですが実際みそかになると先きを争って一人で十五杯も二十杯もお腹のはち切れる程喰べましたね。

稲垣　昔は今の様なオートバイとかトラックではなし全部大八車で而も道路は砂利が敷いてあればいい方で、いつもぬかるみで橋と言う

橋は高い木橋で重い荷物では到底一人で引いて渡れなかったのです。橋の際で通行人の来るのを待って頭を下げて後押しを頼んだものですが苦しい時代がありましたね。

羽成　昔は十才位いから十二、三才位いの年少ではるばる越後や富山の遠い地方から家族に別れて泣き泣き東京へ小僧に出て修業されたのです。

斎藤　私の在所は栗橋で百姓の次男坊に生れたんですがね、当時百姓は幾ら働いても余裕がなく全くどこでも食うに困って居ましたので、二男三男はみんな家から放り出されて了う、私等も全く可哀想なものでしたよ。

加藤　私共の先輩の番頭さん達も越前の福井や伊勢、三河の方からみんな十三、四才で小僧に来られたのです。

田中　昔の人達はそうして年端もゆかない頃からつらい辛棒して一人前となったので矢張り粘り強い処がありますね。

加藤　そうです、昔の人は小僧時代に何年間か徹底的に仕込まれ、やがて二十一才の適令期になると兵役の義務があり二ヵ年間に百万長者の息子も水呑百姓のせがれも国家の干城として又、血の出る様な激しい訓練を受けたのであります。此の為め長じて社会に出た際あらゆる困難に屈せず、是を乗り越えて行くだけの実力を備えられて居たが、今の若い方の中には時勢の変遷とは申しながら一寸した事にも辟易し自暴自棄に陥る者が多い事は誠に遺憾ですね。

昔の雇用関係は今の時勢には全く通用しないからと言って全部が全部悪い面ばかりはありませんね。

望田　良い所が可成りあると思います。

加藤　時代の変遷で船具屋さんも昔の方々が大分姿を消しましたが二代、三代と続く店は至って少いですね。

稲垣　先ず五代続いて居る店では嘉永七年創業したと言われる田中産業、三代が綱庄石田商店位いなものですかな、二代は石川商工、大和産業、三共商店、高浦船舶、杉田船用品、古沢工業、鈴春商店、田中船用品、垂見船具、太田船具、岩田商店位いと思います。

篠田　廃業された店も数限りなくありますが終戦後に於ては岩田工作所（岩田英次郎）、三和商会（林滝蔵）、橘米吉商店、本間産業会社、前原徳蔵商店、等が挙げられます。

加藤　我が業界発展の為め色々と御尽力下さった古い方々も年と共に此の世を去り現在残る年長者と言えば、高浦高太郎、高橋九六、羽成福太郎、谷村勇、成瀬勝蔵、塚本常五郎、斎藤清三さん位いなものとなりました。こうした御年長者の方々には一層長生きをされて業界の前途を高所から見守って頂きたいと存じます。尚私共後輩者は今後益々努力して我が業界をして更に一段と繁栄さして参りたいと存じます。まだいろいろ伺わせていただきたいと思いますが、時間の都合で此の辺で終る事に致します。

ありがとう御座居ました

明治初期に於ける東京港

安政五年以来世界列強の圧迫によって幕府は開港を約し貿易港を提供せざるをえなかった。かくして明治維新が断行されると共に築地に居留地が開かれ、江戸が東京となるに及び明石町の居留地は明治の文明開化の一代表の如き観を呈したのであるが、旧商業形態から資本主義形態へ転換する一時期迄――凡そ明治十九年頃迄――は内国市場の開拓がしきりに行われていたから、旧問屋の勢力は未だ衰へず、それと同時に江戸港から東京港となり、船運甚だ盛んで余勢を保っていた。しかし横浜の幕末、開港時代からの急速な資本主義発展の上における貿易の強行は、より一層横浜発展に拍車を加え、加ふるに軍需輸送の見地より政府の海運業への保護助長策は、郵便汽船三菱会社を強大ならしめ、十八年には競争者たる共同運輸会社を合併して郵船会社を成立せしめ、横浜港はその貿易への出発点たるの地位を確立した為、かつての江戸港たる京橋及日本橋区にまたがる港湾地区は次第に小規模の港湾たるにとどまって次第に発展性を失い全く横浜に圧倒され、卸売商業地区への国内物資の輸送に当る旧態依然たる小船、たかだか小汽船による問屋街への輸送が行われるに過ぎなくなって了つた。何故築地居留地は明治初期の文化的風俗的対象としてのみ存在し、東京における海外貿易の中心地たり得なかったか、横浜の如き役目を何故演じ得なかったか、それは築地が横浜の如く海港的に恵まれず地域が狭隘な事と隅田河口と言う奥まった入口にあるため何よりも大船舶の航行に不便なのが原因であった事は言を埃ない。隅田河口に入り来る船も霊岸島の東京湾汽船が移転してからは全く淋しくなり、隅田川舟航でさえ今では隅田川汽船（一銭蒸気と言はれて親まれたポンポン蒸気）が、永代橋際から吾妻橋まで市民を乗せて走るのが目立つのみだ。明治四十年頃迄は三銭であった蒸気も昭和十三年には六銭となり現在では六拾円をとって今だにその間を連絡している。

かかる蒸気船は、最初先づ外人によって運転せられたが、隅田河口で爆発事故を起すなどの失敗があり、進歩的な邦人の努力と、居留地の発展と相侯って充実した組織になったのである。

何れも幕末維新の際に於いて築地居留地が新文化の一中心を構えしだけに、その新しき洋風文化の影響もあって、多くは此処を中心として蒸気船の如きも航行を開始したので、築地居留地を念頭におかずしては、かかる蒸気船開通の序幕の如きも考え得られざる所である。かかるうちに、その航行は次第に盛況を見るに至り、霊岸島回漕会社の如きは華々しき活躍の足跡を残した。新東京貿易の中心が築地居留地及運上所に関係ありし事は特に銘記すべきである。

霊岸島回漕会社は明治二年十二月蒸気飛脚を備付けて東京大阪間の運航を開始し、二十一日第一回の運輸を行った。この日こそまことに明治初年文化史上一期を劃すると言うも過言でない。翌三年正月二十九日発せられたる蒸気郵船規則は東京の港として霊岸島がその最良の地位にあって交通運輸界に君臨していた事を示すものである。かくて

霊岸島に之が設立を見て運輸方面のトツプを切った。築地を中心とする外人との取引は極少のものにとどまりしとは言え、未だ海運業の実権か日本橋、京橋の両地区の殆ど独占的なりし当時にあって霊岸島辺が依然たる海上輸送の主力点たりしは当然の事であろう。

尚この回漕会社が通商司に隷属して業務を経営せる海運会社にて政府より五艘二、三の藩主より八艘都合十三艘を借入れて営業を始め、四年廃藩となるや政府は諸藩の汽船を更に引上げて郵船蒸気船会社を設立せしめ回漕会社の事業を之に合併せしめ、茲に、我国郵船事業は新しき欧米の組織に倣いし会社経営となって進展を見たのであった。

此の外新川酒問屋と灘との間に於ける酒荷輸送に就て語らねばならぬ。嘗ては江戸上方間の覇者たりし酒荷輸送に重要任務を帯びていた樽廻船が明治維新後の文明開化期にあって汽船と言う時代の怪物のため次第に圧倒せられゆく姿を叙述する必要がある。江戸時代摂泉十二郷より江戸新川酒問屋に向けて酒輸送に専用した樽船は、明治七八年の頃より漸く衰微して、十三、四年頃には遂に其の跡を絶つに至った。これは汽船による運送業と関係あるもので何分にも汽船は文明の利器であり、樽船とその速度や安全さに於て比すべくもなく且つ汽船に積むと酒がくさるなどと言うことの誤りなる事が判明するに及び汽船を利用する方が得策なるを皆考察するに至った。その上樽船は難船の際の負担は皆荷主に帰したから、経済的にも反って汽船が便利で樽船二十日の日程を三昼夜に短縮する汽船を、如何にしても使用せざるを得ない時代となり樽船はここに全く過去の姿をとどめて敗北するに至った。

即ち土佐の岩崎彌太郎が東京に進出し日本橋南茅場町に郵便汽船三菱商会を開いてこの酒荷輸送に当るや、全く樽廻船は之に圧倒されて衰退に瀕したが、たまたま西南戦争勃発するや、三菱会社は灘と東京との酒荷運搬を中止し、全力をあげて政府の軍事輸送に使用することとなった為、醸酒側も困り果て、樽廻船を再び使用することとなり、一時樽廻船は衰退を挽回して、新川酒問屋街への役目を演ずることになったが、その後西洋型帆走船が走るに及んで、樽船の使用は全く廃止されるに至った。

かくて西南戦争後は三菱会社も再び酒輸送に当り共同運輸会社設立さるるに及んで之と酒輸送を争ったが明治十八年両会社の合併により郵船会社が設立され、ここに酒荷輸送は郵船によって行わるることとなった。

尚明治二十八年東京港築港計画を行える際の調査によれば当時の主なる船舶扱問屋及び船宿は次の如くである。

船舶の往復スル国名又は港	問屋又ハ船宿	住所	屋号	姓名
土佐、大阪、紀伊	回漕問屋	鉄砲洲船松町	錦屋	御前長之助
紀伊、淡路	同	同	紀伊国屋	清水久兵衛
遠江	同	鉄砲洲本湊町	房州屋	久保田嘉右衛門
土佐、磐城	同	霊岸島船松町		伊沢回漕店
尾張、伊勢、三河	同	南新堀二丁目		住田屋回漕店

船舶用品の価格の變遷

昭和四年二月発行の定価表

タンパツクル

	円
三分	.78
四分	.96
五分	1.38
六分	3.35
七分	3.35
八分	3.66
一寸	4.88

ワイヤコース（シンブル）

	錢
三分	11
四分	13
五分	19
六分	28
七分	48
八分	56

ワイヤロープ

四号品（鋼線）

1尺ニ付

	特上 錢	中等 錢
二分半	7.	6.5
三　分	8.	7.5
三分半	9.	8.5
四　分	10.5	9.0
五　分	15.5	14.0
六　分	19.5	18.5
七　分	27.5	26.5
八　分	32.5	31.5
二分（五号品）		3.5
一分三厘 1尺		2.3

九号品（並線）

1尺ニ付

	錢
二　分	2.8
二分半	3.3
三　分	3.5
四　分	5.5

野州麻綱

1尺ニ付

	錢
四　分	7.0
五　分	13.5
六　分	17.0
八　分	29.5

鉄ブロツク

	一車	二車	ギンネン
五　吋	1.69	2.30	2.34
六　吋	2.45	3.12	3.18
七　吋	4.35	5.65	4.98
八　吋	4.35	5.65	4.98
九　吋	5.71	7.32	6.36
十　吋	7.27	9.63	7.53
十二吋	11.07	13.96	11,10

クリツプ

		錢
三　分	1個	13
四　分	〃	15
五　分	〃	20
六　分	〃	23
七　分	〃	32
八　分	〃	39

シヤツクル

		錢
三　分	1個	14
四　分	〃	17
五　分	〃	31
六　分	〃	45
七　分	〃	67
八　分	〃	99
一　寸	〃	198

マニラロープ

1尺（上）

	錢
二　分	0.9
三　分	1.5
四　分	2.5
五　分	4.3
六　分	5.3
七　分	8.0
八　分	10.0
一　寸	15.0

1尺（中）

	錢
二　分	0.8
三　分	1.3
四　分	2.2
五　分	3.6
六　分	4.6
七　分	7.0
八　分	8.2
一　寸	12.8

1尺（並）

	錢
四　分	1.7
五　分	2.8
六　分	3.6
七　分	5.3
八　分	6.3

昭和12年12月発行の定価表

東京製綱株式会社製品

◀ 麻綱定価表 ▶

品　　号	円	
日　　印	63	00
月　　印	55	00
錨　一　号	50	00
錨　二　号	42	00
錨　三　号	37	00
軍配特号	55	00
軍配一号	50	00
軍配二号	42	00
軍配三号	37	00

但シ細物ハ下記ノ割合ニテ値増ノ事

		円	
周1⅛吋	100磅ニ付	1.00	増
〃 1 〃	〃	2.00	〃
〃 ¾ 〃	〃	3.00	〃
〃 ½ 〃	〃	5.00	〃
四ツ撚	〃	2.00	〃
バラ打	〃	3.00	〃

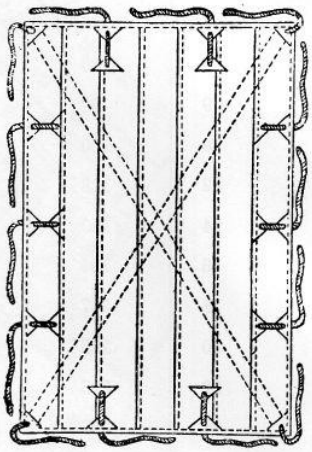
綿帆布定価表

月　星　印

品　号 番号モノ		二十二吋巾 定価 一碼ニ付	二十二吋巾 一俵入数	三十六吋巾 定価 一碼ニ付	三十六吋巾 一俵入数
No.	1	円.980	2反入	1円605	2反入
No.	2	.910	〃	1.490	〃
No.	3	.840	〃	1.375	〃
No.	4	.770	〃	1.260	〃
No.	5	.700	3反入	1.145	〃
No.	6	.630	〃	1.030	3反入
No.	7	.560	〃	.915	〃
No.	8	.490	〃	.800	〃
オンス	モノ	二十八吋半巾		三十六吋巾	
12	OZ	.630	8反入	.800	6反入
10	OZ	.525	10反入	.665	7反入
8	OZ	.420	〃	.530	8反入
L'12	OZ	.615	8反入	.780	6反入
L'10	OZ	.510	10反入	.645	7反入
L' 8	OZ	.405	〃	.510	8反入
L"12	OZ	.600	8反入	.760	6反入
L"10	OZ	.495	10反入	.625	7反入
L" 8	OZ	.385	〃	.490	8反入

昭和12年12月発行の定価表

防　水　雨　覆



貨　車　用　雨　覆

品種別	寸法 / 生地	尺 尺 15×20	16×22	18×24	20×26	26×30
		円	円	円	円	円
油引防水布地	A	52.50	61.90	75.10	94.70	129.60
	B	48.50	57.70	71.00	87.50	119.70
	C	42.40	52.80	65.20	80.30	110.00
スレン防水布地	A	43.20	50.90	61.30	77.80	106.20
	B	37.90	46.70	57.20	70.50	96.20
	C	32.20	41.60	51.10	63.30	86.30

用途　貨車用　船舶用　倉庫用　鉄道構内用

品種別	寸法 / 生地	荷馬車用雨覆（貨物自動車屯車用） 尺 尺 17×11	19×11	諸車用雨覆（貨物自動車屯車用） 12× 7	12× 9	13×11	小車用雨覆 7 ×4.5	10×4.5
		円	円	円	円	円	円	
油引防水布地	A	32.60	35.80	14.50	18.90	24.30	6.20	7.30
	B	30.10	33.00	13.50	17.40	23.30	5.90	6.90
	C	27.70	30.30	12.60	16.30	21.40	5.30	6.00
スレン防水布地	A	26.70	29.20	11.80	15.20	20.30	5.30	6.20
	B	24.20	26.40	10.70	13.90	18.30	4.90	5.80
	C	21.70	23.80	9.60	12.40	16.60	4.50	5.10

地質
A　月星印
B　ハ十二オンス
C　ハ同八オンス
　　ハ同十オンス

日本ペイント株式会社製品

ペ　イ　ン　ト

品名	容量	定価	品名	容量	定価	品名	容量	定価
		円			円			円
A印ジンク	12.5瓩	11.50	ワニス	1瓩	1.10	調合ペンキ各種	1/5立	.20
A印ボイル油	16瓩	15.80	（コーパル	4瓩	4.15		1立	.75
実用ボイル	16瓩	12.10	及サイズ）	16瓩	15.35		2立	1.35
							16立	9.00
						同錆及黒	16立	8.00

昭和35年1月発行の定価表

ワイヤロープ（四号品）

直径	価格 1米に付
6耗	55円
8	80
9	92
10	100
12	118
14	150
16	194
18	247
20	293
22	348
24	396
28	756
30	630
32	745

マニラロープ

直径	価格 1米に付
6耗	5円
8	9
9	12
10	15
12	20
14	30
16	40
18	50
20	60
22	70
24	85
28	115
30	130
32	150

鉄ブロック

枠径	一車	二車	キンネン
5吋	360円	510円	580円
6	570	800	800
8	900	1,250	1,100
10	1,700	2,400	1,900
12	2,500	3,400	3,100
14	3,300	4,900	3,700

シヤツクル

9耗	16円
12	26
16	50
18	85
22	140
24	190
32	460

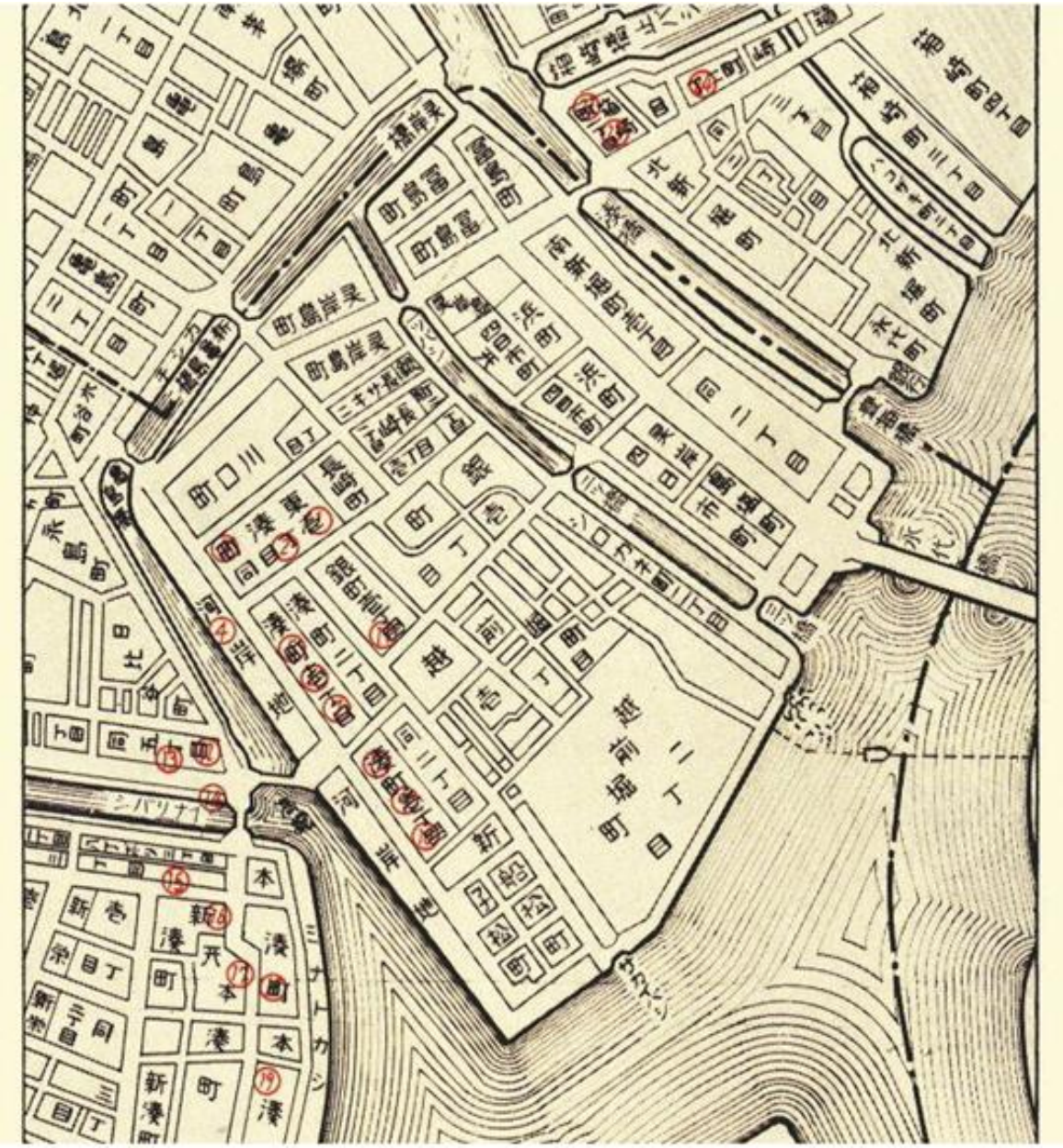
ペイント

品名	容量	定価
堅練白亜鉛ペイントA	12.5瓩	4,000円
ボイル油A	16	4,140
実用ボイル油	16	3,200
調合白亜鉛ペイントA	25	6,670
〃 錆ペイントA	25	3,200
〃 黒 〃 A	25	3,200
マリーペイント 赤錆	16	5,070
プライマー 赤錆	25	6,670
ゴールドサイズ	16	4,000
コーパルワニス	16	4,000
ドライヤー	30	4,800

綿帆布

号数	幅	価格 1米に付
No. 1	91.5糎（36吋）	430円
No. 2	〃	409
No. 3	〃	370
No. 4	〃	340
No. 5	〃	306
No. 6	〃	276
No. 8	〃	213
No. 9	〃	218
No. 10	〃	183
No. 11	〃	146

関東大震災前の船具商の所在地



1 大村五左衛門商店
2 福田清八商店
3 徳田善吉商店
4 飯島幸右ヱ門商店
5 稲垣英一郎商店
6 大谷由松商店
7 北山船具店
8 本間商店
9 原善造商店
10 日本製綱株式会社
11 串田清三郎商店
12 石田由松商店
13 篠田定三商店
14 本多敏明商店
15 石川惣太郎商店
16 宇田川清兵衛商店
17 椎野貞吉商店
18 岡田仙太郎商店
19 玉上清吉商店
20 羽成製帆所
21 前原徳蔵商店
22 鈴春商店
23 田中益次郎商店
24 石塚孫兵衛商店

東京船具業界

歴代名士人事録

（順序不同、敬称略）

現代編

成瀬勝蔵　福田清八
谷村勇　玉上清吉
塚本常五郎　石塚孫兵衛
高浦高太郎　原善造
高橋九六　石川惣太郎
本間淳助　杉田八郎
古沢卯之助

故人編

大村五左衛門　手塚伸一
鈴木彌兵衛　田中真一
宇田川清兵衛　鈴木春蔵
石田由松　田中正一
岡田仙太郎　横井新太郎
北山喜一郎　的場丹蔵
篠田定三　林滝蔵
前原徳蔵　倉田万治郎
山本光雄

現代編

成瀬勝蔵

氏は明治二十八年八月二十九日栃木県足利市に生れ、童にして衆に勝れ将来を期待さる。大正三年一月、当時業界の名家であった鈴木彌兵衛商店に入店し爾来社業に刻苦精励店主より全幅の信頼を得るに至った。大正十三年十二月鈴木船具店の名跡を継承して引続き船用品の販売を湊町三丁目に於て独立開業されたのである。多年の経験と事業に対する氏の異常なる熱意は逐年飛躍発展し確固不抜の業礎を築いた。大東亜戦争に際会するや率先して全国船具業界の整備指導に当り東京船具商業組合理事、日本船具商業組合連合会専務理事を経て東京船用品配給株式会社社長、日本船用品統制株式会社専務取締役等の重職を歴任し、日本産業の興隆に献身された。現在尚矍鑠として三洋商事株式会社外数社に上る要職を兼ね斯業の発展に活躍せられて居る。

氏は資性潤達高邁にして活動力に富み、用意周到先見の明を具え、今や日本船具業界の重鎮として名実共に尊敬と信頼を集めて居る。

三洋商事株式会社社長
東京船用品株式会社会長

谷村　勇

氏は明治二十四年四月九日東京都に生る。明治四十一年三月、京都府立第一中学校卒業、続いて大正十三年社会政策学院を卒業後同院研究科にありて社会学並びに経済学を十四年の長きに亘り専攻研讃された。

其の後実業界に入り、日本製綱株式会社の常務取締役に就任、超えて大正十五年京橋区越前堀に谷村合名会社を創立し従横に鵬翼を伸して活躍されたのである。

昭和十三年時局の進展に伴い、東京船具商業組合が設置されるや業界の信望を担い、初代理事長に選任され其の使命を遺憾なく達成された。

終戦後善隣産業株式会社を創立して取締役社長となり、一方吾が船具業界の発展にも引続き貢献されたのである。

昭和六年一月、同志と相図り中堅建設同盟を創設し中小商工青年の指導に当り後、昭和十五年十二月財団法人奉仕経済団が結成されるや団長に就任し、現在中政連の顧問の外幾多の要職を兼ね名声隆々たるものがある。氏は社会公共への心厚く特に中小企業の善導育成に終始一貫献身せられ、又弁舌爽やかにして正義の観念強く信念と誠意から迸り出る氏の言葉は中小商工業者救済の一大支柱ともなって居る。

中小企業の前途極めて多事多難の際、吾が業界にかかる有為な人材を有することを衷心より喜ぶと共に業界の為め社会の為一層の健闘を祈って止まぬ次第である。

善隣産業株式会社社長
財団法人奉仕経済団団長

塚本常五郎

氏は福岡県八女市の出身にして明治二十七年六月十八日に生る。大正十年青雲の志を抱いて上京し幾多の苦難の道を乗り越えて大正十三年四月芝浦船具塚本商店を創業せられたのである。

氏は性来堅実不動の信念を具え然も絶えず経済界の進展に留意し、商機を逸せずこれを把握して対処された為め、其の後の経営は逐年順調なる進展を示した。昭和十六年十月東京船用品配給株式会社の創立と共に同社の専務取締役に就任し越えて十九年四月取締役社長に選任された。三十三年五月病気の為め止むなく社長を辞任し相談役として今日に至ったが此の間挺身会社の運営と業界の発展に寄与貢献された。

氏は頭脳明晰にして社会的識見豊富な徳望の士である。業界のため健康に更に一段の御自愛を祈って止まぬ次第である。

元芝浦船具塚本商店主
東京船用品株式会社相談役

高浦高太郎

明治二十三年一月十一日、神奈川県小田原市に生れ十六才にして富士紡績小山工場に就職した。大正六年上京して鈴木彌兵衛商店に入店され爾来寝喰を忘れて主家の為めに献身努力された。大正十二年十月二十六

日港区芝金杉四丁目八番地の現住所に於て独立の旗上げをし信用は年と共に高まって行き加うるに自己の利益を後にして得意先の利便を図ることを優先とした営業方針は広く需要家の知る所となって信用は倍加するの盛況を見るに至ったのである。昭和十七年九月企業合同の結果、東京船用品配給会社の創立を見るに及んで常務取締役に推挙され其の運営に努力された。昭和二十五年九月、同社を退任して高浦船具店を再建し鋭意社業の進展に努力した結果再び輝しき業礎を確立するに至った。

資性潤達にして不撓不屈堅忍不抜の精神に富み今や功成って悠々自適の境地にある。

初代高浦船具店主
前東京船用品株式会社専務取締役

高橋九六

氏は爰知県幡豆郡一色町佐久島の出身にして同郷先輩の高橋喜之助氏が当時大村五左衛門商店にて支配人の地位にありしをたより同店に小僧として入店した。

以来精励格勤、長ずるに及び愈々其の本領を発揮し多数の店員を抜いて頭角をあらわしたのである。

たまたま高橋喜之助支配人が大正元年十二月八日三十八才で急逝されたので其の跡を襲い支配人に就任第一次大戦を向え其の才腕をふるい主家の興隆に寄与されたのである。

大正十二年関東大震災の直後主家を辞任して南新堀で独立され、爾来飛躍的発展、今日の確固たる基盤を築き上げられた。

思慮周密、事業経営の才腕に富み齢既に古稀を過ぎたるも意気尚壮者を凌ぎ、引続き陣頭指揮に当られている。

初代株式会社高橋九六商店社長

本間淳助

氏は明治二十八年一月四日、山形県長井市横山仁右衛門氏の五男として生れ、郷土の小学校を経て県立致芳実業学校（旧制中学）を卒業す。

大正八年三月懇望されて本間家の養嗣子となり爾来家業の船具商に従事し、営営として其の進展にたゆまざる努力を続けられた。

大東亜戦争遂行に伴なう企業整備の為め一時営業を停止せざるの止むなきに至ったが、戦後は逸早く再起復興し本問産業株式会社を創立して縦横に活躍された。

洵戦前戦後を通じて終始一貫よく業界の発展に尽力されたが、昭和三十年一月廃業して千葉県九十九里沿岸に移り現在悠々自適の日を送って居る。

資性温厚にして謙譲的精神に富み酒興至れば得意の山中節を歌い洵に人問味溢れる愛情豊かな人である。

元本間産業株式会社社長

故人編

故大村五左衛門

安政六年に生れ幼名を源三郎と言い後、襲名して大村五左衛門を名乗った。

徳川時代から連綿として続いた旧家であり特に明治、大正、昭和の御代を通じて全国船具業界に其の名声を広く謳われたが戦争末期の昭和十九年に廃業された。

尚業界の老舗としては同店が最後のものであった。

氏は見るからに温容にして人格珠のごとく長者の風格を具えていた。

土地の草分けとして多年町会長を勤めると共に明治二十二年十二月市、区制発令以来大正十年迄の期間区議会議員並びに市議会議員に再三当選、地方自治の上にも大いに寄与貢献した。

昭和十九年八十四才の高齢を以て天寿を完うされた。

元大村五左衛門商店主

故鈴木彌兵衛

氏は明治二年和歌山県に生る。明治二十二年鈴木彌兵衛商店に入店せられた。

生来の非凡なる才能を認められて、同家の養子となり、先代鈴木彌兵衛を襲名した。爾来、時勢の推移に着眼して積極的に推進、好機を把握すると共に、寝食を忘れて懸命な努力を続けられた。

第一次大戦を迎えて、社業は順風に帆を掲げたる如き進展を示し、横浜、大阪、神戸、北海道の各枢要地域にも支店を設置し其の盛況振りは船具商として東洋一とも称せられたのである。

一方製油事業も、当時日本石油会社と覇を競う程隆昌を極めたが、不幸にして大正大震火災に遇い其の一切を灰儒に帰したのであった。

罹災後、鈴木船具店の後継を現三洋商事株式会社社長成瀬勝蔵氏に依嘱し、自身は大阪に転住して大阪製鎖株式会社、並びにカナエパツキン株式会社の取締役として引続き社業の運営に活躍せられた。

資性明敏にして、意気旺盛、あらゆる困難を打開して所期の目的を貫徹して邁進するところ又、他の追随を許さず、業界の偉材として推讃すべき士であったが、昭和八年十二月二十一日六十四才を以て他界された。

元鈴木船具店主

故宇田川清兵衛

初代宇田川清兵衛氏は、京橋区南八丁堀三の六生れ、長じて同所に船具商を経営す。明治初年霊岸島在住の橋本家より藤吉氏を養子に迎へて家督を護り二代目宇田川清兵衛を襲名させた。

三男豊三氏は明治十九年十一月の出生にして明治四十二年三月、早稲田大学商学部を卒業後直ちに父の家業に従事して三代目宇田川清兵衛を襲名す。

氏は資性英邁にして敏達、財界の表裏に精通し業界第一流の名家として確固たる地位を築いた。其の後益々発展の途上にありしが好事魔多しの言に洩れず、大正十二年の大震火災に依り多年に亘る労苦の蓄積の大部を烏有に帰するに至ったので遂に意を決し、父祖伝来の船具商を廃業された。

昭和十九年十一月八日、鎌倉市西御門一番地の自宅に於て永眠さる。享年五十九才

元宇田川船具店主

故石田由松

氏は明治六年神奈川県川崎市に生れ、幼少にして石田庄兵衛氏の養子となり成長と共に家業を手伝い終始一貫黙々としてたゆまず努力された。特に同店経営の月島綱工場にて麻綱製造に従事し筆舌に尽し得ざる苦難を身を以て体験されたのである。

其の労苦が報いられて綱庄石田商店は其の後福徳を招いて商運は益々順調に進展し、目的達成願望成就したのであった。

氏は過去に於いて長い苦難の道を歩いた為め後年同業者中経営に支障を来たし援助を乞う者に対しては其の何人たるを問わず親身になって救済の労を惜しまなかった。

昭和二十二年三月六日熱海の疎開先で物故されたが、東京船具業界の発展に尽された輝しい功績は永遠に其の光を失わないであろう。

二代目綱庄石田商店主
元東京船具同盟会会長

故岡田仙太郎

氏は明治十七年十一月三日岡田常次郎氏の長男に生れ明治三十年四月大村五左衛門商店に入り、其の店員となった。

入店以来氏の労苦は一通りではなかったが一業に熟達しようとする強い熱意からよくこれを克服して勤続実に十三年に及んだ。一口に十三年と言うが他家に住込んで其の問の労苦と忍耐とを凝っと辛捧出来得る人は決して多くは居ないのである。明治四十三年四月遂に年来の志望を達成して現住所に独立開業され、爾来業績は好調の一途を辿り今日の大成を為しとげられたのである。

氏は資性剛健、聡明にして大局に眼を注いで小事に拘泥せず男性的気魄の豊かな英才であった。功成り名遂げて昭和十九年二月四日此の世を去られたが、存命中に石田由松氏と共に東京船具業界の発展に専念し幾多の功績を残されたのである。

初代岡田船具店主（現大和産業有限会社）
元東京船具同盟会副会長

故北山喜一郎

氏は慶応三年上州太田に生れ、明治十五年四月十五才の時太田市の豪農で大村家の姻戚に当る大塚久右衛門氏の斡旋に依り大村五左衛門商店にはいられた。

十有余年あらゆる辛苦を重ねて修業し、明治二十八年東湊町河岸に北

山船具店を創立し独立独歩へと踏み出したのである。時あたかも日露戦争中で家業は飛躍的盛況を遂げた。夫婦の間の一人娘に対し婿養子を迎えたが不幸にして夭折し続いて自身も昭和十一年秋七十才で永眠された。

資性飽く迄謹厳実直にして学者的風格豊かなる人格者であった。

洵斎藤清三倉田万治郎の両氏は親しく故人の薫陶を受けられたのである。

初代北山船具店主

故　篠　田　定　三

氏は愛知県半田市の出身にして明治八年十二月二十八日小栗家の二男に生る。十五才にして上京し、京橋区東湊町一丁目徳田船具店に入りて専心業を修めた。後同業福田船具店、店主（先々代）の斡旋に依り、篠田家子女と縁組し一家を成して明治二十九年一月、本八丁堀五丁目十番地に篠田船具店を創立した。

専ら伊豆、房州通いの輸送船を始め一般漁船を得意先として開拓し、船具品の販売に当りあらゆる困難を打開して、積極的に邁進されたので業態は極めて好調に進展されたのであった。

資性温厚稀に見る誠実有能の士であったが、昭和十三年十一月七日六十四才の齢を以て此の世を去られた。

初代篠田船具店主

故　前　原　徳　蔵

氏は群馬県新田郡藪塚の出身にして明治十年五月二十日生る。明治二十七年十七才の春上京して松下船具店に見習い奉公に入った。

修業後明治三十三年三月、主家の支援を得て中央区湊町三丁目七番地（旧京橋区船松町十四番地）に船具問屋前原徳蔵商店を創立した。創業当初の困難をよく打開して初期の目的を達成された事は、氏の手腕の凡ならざるを証明して余りあるものがある。

氏は飽く迄堅実にして一方稀に見る謹厳高徳の士であったが、大正十二年七月一日五十六才を以て他界した。尚嗣子前原正幸氏は尊父没後家業を継承し敏腕を揮われたが、大東亜戦争の際、日本船舶金物統制株式会社を設立して自から其の運営を主催し使命達成に一意専心努力された。

元前原船具店主

故　福　田　清　八

初代清八氏は、嘉永五年、千葉県長生郡一ツ松村木島家に生れ、成人して福田家に入籍す。

明治十年、現住所（旧東湊町一丁目六番地）に船具問屋を開業し鋭意努力したる結果、店運は漸次向上された。

然るに開業の喜びも束の間、同十二年十二月二十六日、京橋区箔屋町から出火（焼失戸数一万三千戸と称せられる）した大火により全焼す。

剛毅不屈の氏は是にひるむ事なく、日ならずして勇気百倍し再建復興の中に立ち上がったのである。

爾来順調なる発展を続け、明治四十年、開業満三十周年記念祭を盛大に挙行し、それを契機に隠居された。

大正四年七月十一日六十一才を以て没す。

二代目清八氏は明治二年栃木県栃木町嘉兵衛門町、井草家の四男として出生。

十三才にして上京、小網町金久保商店へ奉公し、幾多の苦難を堪え忍んで、商業の通を修業された。

明治二十七年、懇望されて福田家へ入籍し、初代の後を継いで経営に当り努力奮闘、一段と業礎を確立した。

氏は稀に見る至誠篤実の人にして、多年地元町会長を歴任、内外の信望も厚かったが、昭和十五年八月三日七十三才にて長逝せらる。

元福田船具店主

故玉上清吉

三桝屋玉上商店は明治十四年先代玉上磯吉氏に依り創業さる。

清吉氏は明治十六年二月三日木挽町で生れ、後玉上商店に入り、明治三十六年先代の跡を引き継がれた。

爾来幾多の苦難を堪え忍んで運営に当られ旺盛の気運よく、難関を切り開いて繁栄されたのである。一方石田、岡田氏等と共に吾が業界の育成にも多大の尽力をされしが健康上から昭和六年船具商を廃業された。

資性敏達にして該博な識見を具えて居たが昭和二十年九月十四日幽明境をことにされたのであった。

元玉上船具店主

故石塚孫兵衛

同氏は埼玉県南埼玉郡大相模村、浅見唯次氏の弟として生れ小学校卒業の明治三十年、十三才で上京した。当時箱崎町二丁目十九番地にあった石塚要助商店に見習として入店、刻苦勉励、加えて生来の頭脳明晰が益々発揮されて数理に長じ、同四十四年四月要助氏に嘱望されて養子として家督を継承した以来敏腕をうたわれ大正七・八年の好景気に便乗して雄飛を遂げ、其後の崩落にもよく切り抜けて手腕を振い、昭和十一年には川口市に米糠油製造会社を設立して社会に貢献する処大であった。

持病が昂じて、昭和十九年九月十八日遂に薬石効なく死去された。享年五十八才。

元石塚船具店主

故原善造

氏は明治十六年九月十六日鳥取県鳥取市湯所町。原金次郎氏の二男として生る。

明治三十二年四月、十六才にして上京京橋区湊町大井川船灯店に入社し、あらゆる困難に堪え誠実に勤続された。明治三十七年日露戦役に従軍し、乃木将軍麾下の赤坂第三聯隊に所属鉄嶺、奉天会戦に参加目覚しき偉功を樹て勲七等を授与された。

明治四十年陸軍省よりの一時賜金三百円を資本として、東湊町一丁目河岸に華々しく原船灯店を開業するに至ったのである。

其の後専心企業の運営に努力された結果逓信省型式技認工場の指定を受け本多商店、磐城硝子株式会社と共に船灯具の生産に終始一貫尽力された。

資性温順にして協調的精神に富み、故石田、岡田氏に協力して東京船

具業界の向上発展に大きく寄与され、恂晩年隠居して専心持病の療養に努められて居たが、昭和二十九年七月二十二日七十一才を以て物故された。

初代原船灯具店主

故 石川惣太郎

石川商工株式会社は東都船具業界の一流会社にして現在の社長は二代目である。

先代石川惣太郎氏は横浜市出身にして明治十二年十月一日忠兵衛氏長男として出生。

船具加工の技術習得の為の当時加工業界の指導的立場にあった片桐製帆所に入り堅忍不抜よく挫折することなく多年に亘り研鑽修業された。大正二年七月現在の場所に独立開業され今日の基礎を築かれたのである。

氏は生来温厚篤実にして活動力に富み特に子弟の育成に対しては、慈父の即き態度を以て臨み洵に人間味溢れる有徳の士であった。創業後店運は日増しに隆盛へと推移した。

昭和五年三月二日五十二才で早逝された事は吾が船具工業界の為めかえすがえすも残念至極であった。

初代石川製帆所主

故 杉田八郎

氏は千葉県夷隅郡御宿町の出身にして明治二十三年一月十五日生。明治三十六年四月、十三才で大村五左衛門商店に入店した。以来刻苦精励実に涙ぐましき努力を続けられ模範店員として其の将来を属望された。大正十二年関東大震災を契機に同店を退社し現在の深川永代一丁目に船具商を開業されたのである。当時の世情はかつてない不況にさらされて居たが敢闘よく今日の基礎を築かれたのであった。

資性重厚、体駆堂々商才衆に優れ更に将来の発展を大きく約束されて居たが惜しくも昭和十二年二月二十日四十七才を一期として他界された事は誠に痛惜の念に堪えない。

夫の死後妻女よね氏はあらゆる辛酸を嘗めながら残された遺子の養育と商店の経営に当られ、遂に今日の杉田一族の隆昌を築き上げられたのである。誠に貞婦の亀鑑と称すべきである。

初代杉田船具店主

故 古沢卯之助

先代古沢卯之助氏は茨城県稲敷郡太田村の出身にして小学校卒業後上京して本所亀屋船具店に就職した。多年修業の上主家の許しを得て明治四十三年四月深川扇橋三丁目に独立開業し小名木川筋を中心に船具並びに船用品の加工に着手された。堅実な運営方針は需要先の信頼を得て其業態は著しく発展増長した。特に妻女たみ氏の内助の功は業界周知の処である。

氏は着実温厚にして業界稀に見る勤勉家であったが、昭和二十年三月十日の戦災に依り五十四才を以て此の世を去られた。

初代古沢船具店主

故 手 塚 伸 一

氏は徳島県の出身にして中学卒業後上京して実父経営の手塚商店にはいられた。

同店は古く徳川時代からの創業にして阿波特産の藍玉の販売を業とし併せて船具品の取扱いをも兼業されて居た。時代の進運と共に藍玉の方は海外よりの化学染料におされ売行不振に至りしため、漸次船具品販売へと主力を転ぜられた。

堅実な営業方針に依り一段と繁栄の域に達したが大東亜戦争に伴う企業整備の際廃業されたのである。

氏は熱誠奮闘の七にして商才に優れて居たが昭和二十八年十月死去された。

元手塚船具店主

故 田 中 真 一

氏は三重県宇治山田市、白井徳衛氏の長男に生れ県立宇治山田商業学校を経て、中央大学専門部を卒業した。其の後東洋葉煙草会社に入り後田中益次郎商店の養子として父祖伝来の業を継承し社業の発展に昼夜を分かたず奮闘努力された。其の労苦が実り着々業績を収め今日の盛大を致さしめたのである。

戦時中企業整備に依り東京船用品配給株式会社が創立されたるや業界の信望を得て常務取締役に推選され、天稟の才腕を遺憾なく発揮して其の運営に当られると共に組合再建にも率先して努力された。

氏は資性温健且つ福徳円満にして信義を重んじ、後進青年の指標として敬仰すべき雄才であった。前途幾春秋に富める身でありながら。昭和二十七年七月空しく逝去された事は吾が業界にとりて大きな損失と言わざるを得ない。

四代目田中産業株式会社社長
前東京船具協会理事長

故 鈴 木 春 蔵

氏は埼玉県吉川町高富の出身である。十四才の時日本橋箱崎町の船具商石塚要助商店に小僧奉公に入りあらゆる苦難を重ねた。

明治四十三年三月箱崎橋際に鈴春商店を開業し鋭意家業の発展に努められたのである。

勤倹力行、常に無駄程恐ろしいものはないとの心情の下に一本の釘、一枚の紙、瞬時の時間も勿そかにせず常に自分の身を引緊め節約を旨とされていたのであった。其の点洵に後輩者の師表として推讃すべき人である。

昭和三十一年八月十三日六十九才を以て此の世を終わられた。

初代鈴春船具店主

故 田 中 正 一

氏は広島県の出身にして明治二十八年八月十一日生る。十七才にして故郷を出て大阪の竹原船具店に入社した

大正十三年四月一日上京して成瀬勝蔵氏経営の鈴木船具店に入り、粉

骨砕身、主家の為めに努力された。仕事に対する燃ゆるが如き情熱と敢闘振りは正に他に其の類例を見ないところである。昭和二十三年三月中央区新川二丁目に於て独立されたが戦後の混乱時に対処してよく其の方途をあやまたず勇往邁進された為め現在の堂々たる業礎を築かれたのである。

昭和三十二年十月三日六十二才にして他界せらる。

初代田中船用品株式会社社長

故横井新太郎

氏は明治三十二年三月三十日愛知県津島市横井惣左ヱ門の三男に生る。大正十年近衛聯隊除隊後姻戚の横浜市垂見船具店に入店して商法の道を学んだ。昭和七年現住所に新規開業し以来あらゆる困難を排して家業の繁栄に専心努力され、遂に今日の成果を挙げられたのである。

戦時中業界の企業整備の為め創立された東京船用品株式会社の常務取締役として終始一貫奮闘努力されたが、昭和三十三年二月十一日不図した病気で急逝された事は洵に痛恨の極みである。氏は豪毅果断、決断力に富み一旦こうと思った事は必らず貫徹せづんば止まざるの正義的観念の持主であった。

初代垂見船具株式会社社長
前東京船用品株式会社常務取締役

故的場丹蔵

氏は千葉県安房郡千倉町出身にして明治二十四年十二月十八日生る。大正二年三月上京して石川惣太郎商店に技術習得のため入店し刻苦精励の結果大正十三年同店を円満退職し京橋区越前堀に的場製帆所を創立した。業務拡充のため昭和二年深川永代一丁目の現住所に移転し船具製造に粉骨砕心よく初期の目的を達せられた。

資性温順にして一般よりの信望も一段と厚かったが昭和三十三年三月二十三日長逝された。

初代的場船具加工所

故林滝蔵

氏は埼玉県南埼玉郡千疋村出身にして明治十九年十一月二十九日に生る。

明治三十七年三月同郡越ヶ谷小学校高等科を卒業し、大相模小学校に奉職して教鞭をとられた。

大正六年十二月教職を辞して日本橋箱崎町の船具商石塚要助商店に勤務することとなり、昭和二十年三月迄実に二十八年の長きに亘り全力を傾注して主家の為めに尽された。

終戦後同店を退職して小網町に三和漁網撚糸株式会社を設立し、戦後の機運に乗じ輝しい成果を挙げられたのである。

昭和二十七年三月同社を退き埼玉県越ヶ谷に隠遁し余生を送って居たが三十四年三月三日散る花と共に七十二才を以て此の世を去られた。

氏は誠実の人にして人の為め、世の為に全身全霊を打ち込んで当られた。

元石塚船具店支配人

故倉田万治郎

氏は千葉県東葛飾郡布佐町の出身にして明治四十年四月尋常高等小学校卒業後上京して北山船具店に入店した。

店主北山喜一郎氏に仕へて実に二十六年の長きに亘り終始一貫主家の発展に寄与されたのである。随って、店主の信望も一段と厚く大正七年妻千代氏を迎えて一男一女を設けたが後長男亀三郎氏は大東亜戦争の際、フイリツピンに於てかくかくたる武勲をたて戦死された。

昭和七年主人北山喜一郎氏より同店の事業を継承して其の経営に専念し業績は愈々発展上昇されたが、昭和十七年企業整備の際同業者と共に東京船用品配給株式会社に統合した。

以来同社に勤続し昭和三十一年五月後進に道を譲る為め常務取締役の地位を退任す。

才気煥発元気旺盛にして一方町会長等公共自治方面にも大いに尽力されたが昭和三十四年十一月十日六十六才を一期として此の世を去られた事は洵に哀惜の念に堪えない。

前北山船具店主
前東京船用品株式会社常務取締役

故山本光雄

氏は大分県大分市の出身にして明治二十八年二月六日小松恒氏の四男に生れ、上京して慶応義塾大学の理財科を卒業し後山本家の名籍を継いだ。

招かれて越前堀綱金商店に入り奮闘精励、社業の興隆に尽粋するところ頗る大であった大正十三年三月多年の宿望を達して越前堀一丁目に合資会社山元商店を開業し、ワイヤーロープ、マニラロープ、船用品を始め上木鉱工用品等を手広く扱い経営の堅実と相俟って内外に其の名を知られるに至った。

現在同所に於て東京藤井産業株式会社を経営して居られる藤井益雄氏も嘗つては同商店に勤務し直接指導を受けた一人なのである。

一方船具業界の育成についても氏は率先して協力献身された事は既に業界周知の処である。昭和十七年十月企業整備令に基き山元商店を閉鎖して東京船用品配給株式会社に加盟統合された。

昭和十四年三月、東京船具商業組合常任理事就任。
昭和十四年十一月、日本船具商業組合連合会常務理事就任。
昭和十六年十月、東京船用品配給株式会社専務取締役就任。
昭和十六年十二月、日本船用品統制株式会社常務取締役就任。
昭和二十二年九月、三洋商事株式会社専務取締役就任。

氏は資性重厚にして明徹な頭脳の所有者であった。

病気の為め其の後一切の要職を辞し、引続き自宅に於て療養中であったが、昭和三十五年四月四日六十六才を一期として永眠された事は洵に痛恨の念に堪えず衷心より其の冥福を御祈りする次第である。

元山元船具店主
前三洋商事株式会社専務取締役

編集後記

再建満十周年を記念し、東京船具業界の流れを点描しようとして組合員各位に原稿を依頼しましたところ、相談役を始め皆さんから貴重な玉稿を御寄せくだされました事は洵に感謝に堪えません。

然しながら相次ぐ震災戦災等で其の資料も多く失われ、完全な蒐集が出来ず、加えて編集子の才の貧困とで其の全貌を描き得なかった事を洵に申訳なく存じて居ります。

尚、個性ある業界史とするため、寄稿された原稿は仮名使いを改める程度で、本文には殆んど手を加えることをしませんでした。このために一貫性を欠き、多少読み憎い箇所も生じたかと思いますが、その点御了承を願います。

茲に発刊に当り各位の御協力を深謝致します。

編集委員長　加藤政次郎
委員　篠田隆太郎
委員　稲垣勝蔵
委員　岡田光雄
委員　石田恒夫
監修　塚本常五郎

昭和三十五年五月二十五日印刷
昭和三十五年六月一日発行

編集　加藤政次郎
発行　篠田隆太郎

東京都中央区霊岸島一の一四
印刷所　泰秀印刷工業株式会社

東京都中央区霊岸島一の十六
発行所　東京船具同業組

■社名索引　㈱㈲などは省略

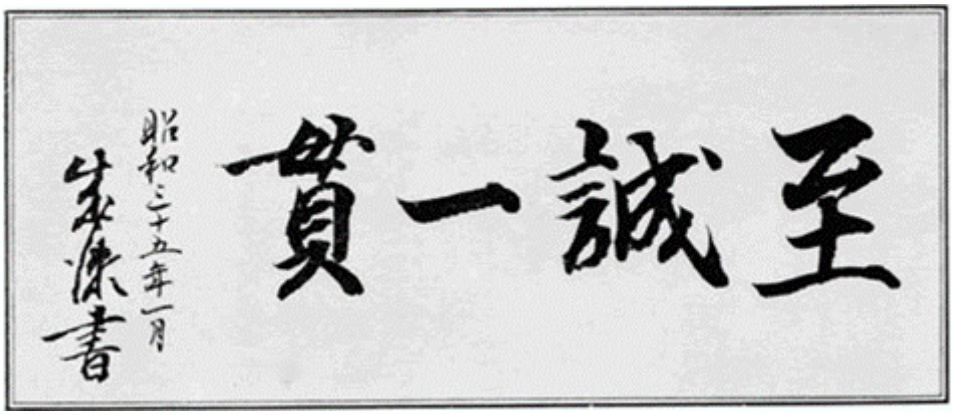
あ	石川商工	23
	五十鈴商会	33
	稲垣株式会社	24
	岩田商店	26
	太田船具	31
か	加藤船具商会	34
	木村商店	58
	綱庄石田商店	25
さ	斎藤船具店	53
	三共商店	36
	三洋商事	43
	杉田産業	57
	杉田船用品	56
	鈴春商店	55
た	大亜工業	35
	大和産業	32
	大洋船具	46
	高浦船舶用品	40
	橘工業	45
	田中産業	38
	田中船用品	39
	垂見船具	37
	東京船用品	54
	東京藤井産業	49
	道源加工所	30
な	永田船具加工	42
	日光商事	51
は	羽成製帆所	27
	原善船舶灯具製作所	28
	氷川船用品	44
	古沢工業	50
	堀内商店	29
ま	松井商事	60
	的場船具工業所	47
	水野船具店	59
	三好産業	52

■名士人事録索引

あ	石川惣太郎	石川商工	104
	石田由松	綱庄石田商店	101
	石塚孫兵衛	石塚商店	103
	宇田川清兵衛	宇田川商店	100
	大村五左衛門	大村商店	100
	岡田仙太郎	大和産業	101
か	北山喜一郎	北山船具店	101
	倉田万治郎	北山船具店	107
さ	篠田定三	篠田船具店	102
	杉田八郎	杉田商店	104
	鈴木春蔵	鈴春商店	105
	鈴木彌兵衛	鈴木船具店	100
た	高浦高太郎	高浦船舶用品	98
	高橋九六	高橋九六商店	99
	田中真一	田中商店	105
	田中正一	田中船用品	105
	谷村　勇	善隣産業	98
	玉上清吉	玉上商店	103
	塚本常五郎	東京船用品	98
	手塚伸一	手塚商店	105
な	成瀬勝蔵	三洋商事	97
は	林　滝蔵	三和漁網撚糸	106
	原　善造	原善商店	103
	福田清八	福田清八商店	102
	古沢卯之助	古沢商店	104
	本間淳助	本間産業	99
ま	前原徳蔵	前原徳蔵商店	102
	的場丹蔵	的場製帆所	106
や	山本光雄	山元商店	107
	横井新太郎	垂見船具	106

■回顧録　索引

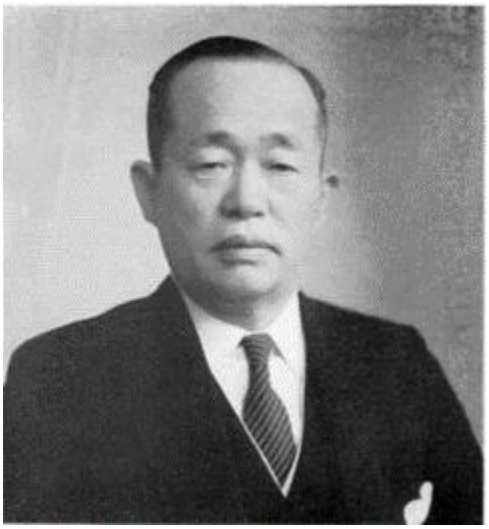
石田恒夫	感謝	85
稲垣勝蔵	大正初期からの私の経歴と思い出	80
岡田光雄	数々の思い出	82
加藤政次郎	過ぎし日の思い出	67
斎藤清三	想い起すまま	77
篠田隆太郎	船具商の今昔	73
谷村勇	回顧	82
持田桂一	再建満十周年に寄せて	84
座談会	船具屋の思い出話	87
明治初期における東京港		90
船舶用品の価格の変遷		92
関東震災前の船具商の所在地		95



成 瀬 勝 蔵 書

東京船具同業組合　組　　合　　旗

現理事長、副理事長



理事長　加藤政次郎氏

副理事長　岡田光雄氏

副理事長　篠田隆太郎氏

現　相　談　役

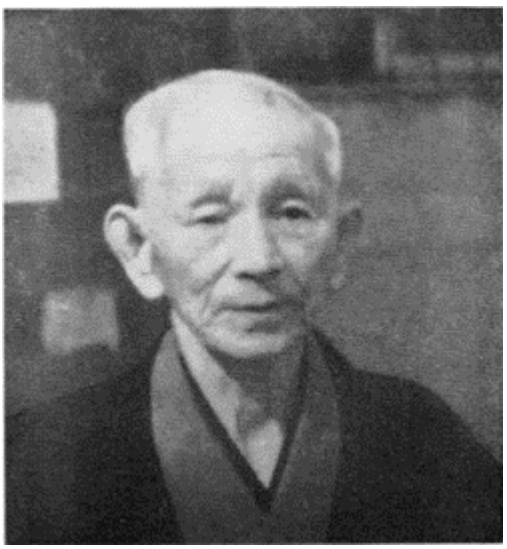
相 談 役　　成 瀬 勝 蔵 氏

相 談 役　　塚 本 常 五 郎

現　　役　　員

後列左から　岡田光雄、石田恒夫、田中弘道、稲垣勝蔵、石川惣太郎、山中健之助、望田桂一
前列左から　　斎藤清三、　篠田隆太郎、　加藤政次郎、　羽成福太郎、　角谷佐蔵

元会長、副会長、元組合長

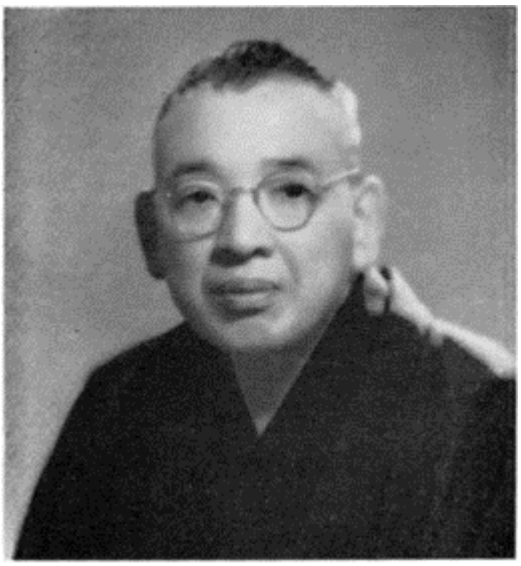


元東京船具同盟会会長　故　石田由松氏

元東京船具商業組合長　谷村　勇氏

元東京船具同盟会副会長　故　岡田仙太郎氏

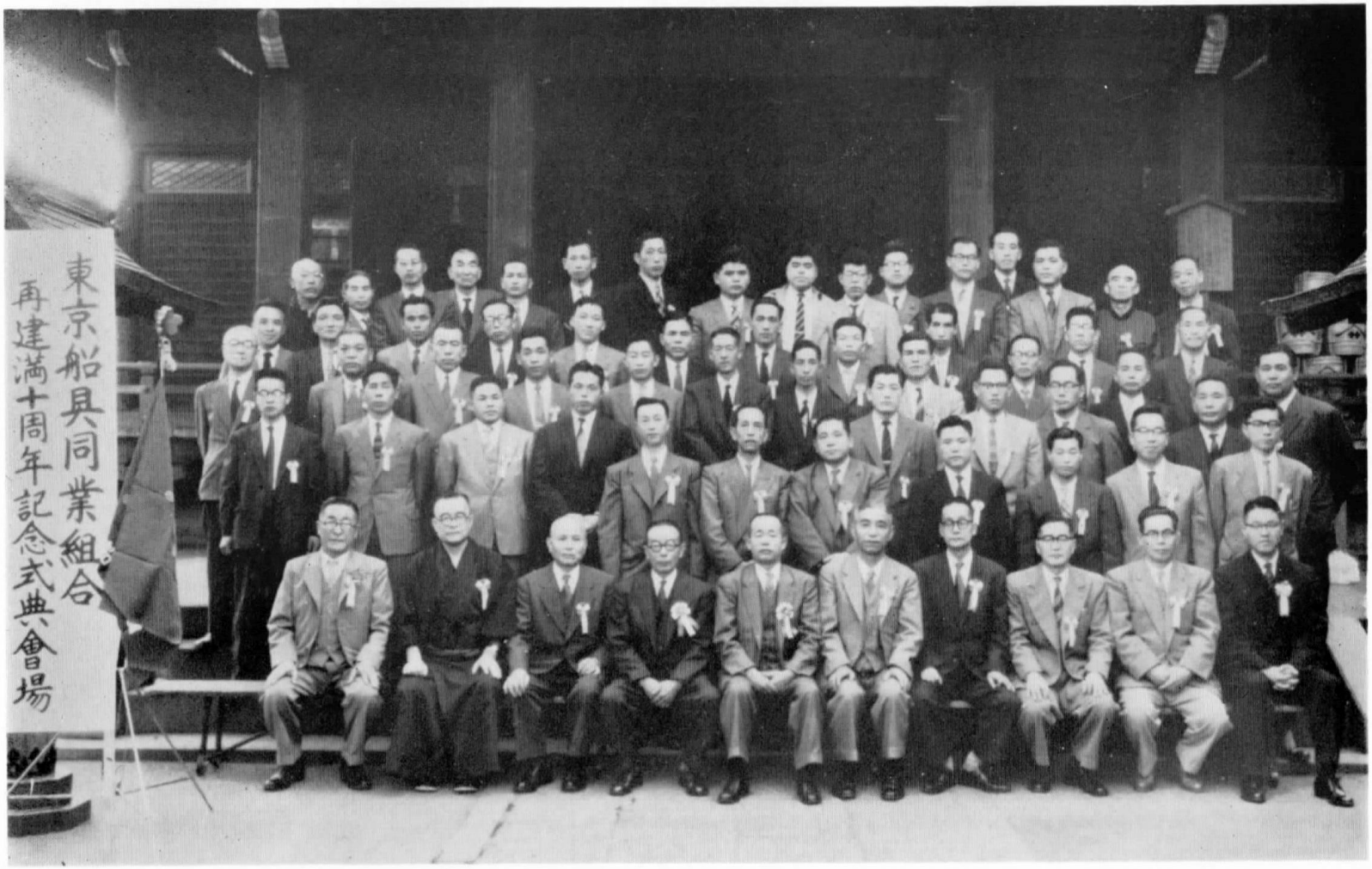
前理事長、前相談役



前理事長　故　田中真一氏

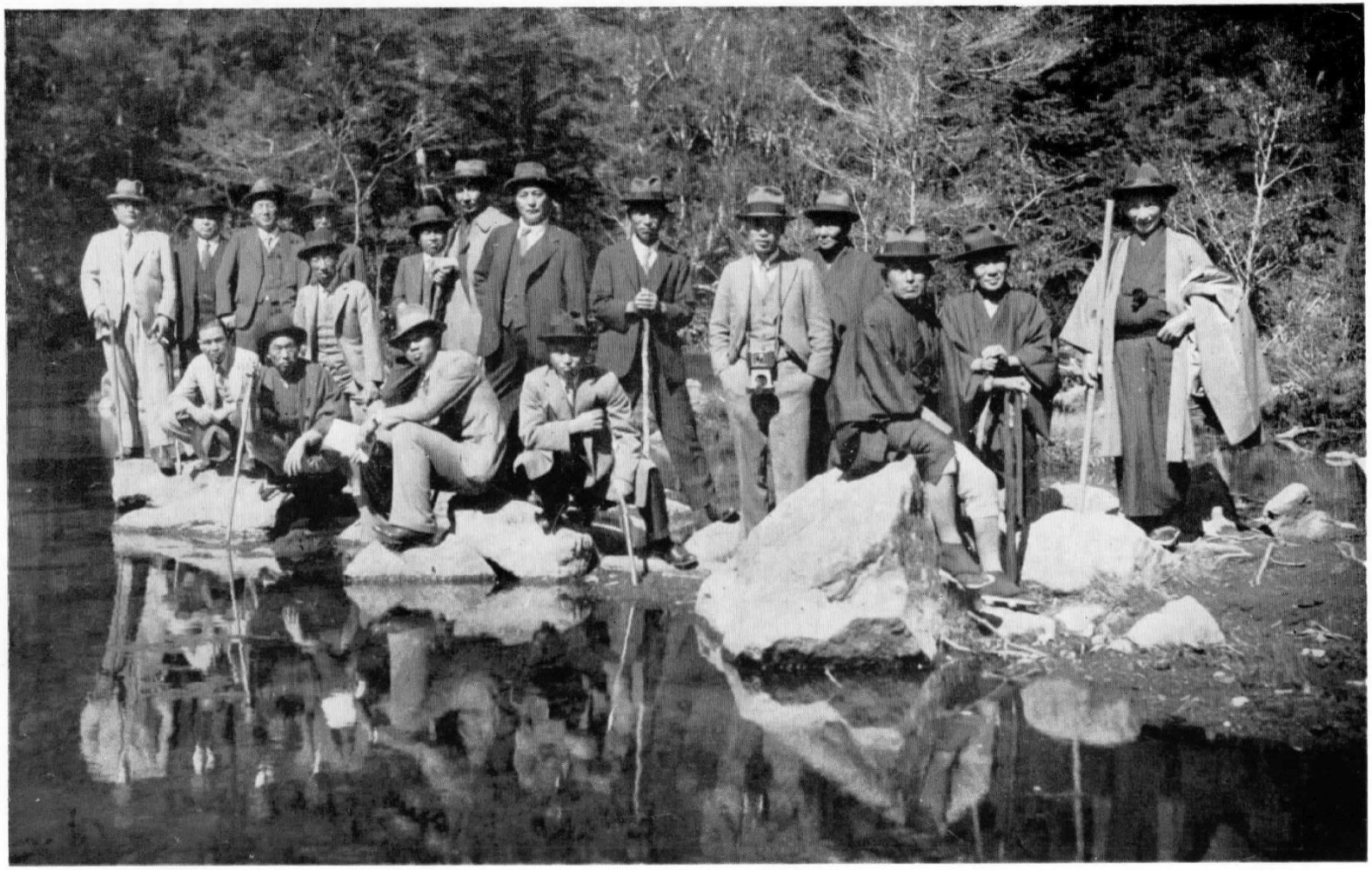
前相談役　故　山本光雄氏

前相談役　高浦高太郎氏


東京船具同業組合
再建満十周年記念式典會場

関東大震災前の築地河岸

大正十五年東京製綱株式会社川崎工場見学

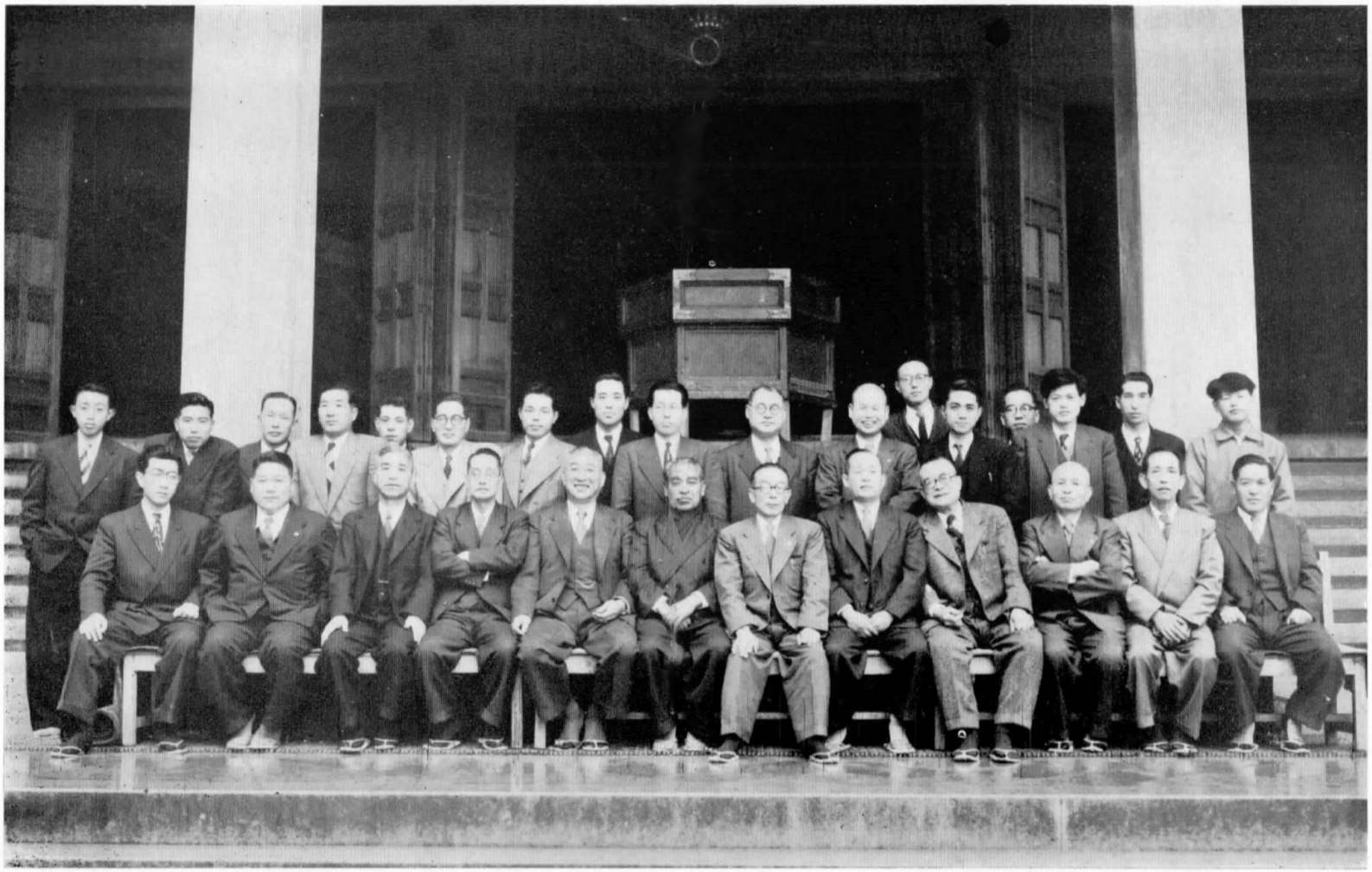


昭和九年　上　高　地

昭和二十四年十月　　湯河原温泉

昭和二十九年　　熱　海　温　泉

懇　親　旅　行



昭和三十年三月　　豊川稲荷参拝

懇　親　旅　行

昭和三十一年四月　　湯河原温泉

第一回　野球大会優勝チーム

昭和三十四年十一月　　砂町グランド